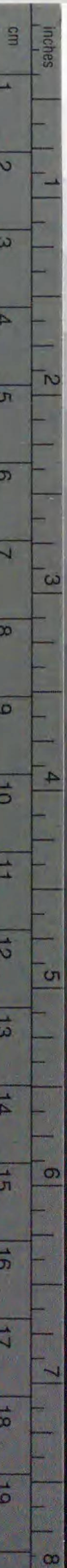


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
1	2	3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25	26	27

210.58
1653d



00229782

19231
978

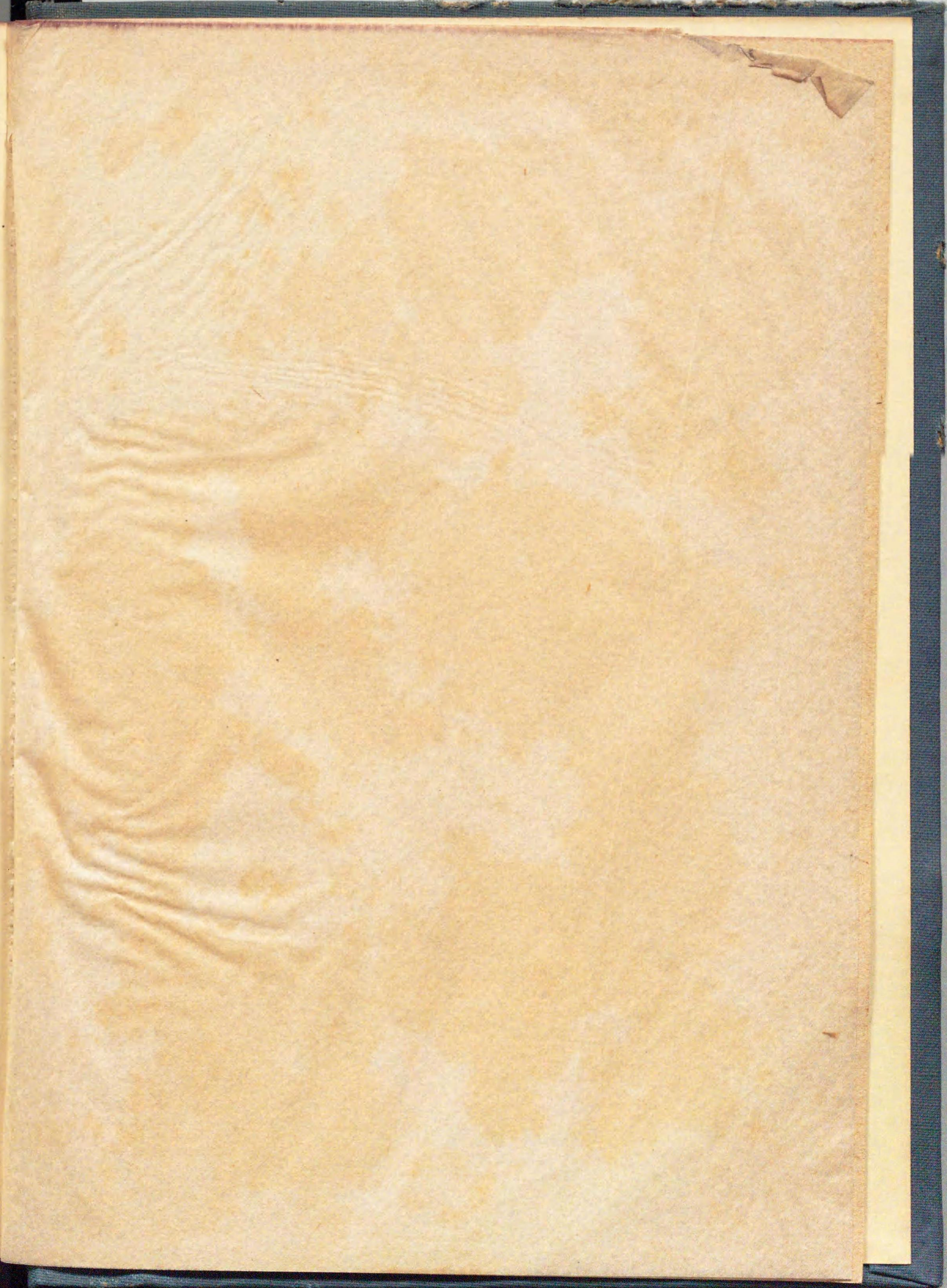
企畫部



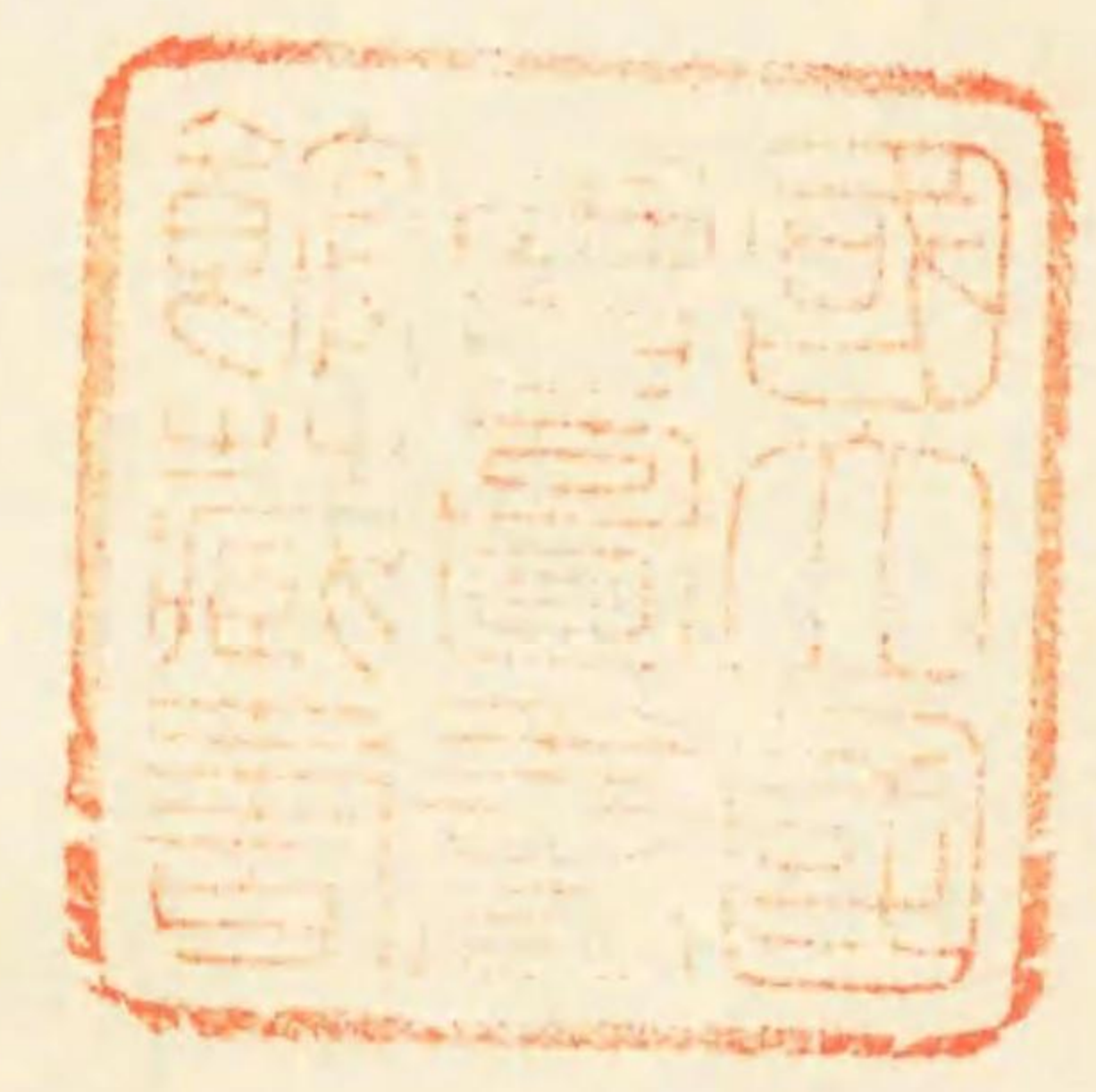
大日本維新史料

36 |

大日本維新史料



210.58
I653d
II



229782

大日本維新史料 第三編ノ五

目次

安政五年

四月

十一日 征夷大將軍德川家定夫人敬子ノ侍女幾島、大將軍繼嗣問題ニ關スル幕府大奥ノ事情ヲ左大臣近衛忠熙ニ報ズ。……………一

同日 福井藩士橋本左内景 京都ヨリ歸府シ、明日、京情ヲ藩主松平慶永ニ報告ス。十八日、慶永、左内ヲ側向頭取格手許用掛ト爲ス。……………五

十二日 議奏・武家傳奏及學習院學頭等ノ學習院ニ於ケル精勤ヲ賞シ、金ヲ賜フ。……………三五

同日 幕府、甲州街道上野原・下鳥澤・上鳥澤・猿橋・駒橋・大月・下花咲・上花咲・下初狩・中初狩十宿ノ夫馬賃錢割増ノ五箇年延期ヲ令ス……………四一

同日 幕府、廣島藩主淺野齊肅ノ退隱ヲ聽シ、嫡子慶熾ヲシテ其家ヲ襲ガシ……………四一

目次 安政五年四月

ム。……………四四

同日 庄内藩世子酒井忠恕、領内與内坂ニ於テ藩士ノ訓練ヲ閱ス。……………五一

同日 大野藩主土井利忠、特ニ租入ノ一部ヲ割キ、文武獎勵ノ費ニ充ツルコトヲ藩内ニ達ス。……………五四

十三日 蘭國領事「クルチウス」、老中松平忠固ヲ其邸ニ訪ヒ、條約改訂ヲ要求ス。……………六〇

同日 川越藩主松平直侯、書ヲ幕府ニ上リ、藩帑窮乏ノ狀ヲ陳ジ、借入金ノ返納ヲ猶豫センコトヲ請フ。……………七六

同日 彦根藩主長野主膳、書ヲ藩主井伊直弼ニ上リ、諸侯抑制ノ策ヲ閣老ニ進言スベキコト、水戸藩ト提携ノ不可ナルコト等ヲ切論ス。……………八七

同日 鹿兒島藩主島津齊彬、外交問題ニ關スル京都ノ情報ヲ得、之ヲ重臣ニ告ゲ、其對策ヲ諮フ。是日、家老新納駿河、意見書ヲ上ル。……………九一

十四日 鹿兒島藩主島津齊彬、領内吉野原ニ於テ藩士ノ馬追ヲ閱シ、歸途、銃藥水車所ヲ檢ス。……………一二一

十五日 議奏・武家傳奏及曩ニ國事ニ關シテ進言セシ堂上・非藏人等ノ忠勤ヲ

賞シ、金ヲ賜フ。……………一二三

同日 幕府、高松藩主松平頼胤ノ歸藩ヲ停ム。……………一三五

同日 水口藩主加藤明軌、參勤ニ依リ、丸岡藩主有馬道純、歸藩ニ依リ、各登營ス。……………一三八

同日 勘定奉行永井尙志・長崎奉行岡部長常等、眞福寺ニ於テ蘭國領事「クルチウス」ト會シ、條約改訂ニ關シ、協議ス。……………一四〇

同日 佐賀藩主鍋島齊正、長崎ニ赴キ^{十一日}是日、新造船晨風丸ヲ檢シ、マタ神島砲臺警守藩士ノ砲術及飽浦工作場ヲ覽ル。^{二十日、東蝦夷地・歸城ス。}……………一五五

同日 箱館奉行村垣範正、箱館ヲ發シ、蝦夷地海岸巡檢ノ途ニ上ル。^{東蝦夷地・國後・樺}……………一五七

十六日 賀茂祭、特ニ外患ヲ祈禳ス。……………二九一

同日 福井藩主松平慶永、老中松平忠固ト會シ、一橋家主徳川慶喜ヲ大將軍繼嗣ニ擁立センコトヲ説ク。……………三二二

同日 前水戸藩主徳川齊昭、豫メ幕府ノ外交處置諮問ニ對スル答申書案ヲ草シ、福井藩主松平慶永ニ内議ス。^{四日}是日、齊昭、復々外交ニ關スル意

見三策ヲ慶永ニ密示シ、所見ヲ問フ。……………三二八

十八日 幕府、側衆石河政平ヲ用取次ト爲ス。……………三五〇

同日 宇和島藩主伊達宗城、江戸ニ至ル。四月十日 是日、福井藩主松平慶永・高知藩主山内豊信、宗城ヲ其邸ニ訪ヒ、時事ヲ談ズ。……………三五二

十九日 會津藩主松平容保・米澤藩主上杉齊憲・宇和島藩主伊達宗城・中村藩主相馬充胤・臼杵藩主稻葉觀通・府中長門藩主毛利元周・出石藩主仙石久利・廣瀬藩主松平直諒・高鍋藩主秋月種殷・本庄藩主六郷政殷・佐伯藩主毛利高泰・大溝藩主分部光貞・庭瀬藩主板倉勝全・仁正寺藩主市橋長和・三月月藩主森俊滋・新谷藩主加藤泰理・多度津藩主京極高琢・下手渡藩主立花種恭、參勤ニ依リ、各登營ス。熊本藩主細川齊護・富山藩主前田利聲、疾ニ依リ、并ニ使者ヲシテ登營、參勤ノ禮ヲ致サシム。……………三七八

同日 是ヨリ先、幕府、箱館奉行竹内保徳等ノ議ヲ容レ、箱館ニ於テ外國人ノ遊興ヲ許シ、其取締事項ヲ上陳セシム。安政四年十二月二十四日 保徳等、乃チ之ヲ具申シ、指令ヲ請フ。二月十八日 是日、幕府、批シテ遊廓ノ地域ヲ定メ、

外國人休息所ノ新設ヲ許シ、遊女ノ外國船ニ赴クヲ禁ズ。……………三八七

二十日 老中堀田正睦・勘定奉行川路聖謨等、京都ヨリ歸府ス。明日、正睦、登營、大將軍徳川家定ニ謁ス。二十八日、聖謨等登城、同ジク大將軍ニ謁ス。……………四一五

二十一日 幕府、飯山藩主本多助賢ノ致仕ヲ聽シ、養子助實ヲシテ家ヲ繼ガシム。……………四五四

二十二日 皇姉淑子内親王、袖留ノ儀ヲ行フ。……………四五七

同日 幕府、福井藩主松平慶永ノ歸藩ヲ停ム。……………四六四

同日 柳河藩主立花鑑寛、書ヲ老中堀田正睦ニ贈リ、條約調印ニ關スル所見ヲ述ブ。……………四六八

二十三日 幕府、彦根藩主井伊直弼ヲ以テ大老ト爲ス。……………四七二

二十四日 老中堀田正睦、米國總領事「ハリス」ト會シ、條約調印ノ延期ヲ議ス。尋デ二十六・二十八・二十九日 下田奉行井上清直・米使應接掛目付岩瀬忠震ヲシテ復タ之ヲ議セシム。……………五三〇

同日 大坂町奉行、市民ニ種痘ノ効果ヲ諭シ、古手町種痘所嘉永二年、蘭法醫緒方洪庵・山田金江等ノ創設ニ係ル。ニ就テ、小兒ノ種痘ヲ受ケシム。……………五七一

同日 萩藩主毛利慶親、時勢ニ鑑ミ、藩士ニ諭シテ文武ニ勗メシム。……………五七三

二十五日 幕府、三家以下諸侯ニ登營ヲ命ジ、條約調印ニ關スル勅書ヲ示シ、申
 ネテ意見ヲ徵ス。……………五七七

同日 幕府、令シテ本月歸暇諸侯ノ發途ヲ停メ、五月迄滯府セシム。……………六五九

同日 外交措置及將軍建儲ニ關シ、大老井伊直弼、老中堀田正睦ト議合ハズ。
 幕府有司、動搖ス。是日、福井藩主松平慶永、家臣橋本左内ヲ目付岩
 瀬忠震ニ遣ハシ、其内情ヲ探ラシム。尋デ二十七日慶永、マタ自ラ正睦ヲ
 訪ヒ之ヲ糺シ、宇和島藩主伊達宗城モ、同ジク直弼ヲ訪ヒ、問フトコ
 ロアリ。直弼、宗城ニ正睦ノ罷免及和歌山藩主徳川慶福ノ將軍繼嗣タ
 ルベキヲ告グ。……………六六二

(目次終)



大日本維新史料 第三編ノ五

安政五年戊午 (紀元二五二八年 西曆一八五八年)

四月 小盡 朔丙午

十一日辰丙 征夷大將軍徳川家定夫人敬子ノ侍女幾島、大將軍繼嗣問題
 ニ關スル幕府大奥ノ事情ヲ左大臣近衛忠熙ニ報ズ。

〔將軍徳川家定 夫人敬子附〕 老女幾島書翰〔公爵島津重豪所藏本 安政雜集所載〕

○四月十一日近衛忠熙宛

上

俣 不 存

極御内用、乍恐御直覽願奉候、

四月十一日認メ、

乍恐極内々御側迄申上奉度候、兩御地御揃被遊御機嫌よく被爲成候御事、御めて度有難り
 奉、猶

安政五年四月十一日

安政五年四月十一日

二

其御所様益御機嫌よく被爲成候御事、猶其後ハ御つゝき被遊、いよ／＼御よし／＼の御めてとく、乍恐有難奉存候、左様ニ御座候得ハ、極御内々御書御上被遊候ニ付、又々六日切にて仕出しさし上奉候、左候所、御封中に御内々上より御出被進候由、いゝ様の御事に被爲在候哉、御用向の御次第ハ、

御臺様ニ御委敷ハ御伺不被遊候へ共、何分御願通り御成就の様、幾重ニ御取成御願被遊度との御事よし、御伺被遊候間、其通りハ御直書ニても仰上られ候ま、何分御都合向ハ分て御願被遊候御事ニ被爲在候、左候所、極内々外ニ御願被遊度御事ハ、先日も段々申上奉り候通り、歌印(歌)々自分之願の様ニ申上、御取次ニて、先日之事ニ御願被遊候の候間、此程の御返書もとふそ早束御直ニ御覽ニも御入被遊候て、仰上られ度、こゝハ思召上られ、何分天下の御爲と能々其段も御心得なあら、先同人に御伺せ被遊候上ニて御さ無候てハ、御直ニ

御覽ニ御入被遊候御事も御出来ぬ候ニ付、早束御伺せ被遊候て、直ニ御覽に御入被遊候半と御沙との所、万歌兩人申談しニて、先此御返書ハ、御覽ニハ御入不被遊候様申上、私共々程よく申上奉候間、もし御直に御尋も被遊候ハ、我々々申上候通りの御事、御返書參り候と斗り仰上られ候様ニ申上られ候由故、實ハとふも何事之御返書ニ仰進られ候

建儲問題ニ
就キ幹旋ヲ
請フ

御見合せも、未

上ニハ仰上られ候御事ニ付、誠ニ／＼兩人の心中、いゝの存寄ニての事や、斗ふとくハ御座候へとも、とふもこゝハ思召なニハ叶せられ候、とふそとも角も其御地の思召様も、上ニても有難御承知の被爲在候様ニ、先日之御返書も早く御覽ニ御入被遊度思召なあら、右の御次第故、幸此度御直に御一封御上被遊度との御事故、何分にも定めし是もこゝ御す以さつてハ、先日之御返書御覽被遊候上ニてハ、とてもさ度御願ハ御出来不被遊候御事ニ付、先御覽不被遊候先ニ、又々何の御直ニ御願の御事ニてハ被爲在候哉と實ハ思召候間、とふそ御幸の御事ニ付、其御地ニて天下太平、御家の御爲厚思召様の御事、且又

其御所様ニも、兩御地の御事深く思召上られ、御心配様ニて被爲在候へ共、不容易御時節の御事故、深く万端を御勘考被遊候段を、とふそ有るとく御承知被爲在候様仰進られ候ハ、又能々御あつても可被在、何分／＼表・奥共、とく右御委しき御事ハ、中道ニて申上レニ取計ひ多候様ニ思召上られ候間、實ハこゝハ誠ニ御氣を御も被遊、万端随分御見ありも能被爲在候御事あら、とふも／＼御直に仰上られ候御事さへもさへ候人々御さ候間、實ハいゝ程も／＼御残念ニ思召被爲入候御事故、とふそ此度御幸の御事

安政五年四月十一日

三

安政五年四月十一日

四

故、御返書御委敷進られ、其御中へ、先日

御臺様へも委しく御沙汰の御事之仰進られ候御通りと申御事も御入被遊候て、思ふ所ら御あつてんの被爲成候様を仰被進戴度、猶又此後もとふそ右様こそにて御取次被遊候て、折々の御書御取あらし等も被遊候ハ、別るハ、兩御地の御爲に被爲成候御事と存上奉候間、とふそ宜しく御組取被遊、何分ハ、こも宜しく願奉候様仰付られ候ま、先々急荒ましあら此とん申上奉度候、とふも奥向一統（一統）印をきらひ候に付、万事殊の外むつあしくと存上奉候、誠こ壹人も天下の御爲と申處迄に心付候者ハ御座無、扱々あけるあしき事よて御座候、御す以察願奉候、猶又

奥向一同慶
喜ヲ嫉忌ス

將軍夫人ニ
叱責ノ書ヲ
賜ハリタシ

御臺様々先日之の御返書此度御上被遊候て、未御返書御覽を御入不被遊候御事と仰上られ候半ま、とふそ其御事をきむしく御臺様を御あり被遊、天下の御爲、御家の御爲を思召不申様の御事にてハ、御濟不被遊候と御きむしく仰進られ候御書を、今一度被進被下度、左候ハ、夫を万歌兩人に見せ被遊候、の様を御ありをいさき、恐入候御事と仰被爲聞候ハ、少しハ心も入可申と思召され候ま、とふそ其御事も願候様仰付られ候、いさ様御きむしく御ありを御戴被遊候ても、上の御爲を被遊候御事にて候へハ、少しもハ、こおに置せられ候てハ御い

とる不被遊候ま、恐入候へとも、能々願上くま候との御沙を被爲在候、何も宜しくハ、万端御願被遊候、猶又明十二日立の六日切にて仕出し候間、此御返書ハ、何とも御用多様の御事にて恐入ハ、參らざられ候へとも、とふそ御早く、又早便にて御仕出させ被遊御戴の様、此段もくまハ、願奉候様を仰付られ候、何もハ、追々色々極御内々申上伺奉度御事も御座候へ共、又の節万々申上奉へく、今日ハ先大急にて乍恐此よしまで申上奉候様仰付られ候、万万年めて度あしこ、
猶々、此ほとも御書付いと、き有あさく御禮申上奉り候、めて度あしこ、

四月十一日

福井藩士橋本左内綱紀

景岳

京都ヨリ歸府シ、明日、京情ヲ藩主松平慶永越前守

二報告ス。十八日、慶永、左内ナ側向頭取格手許用掛ト爲ス。

〔昨夢紀事〕

四月十一日、○中略

一、今晚、橋本左内、去ル三日京を立て薄暮到着せり、疲勞こより御斷り申上し故、御前へハ不被爲召、

四月十二日、橋本左内被召出、京師之狀情御尋あり、逐一申上候、午後政府へ呼出され、執

安政五年四月十一日

五

左内歸府ス

慶永京情ヲ
聽取ス

安政五年四月十一日

六

政初要路之面々一同承之たり、

〔福井藩士〕中根靱負書翰○橋本景岳全集所載

○四月十一日橋本左内宛

唯今竹腰兵部御逢中故、相濟次第可申上候、嘸御歡びと奉拜察居候、此頃中日々御噂有之事に御座候、

昨十日六つ時御認め之華帖、今十一日九つ時前相達拜誦、先以益御機嫌克奉恐悅候、隨て御安健御旅行、今夕は愈御着邸可相成旨拜誦、何分一日も早くと翹望之折柄、幸甚此事に御座候、〔三河石五郎・横山彌助・日辰五郎〕横溝も御同伴の趣、迅速之御旅程驚感之至御座候、偕俄に御半髪の趣に付縷々御細示、是は臨機應變の權宜にて、尋常を以て不可論事に候得ば、此度の儀は無御指支様取計ひ候間、是等の儀聊御心配なく候様にと存候事に候、何分無程拜誦萬々拜承可致候、大娛罷在候、此地も岩歸東以來頗艱難之勢ひも有之、屈指御待申候處、大に力を得申候、何事も唯今と相成候ては期面晤申候、早々頓首、

四月十一日九時前、

二白、如來書狛大夫到着に候、御小屋御物見へ轉遷致置候、御指支は無之候、〔平四郎〕横井へも御面晤の由、是は十分之御都合と奉存候、唯々在語晤、頓首、

左内ノ歸府ヲ喜ブ

幕府困頓ノ狀アリ

〔中根靱負書翰〕○橋本景岳全集所載

○四月十一日橋本左内宛

橋本左内様

過刻之御報拜酬

中根靱負

寓居ノ件

御投書拜誦、先以早速之御歸着大賀之至御座候、扱御小屋之儀に付、御申越之趣逐一拜承、何とも可申陳様も無之、全く小拙不行届之所爲に有之候、此儀は負刑可及拜謝候、過日岩瀬へ御托し一封御投與以來は、別て君臣共日夜翹望御歸府を相待居候儀、今日も遠程より御着之事故、早速面晤東西之儀も可及御談と相樂罷在候處、小拙不取計より、如此大事を引出候ては、實に小拙の多罪無所遁仕合、今般之一大事、實に至重至大、過日來恐惶不知所措仕合にて、偏に賢兄の宏圖を仰待致候有様、前件より天下の大計をも誤候に可至次第にて、何共當惑千萬にて候、今宵も乍貴勞可被爲召思召にも被爲在候處、御紙上の趣旨は實に大失望の至にて、小拙の罪は聊無所辭候間、天下國家之大事は、片時も早く御取掛りに相成様相願候、此地之景況も、實に危急の秋と被存候、小生丈けは引罪如何様に可相成候條、何分御出勤は有之様相願候、此儀可及陳啓出懸候得共、狭舍中申述兼候次第故、途中より引返し書面にて申述候、御承引も被下候は、罷出御詫言可申陳、左様にも無御座候得

危急ノ秋

安政五年四月十一日

七

安政五年四月十一日

ば、如此大事誤候上は、小拙逆も是限りと覺悟の外は無御座候、御同事に閉居待罪候外は無御座候、心事難盡、大要迄早々御報、如此御座候、以上、

十一日

平岡氏に引替り、(五郎左衛門)天方・酒井來り、彼是及延引候、以上、

〔三條家 諸大夫 森寺常邦書翰〕○橋本景岳 全集所載

○四月十一日橋本左内宛

以寸緒得御意候、薄暑之節御座候處、彌御安全珍重奉存候、然者過日は御上京被成初て得貴顔、毎時失敬打過候段、眞平御仁恕可被下候、偕此頃には無異御歸府可被成珍重存候、乍併當表にては其後雨天續にて、去る七日には少々電氣も相催候義に付、御道中之御都合如何有之候哉、御案し申入候、將御在京中、(三條實隆)前内府殿へ御直に御差上置被成候茶友夜話・補叙三則・佐久間書取壹通、貴様御歸府迄に御返却可被遊思召之處、何か御取紛れ延引に相成候、則拙者より御返却申入候間、御落手可被下候、扱御歸府前御參殿之砌、御内々御見せに相成候堀田侯へ御渡し之箇條書御一紙、最初御達し、其後少々御文中御替りにて御引替に相成候趣、夫々其筋より御廻達寫候處、爲御見に相成候は、若哉兩様の内最初の方の御一紙にては無御座候哉と懸念致し候間、別紙寫御内々御廻し申入候、是は御引替の方に御

實萬借覽ノ
茶友夜話等
ヲ返却ス

堀田閣老へ
ノ御沙汰書
寫ノ件

座候、最初のとほ少々意味も相違可致哉と存候間、爲念御廻し申入候、先々其後は格別事替之儀も無之、穩なる方に御座候、事替の儀も御座候は、早速可得御意候、堀田備州侯にも彌五日發足有之、世上の風聞も日々に遠ざかり候得共、實に此後の形勢如何可相成哉難量、恐入候儀に御座候、先は前文得御意度如是御座候、勿々頓首、

四月十一日

森寺若狹守

橋本左内様

二白、(森寺家父)家父よりも書狀可差出筈の處、本文同様の義に付、拙者より宜可得御意旨申聞候、段々失敬之段御斷申入候、以上、

〔橋本左内書翰草稿〕○橋本景岳 全集所載

○四月中旬(翻井)近藤了介宛

別後清和之候推移候處、彌御安全御勤被成候條奉賀候、然ば、小拙儀外三人共、日積りの通り、去る十日夕(十一日ノ譯カ)東着致候、道中は川々も減水、殊更日長の頃故、一入果敢取大慶の仕合に御座候、貴兄には定て日夜御案じ可被成と被想遣候、

○錦地の御模様其後何も相替不申候哉、(三國)大學杯へは、不相替御面會と奉存候、且貴兄去留之事も早速於此地御内評有之、是非御指留可被成旨被仰渡候間左様御承知可被成候、閣老御

安政五年四月十一日

九

着府ヲ報ズ

安政五年四月十一日

堀田閣老ノ
惡評

引取之上は必ず種々風評も可有之、其等一々御認取御申越候様御頼申候、○此表も同然、堀閣之惡評種々有之候、有志之列侯方にも一統各別御心配之由、上にも萬緒御盡心、不堪恐縮仕合に御座候、將其地之御様子も曲に申來有之、歸府後却て得新聞候事も不少候、
〔近藤了介書翰〕○熊本縣志 全集所載

○四月十二日橋本左内宛

一簡奉呈上候、逐日薄暑御座候得共、先以 君上益御機嫌克被爲遊御座奉恐悅候、隨る尊公様彌御安剛被成御勤仕、就中今般御旅中無御滯御着府可被成、重疊目出度御儀奉恐賀候、尙又遙途之御疲勞御保護專一に奉存候、儲御在京中は、段々御入魂にて、御用途筋御指揮被成下、御懇切之段難有奉深謝候、此上以後御投策之程奉瞻望候、

一、先頃水府御留守居方より、中根様よりの御狀二封、并同家中安島様（備前郡）より之壹通、都合壹封にいたし、熊五郎（原郡）・賢次郎兩名にて御返却、只今には御掌握に相成可申と奉存候、然る處、昨十一日、三條様御内森寺方より壹封相廻候に付、今便熊五郎名當にて御廻し申上候間、是又御落掌に相成候様仕度、

森寺ノ書翰
ヲ廻送ス

一、一昨十日、荒川師匠（美濃守）・毛利（尾之丞）・粕谷（小彌太）・鈴木之族京着仕、一兩日滯留にて、明朝浪花の方へ出立に御座候、師匠義は、御願之上旅中改姓名、本間登と相唱候趣に御座候間、自然列候の内

より、江府御屋敷へ御問合之儀有之節は、右改名致居候義御含置被下候様、師匠より御願置吳候様の噂に御座候、

儲君ノ件

一、三國へ御傳達之趣、并謙山公への御傳言之趣共具に相述候處、三大には今一應御面話申度と存居候由にて、大に失望之風情に御座候、又謙山公には大慶不斜趣に御座候、則ち其節三大之内話にては、未だ閣老公在京中に、西城儲君之義（近衛忠房）陽明府より御沙汰有之候處、一旦は廣橋殿失念之趣に候得共、其後に至り御書付閣老へ御渡に相成候由の御内話に付、右謙山公へ爲御暇乞前夜參上、其節は右之御論にも相運ひ不申、初夜過歸館仕候處、翌五日、出立前急々面話被致度由申來候に付、即刻參上仕候處、右等の御咄に相成、何分 皇朝にて、西城一條御一決に相成候様之實否相知れ候は、其心得にて於廟堂評論被致度趣故、右西城儲君の義は、前以閣老公へ御沙汰有之由に承り居候と、三國よりの内話之趣、無左右御咄し申上候處、一圓閣老へ右様の御沙汰は無之、甚不審被存候趣故、尙又實否取糺之上にて及言上候様に相答置、則今朝少々所勞に付、以紙面三國方へ、今一應虛實相糺候處、別封の趣申遣候間、爲御心得其儘入貴覽候間、尙又御折用に相成候様所希に御座候、
一、御含め被置候兵庫表出張可仕之處、前件の所勞にて未だ發足不仕次第、快氣之運に御座候間、一兩日には發途之心組に御座候間、左様御思召可被下候、先外に相變り候義も無

三國ニ建儲
ノ件ヲ糺ス

安政五年四月十一日

安政五年四月十一日

御座、猶得貴意度儀も御座候はゞ、重便可申達と文縮如此に御座候、恐惶謹言、

四月十二日

近藤了介

橋本左内様

百拜

二白、時氣御加護專一に奉存候、乍末毫三岡様御初、横山様・溝口様へも乍恐宜敷御傳達之程奉煩願候、當境御用途被仰越奉待上候、可祝、

三白、狀嵩を憚り略紙にて得尊意候段、御海容奉希上候、

○別紙

下拙迄何寄之御品御惠投に相成、難有仕合奉深謝候、段々御懇情に預り、難忘仕合に奉存候、右御禮爲可得尊慮如茲に御座候、頓首、

けふ

了介拜

橋本尊公

〔鷹司家侍講〕三國大學書翰○橋本景岳全集所載

○四月十二日近藤了介宛

貴書忝拜閱、然者先日は御光臨、何寄の御國産被贈下、御厚志忝奉拜謝候、扱頃日御所勞之

西城一件堀田閣老ヨリ關東へ申送ル

外人等角力ヲ見ル

由、折角御保護奉祈候、

一、西城一條、御細書之旨承知仕候、右は先月廿二日中根氏迄委細出狀、其節御達書の寫も加封仕置候、依て閣老より被差送候よりも早相達居候儀に御座候、

廣橋殿失念之取計有之候得共、關東へは廿七日早便閣老より被申遣候、又陽明府よりは廿六日出を以て被申達候、右之次第相違無之候、此段左様御承引可被下候、今夕桃井君へ御出狀の由、乍憚宜御通聲奉煩候、何卒關東の光景御内々爲御聞被下度御頼申上候、當月二日・三日頃、蘭人・亞人とも角力拜見被仰付候由、御手當として五百金角力方へ被下候よし、是等は御承知とは奉存候へども、乍序貴所様迄申上候、何卒亞夷・蘭人官階貴賤如何と申邊御序に御問合の程奉願候、先者右御請迄、草々以上、

四月十二日

別紙 桃井君へ御尋申度事、先日中根君よりの御紙面にては、ハルリス事、蘭領事官よりは餘程品格相劣り候よし、然る處、頃日所司代より太閤殿へ御達には、矢張ハルリスの方貴く、既に蘭人勝手に遊歩致候事をもハルリスより差留候様申居候、此眞偽如何、蘭人御禮席、ハルリスとの相違如何相成候哉、是等も委細爲御知被下度奉希候事、又天下の列候赤心、萬一不殘戰爭を恐れ、和を主と致候ても、天意は少も不動、神トに可被爲任との

安政五年四月十一日

一三

列候ハ戦ヲ恐レ和ニ傾クモ天意ハ動カズ

安政五年四月十一日

一四

叡慮、過日閣老と御應答有之候、此段桃井氏へ早々御申通、言上に相成候様仕度候、右之次第、今便何卒御申被遣可被下候、只今會讀中にて亂書御免可被下候、吳々關東の光景時々爲御知被下度奉願候事、桃井氏へ御通達奉煩候、以上、

福井藩士服部熊五郎書翰○昨夢紀事所載

○四月五日同日藩士天方五郎左衛門宛

略、

一、航海術原書御調爲御用罷登居候橋本左内儀、一昨日夕、此表出立、其節三岡石五郎、横山猶藏・溝口辰五郎同道、歸府と相成候へば、歸府之上、此表之模様、世上之風説等、御聞取ても可相成と奉存候、先は右之段申上度、極内々呈愚毫候、恐惶謹言、

四月五日

服部熊五郎

天 五郎左衛門様

〔服部熊五郎書翰〕

○橋本景岳全集所載

○四月七日橋本左内宛

一筆啓上仕候、薄暑之節御座候處、先以上々様益御機嫌克被遊御座奉恐悅候、隨る彌御勇健被成御勤仕奉恭賀候、然者、去る三日夕、水戸様御屋敷より到來貴所様の封狀三封到

左内ノ歸府ヲ報ズ

水戸藩士ノ書翰ヲ廻送ス

書籍廻送ノ件

來に付、翌四日又候水戸様御屋敷へ相頼、私より封し立、惣上包御奉行當、森賢次郎より仕立差出し置候、此愚札よりは前に相達し可申儀と奉存候、其節乍序御道中萬端無御滞御着府可被成御歡申上候に付、今便は略紙を以て申上候、

一、御出立之節被仰置候其表へ可指出御書物三冊之儀、今昔久次へ委細被仰付置候由に御座候得共、久次申聞候には、「三魏文鈔」三冊早速可指出旨、乍併御國の方へ可差出様にも奉存、東北不慥様申聞候、私は御書物名題號不承、江戸表へ三冊とのみ承置候儀、依之久次へ御渡し置被成候惣御目錄帳に夫々引合見申候處、「小倉山房外集」四冊、「潜確居類書」六帙入壹箱、御目錄に無之分御座候、右箱入六帙は追て御國表へ可指出候得共、「小倉山房外集」四冊の分を其表へ早速可指上御儀に哉共奉存、一決難仕候故、右「三魏文鈔」三冊、「小倉山房外集」四冊、以上七冊今便御手許へ御廻し申上候間、御握手可被成候、

一、惣御目錄の内、和本之分三冊八十三冊之内、「三魏文鈔」三冊は前條の通り其表へ指出、殘る八十冊は昨日立、三度便を以て、村田御氏へ向け差出候、

一、從大坂表此間之金子入御封狀、河内屋茂兵衛より請取書壹通相廻り候に付差出候、

一、徳大寺大納言公純卿御詠歌短冊之方へ被遣候御菓子料金百疋、先方へ相贈り候に付、請取返書到來仕候間今便差上候、右之段申上度、早々如斯に御座候、恐惶謹言、

徳大寺公純ニ短冊ノ染筆料ヲ贈ル

安政五年四月十一日

一五

安政五年四月十一日

四月七日

橋本左内様

服部熊五郎

一六

追て御道中如何御座候哉、此表は三日・四日好晴、五日雨天に相成、六日・七日曇天微雨、却て極晴よりも御道中御都合宜と奉遙察候、猶明日より今暫は大雨等無之様奉祈上候事に御座候、先頃(三月廿四日京立)三井便、彌五日限に可相達候哉、其以前(三月二十二日京立)六日限等、乍御面倒御序の節、彌幾日着府に相成候哉、乍御面倒御聞かせ被下度相願置候、以後の心得迄に奉伺置候儀に御座候、十二三日頃は貴所様にも御着府と奉遙賀候、猶此表被仰置候件々、追る可申上候條、早々如此御座候、時候折角御保護被成候様、乍憚御專一之御儀奉存候、頓首、

呈書

一 貴所様へ森賢次郎より 一封

一 三國御氏
一 横山御氏へ私より 三封
一 溝口御氏

右、乍憚御届可被下奉願上候也、

〔服部熊五郎書翰〕

○橋本景岳全集所載

○四月十二日橋本左内宛

森寺ノ書翰ヲ送付ス

一筆啓上仕候、薄暑之節御座候處、先以上々様益御機嫌克被遊御座奉恐悅候、隨る彌御壯健被成御勤務、就中今日の内には無御滞御着府可被成、重疊日出度御儀奉遙賀候、然者昨十一日、森寺若狭守より紙包壹封^(上二枚)、御便宜之節御差出可被下旨申來候に付、今日六日限便を以て指出候、御握手可被成下候、右得貴意度如此御座候、恐惶謹言、

四月十二日

服部熊五郎

橋本左内様

追て時候折角御厭奉祈候、此表相應の御用無御遠慮可被仰下候、以上、

〔服部熊五郎書翰〕

○橋本景岳全集所載

○四月十二日橋本左内宛

呈書封し立候處へ、三井手代小森伊三次^(林カ)と申者、去月廿四日、五日限急飛脚取扱相頼候者罷出、別紙來狀類持參にて延着之段斷出申候、寫取別紙入御覽候、川支無是非事、御宥免被遣可被下候、例の不手廻し、飛脚廻り候時刻に相成候故、要用のみ、幸書添へ申上候、以上、

四月十二日

熊五郎拜

左内様

追啓、近藤了介より書狀壹封差出候に付、御達し申上候、以上、

安政五年四月十一日

一七

江戸ヨリノ書狀ヲ廻送ス

安政五年四月十一日

○別紙

以手紙得貴意候、薄暑の節御座候處、彌御安全被成御座珍重御儀奉存候、然考此程森氏より被遣候御狀、江戸表へ指下し申候處、別紙の通申來り、何共不都合千萬奉存候、御一覽宜敷御承知、可然御取扱被成下候様奉存候、吳々も不都合の次第御氣之毒奉存候、右得貴意度如此御座候、以上、

四月十二日

小林伊三次様

佐原恒藏

一筆啓上候、然考其元去月廿四日未半刻出、同月廿九日未半刻着順の仕立、正五日限之外番狀、道中川支有之、昨日到着に付、飛脚屋方へ早速談判仕候處、全道中川支有之候由にて相詫候に付、飛脚屋方にて書付取之、先方へ相添、即刻相届候儀に御座候、則先方請取書爲差登申候間、宜敷御取計可被成、尤其御地、先方より御尋も御座候はゞ、其譯申聞、宜敷御取計可被成候、右御心得迄得御意度、如此に御座候、以上、

四月四日

外番方様

江戸同所

覺

三月廿四日、未半刻出、
一、五日限仕建、

大井川廿七日巳刻より、朔日辰刻迄川支、四月三日辰上刻着に相成申候、此段宜敷御斷り申上候、

四月十二日

越後屋孫右衛門印

三井兩替店様

○以上狀袋入、上書、

橋本左内様

服部熊五郎

四月十二日

〔服部熊五郎書翰〕

○標本景吾全集所載

○四月十三日橋本左内宛

本紙得貴意候、飛脚之儀、猶又唯今下拙三國迄罷越、大學へ面會にて、正六日便にては如何、五日便にては如何、及質問候處、大學儀は、三日半にも致し度存候へとも、自御先方四

安政五年四月十一日

一九

三國大學書
狀飛脚便ノ
件

安政五年四月十一日

二〇

日便に被差登候事故、御遠慮申、四日と申候、則桃井氏より急便の儀は、了介へ御申聞爲御差立可被下と申來候、副書爲見可申旨被申候、然は、早速引取御用狀御出來次第可差出旨、四日限に致治定候、右賃金四兩貳分、即時拂渡請取書取置申候、右金子は如何相成候哉、自此表御國表御奉行中へ相達可申哉、其表より御廻金被成候事哉御伺申候、自其表貴所様御取計御廻金被下候へば、當方は大に御都合宜候、右之趣を以、早速御答可被仰下候、以上、

十三日

服部 熊五郎

橋本 左内様

〔目付岩瀨忠震書翰〕○昨夢紀
事所載

○四月十三日橋本左内宛

瑤章披展仕候、如諭清和之候、愈御駢躋拵賀之至、過日は於京地、臨發一夕之談、多少之心得こも相成、萬々篤謝、爾後平山謙(謙二郎)、近日御發足之由報し來候間、屈指相待居候處、忽チ得鴻爪欣躍此事、撥百冗いつにても御目こかゝり申度、小生義も君候へ心事申上度義も有之候へ共、少々避嫌之廉も有之、唯々貴兄之御歸府を相待居候事を御坐候、大体七過二候ハ、退出致居候間、其刻限過御出被下度候、此程高知候へも一日推參、放懷談論、大に得益大慶致候、近來都下之模様、定る追々御聞込も可有之、小生も甚盛眉を極め居、漸少活路を

左内ノ歸府
ヲ喜ビ會見
ヲ求ム

山内豊信ヲ
訪ヒ談論ス

得候哉に存候事も有之候、今日にても明日にても拜眉致度、萬緒期面罄、草々布復、

十三日

肥後 守

左内 様

二白、此節賤恙着坐甚六ヶ敷、御出之節甚失敬之體にて御目こかゝり可申候間、兼る御承知可被下候、且諸事誠の別格に致度候間、御承知可被下候、以上、

〔三國大學書翰〕○橋本景岳
全集所載

○四月二十八日近藤了介宛

内用 御直披

梅天蕭條、彌御清適被成御逗留不堪拵喜候、過日は御光來得拜話大慶仕候、其節申述候通、關東より御便有之候は、早々御様子承度候、桃井氏着府後定て貴所様には何とか御文通も可有之、關東當時之光景相分り候事も御座候はば、内々御洩之程奉願候、實は先頃よりも太閤殿より度々右御尋も有之候處、今日又々御沙汰にては少々御不審にも被思召候趣、小生も申上様も無之當惑仕候、元來小生より兩度中根氏迄手紙差出し候に付、一度は御返事も可有之か、併し桃井氏歸府の儀故、夫迄御見合に相成候哉、色々取繕申上置候得共、今日に至り候ては何分申上様も無御座、何分桃井氏夜中差急ぎ出立、八日道中の様にも承り

左内歸府後
吾信ナク鷹
司太閤不審
ヲ抱ク

安政五年四月十一日

二一

安政五年四月十一日

二二

及居候、左候得ば、着府後七日・八日相立候て御出狀有之候共、最早到着可致筈、於小生も不審之次第に奉存候、何分過日御内々申述候通、色々風評、就中君より閣老御媚之儀、定て齊東野人の語と存詰、愚意丈は申上置候得共、何分當地之光景手續申上候迄にて、江府御模様相分り不申、桃井氏歸府後何の便も無之、西城等の事も如何之次第に相運候哉分り兼、太閤殿にも訝敷處被存候義に御座候、右之次第に御座候間、何卒關東より御便有之候はば早々爲御聞被下度、萬々一貴所様へも御便無之儀に候はば、前文之趣早便桃井氏迄被仰送被下度奉煩候、右御頼迄、草々、

四月廿八日

〔昨夢紀事〕

四月十三日、平岡圓四郎か兼る此般の事情ハ、公と刑部卿殿(二編)と御同論あらてハ往々の御爲めよろしからねハ、公の尊慮を伺ひとりて刑部卿殿へ申上、卿の思召違はれたる件々ハ、論ひ直し奉らんの願にて、師質へハしはく、此事を申せる故、公へも聞え上たりしかと、公ハ京師の事も心得あれハ、左内か歸りたらん上にて、まづ圓四郎か思はん處を、飽まで論し試みたる後にすへしとの思召なりしかは、其事左内へ仰ありて、今朝圓四郎を左内か許へ呼寄せたり、扱圓四郎か論陳する處ハ、則彼卿の御議論、左内か辨する趣ハ則

齊東野人ノ言

平岡圓四郎
左内ト會見
外交問題ヲ
論ズ

公と左内と御論判ありし處なり、師質ハ傍聽すへき由を命せられたり、先ツ圓四郎か難する内こゝ大なるヶ條ハ、交易ハ諸民の困究を醸して國地の衰弊となるへき事、異教御許容ありてハ、八宗僧徒の不服より引て門徒こ及ひ、國內の變亂を生すへき事、ミニストルの遊歩は、時体を辨へすして強ちに夷狄を惡む者あつて、不虞の争鬭を惹出し、遂こ双方政府の争端とも可相成事、京師ハ正論にして屈するに難き事、等なり、左内か陳する處は、方今の景況にて交易せハ、圓四郎か議の如くなれとも、舉國の制度を變革して航海の術を開らき、有無を通すれハ富國強兵の基たるへきとあり、異教ハ不服なる宗僧の内、一宗の倚頼する碩學高德と稱する者を舉て彼國へ遣はし、異教を學はしめ、彼教師と論して邪正を分たしむへしとなり、異人の遊歩ハ、歲月を積み習慣せハ、自ら嫌惡の風習を亡失すへし、其意を彼に曉諭して事を緩ふすへきとなり、京師ハ水老公をして説かしめんとなり、其老公を説くハ橋公にして、橋公を説くハ圓四郎なるに論し及ほしたり、圓四郎ハ智辨俊逸、難詰萬般を極め、左内ハ才識高邁、明辨意表に出つ、師質傍に在つて醉か如く醒るか如し、今其事を記せんとするに、恍惚として恰も夢裡の想をなせり、如此して難陳數刻、辰の初より未の半に至つて、圓四郎稍喩るに似たれとも、猶未た服するに至らざりしかと、餘りに時も移りて、一橋の御館へ出勤遅引甚しくなれりとして、此日の論は先つ止

安政五年四月十一日

二三

安政五年四月十一日

たりき、

左内岩瀬忠
震ニ會見ヲ
求ム

一、橋本左内在京中、岩瀬肥州の京を立るべき前日に唯一度面談せり、論談も盡さりし故、
歸府の上推參の事を申入れたりしに、其返書左之通り、
四月十三日、岩瀬肥州々左内へ返書如左、

○岩瀬忠震ヨリ左内ヘノ書翰、
上ニ掲ケルヲ以テ之ヲ略ス。

略、中

四月十四日、昨日左内と圓四郎の議論盡さる處も残りたる處もあれハ、其事を研究すへし
と、師質早朝に圓四郎か許へ至りしに、昨日御館へ参りていまた歸らすといへれハ、本意な
くて歸りしに、辰の半刻比にやあらん、御門前を通れるを見付たれば、呼び入れて、又左内
か許にて論談に及ひたりしに、此日ハ辨論漸く行届きて、圓四郎の疑團も氷釋して襟懷を
豁にせし由にて、歡ひて歸り去れり、

略、中

一、此夕、橋本左内、岩監察の許に至れり、是ハ左内か京にて逢ひたりし時、肥州の申され
しハ、關東にて諸侯の一和せん事ハ、偏に 太守公に依頼し奉るより外の策なけれと、其
以前に御國へ歸らせ給ふまじきか、いつれにしても御引留申さてハ難叶由物語あり、且江

圓四郎再ビ
左内ト談論
ス

左内忠震ヲ
訪フ

忠震ノ報ニ
ヨリ老中等
覺醒ス

宰輔ノ任ハ
慶永ヲ措テ
他ニナシ

戸にても、海防掛の面々なと専らさる心構にもほの聞ゆれハ、左内へ御含められて、夫等
の内状をも探らしめ給ふに、肥州も素よりしかおもへるのみか、此節も廟議もある事に
て、廿六日までにハ決すへけれハ、密にいひ知らすへき由なりしとぞ、其上にて窃に議し
申さるハ、此比年天下艱難の秋なるに、こハ閣老衆にハ憚りある事なから、將軍家に
ハかたの如くに坐すれと、從來の御威光にて天下ハ治り行くものと心得られたれと、近年
何とやらん諸大名の心底も穩やかならざる様にて、別る去年已來ハ、言に出たる事も端々
見ゆれハ、少し心付れてハあれと、猶舊套もて壓付んとおもはれたるを、此度京師の事柄
の容易からざる有様を、己レ歸り参りて具ニ辨論に及ひたり、内憂外患指湊ひたる事故さ
てハと始て目の覺られたる心地にて、伊賀殿の疝の虫も稍納りて、人の言ふ事も能聞入れ
らるれハ、此節同志一統の建議にハ、第一西城へ賢明の君を建られ、次ニ宰輔を置れ、閣老
の上に立て事を執り議を決する人なくてハ、靜謐すまじき時勢なるよしを申立しに、閣老
衆にも至當の議なりと聞請よくて、備中殿の歸府を待居らるハ、次第なり、其宰輔の任ハ、
尊勞ながら太守公を措て外にハあらず、尤御家柄と申、御身柄と申、御大老なんとはいへ
る名稱を奉るへきにもこれなく、時々御登營ありて御前にも御出あり、大疑大件を御聽斷
被下なハ事足り可申、瑣細の事故を以て奉累候儀なんとハ、毛頭あるまじくこそ、政令盡

安政五年四月十一日

二五

安政五年四月十一日

二六

慶永ノ歸國
ハ不可

く英明の儲君、賢徳の宰輔に出候はんに、如何なる難事たりとも行はれぬ道理ハ有へか
らす、先づ此二大件を定め、京師の御扱ひ、夷狄の御處置等も、此條理より立行かて
ハ、上下人心の歸向も定りかたくて、寧謐すへき見込更にあし、已に傾覆せんとする徳川
の御家を、維持挽回爲へき大機會、此策より善きはあらず、十分決定して、此節専ら廟算中
に有なれハ、御歸國なんとの事ハ思ひもよらず、賢勞ハ恐入候へとも 太守公の倚頼あ
ては、たとひ 西城立たせられ候も何の詮かあるへき、西城被爲立候上にて宰輔を任せ
らるゝハ、正理公論第一等の上策なるへきものと、勢ひこふで申さる故、左内も、夫れよ
からんと迂濶に雷同すへき事にもあらねハ、寡君否徳と辨論に及はんとせしかと、肥州も
のをもいはず、其臣としてまかいはるゝは何の珍敷事かハある、別に天下を治る策あり
や、別に宰輔に任する人ありや、申されよ承らんといへる勢ひなる故、左内も遂に辭屈し
たりと物語れり、總して肥州は、才幹智略當世の選に、雄辨懸河のことく、しかも禁懷洒
落にして、小節に拘はらさる度量ある故、左内をも入幕の賓とかいへる振にて、燕室に引
入れて、眞率にかゝる重大の議をも申出され、其他方今東西の形勢に就きて、種々の議
論に及はれしとぞ、

忠震ノ人物
評

〔橋本左内上京旅費及諸雜費覺書〕○橋本景岳全集所載

左内上京ノ
旅費及諸雜
費覺書

覺

上坂之節

一貳拾壹〆貳百七拾七文

此金五兩ト貳百七拾七文

右、上下四人、道中旅籠、并馬・駕・晝遣・川々賃錢代

一壹貫文

旅籠代

此分、興津宿泊前書之洩候分

一壹歩三朱

左内・猶藏・辰五郎
道中小遣

一貳朱

同 斷

一壹朱

辰五郎同斷

一同

猶藏・辰五郎同斷

惣〆

五兩三步貳朱ト拾貳文

滯京中諸入用

受取有之分

安政五年四月十一日

二七

安政五年四月十一日

一壹步貳朱

一貳步卜廿貳分五分

一拾分八分

一貳分七百文

一貳步二朱卜五百十三文

一壹兩壹步貳朱

(不明)
内□ 貳拾三文

一貳朱

一十三分五分

一壹分九百廿文

一壹步貳朱

一六兩貳朱

一壹兩

一三百廿文

一壹兩壹步貳朱

二八

若山茂助拂

石田治衛拂

小松屋拂

同 斷

和泉屋安兵衛

服部取次物代

寫本代野村淵藏

龜屋近江拂

安喜炭代

野田藤助拂

木村勝助拂

小利拂

箱入椎茸

音物

同

大黒屋庄次郎拂

飯料

借物代

駿河屋拂

酒貳升

雲丹

万印菓子料

同 同斷

同 同

中印同

越後屋恒藏

二九

一壹兩壹朱

一七兩貳步

一壹兩壹步

(三字不明)
三人前廿三分

一壹步貳朱卜百七拾貳文

(三字不明)
三人前廿三分

一貳朱

(三字不明)
□□ 百文

一六分八分

一三分

一壹步

一貳朱

一同

一壹步

一三兩

安政五年四月十一日

安政五年四月十一日

一貳百拾五文

一百文

一三朱卜貳百文

一四兩

一三百七拾文

一六拾六匁

二人前三十三日分

一拾六匁

二人前八日分

一壹匁六百五拾文

二人分三十三日分

一壹匁六百四拾文

二人分四十一日分

惣 金三拾三兩二步

銀壹匁三厘

三〇

溪琴集二冊

拾九友集一冊

栗山文集五冊

大坂河茂拂

美濃紙二帖

飯料

同斷

借物損料

同

錢三拾貳文也

但、兩替七拾壹匁立

錢相場貳朱之付、八百三拾八文

一五百文

一拾兩

一貳步

一三朱

客來之節菓子料

一壹朱

一二步

一壹匁

一壹步

一壹兩三步

一貳朱

同

安政五年四月十一日

上下三人茶漬代

横山歸府往返路費

心付 今井久次

龜屋近江

茶漬屋拂

伊丹藏人

短冊二枚代

三國大學

小林筑前守

客來之節酒肴代

三一

安政五年四月十一日

一拾兩

一壹兩三步

一同

一貳朱

一三百文

一壹兩貳步

已下受取書無之分

一壹步貳朱

一壹步

一壹兩三步

一貳兩貳步

一壹朱

一壹步

一貳步

一三步

三二

小印

森寺若狹守

宇合大舍人頭

森賢次郎

菓子代

今井久次

淺草海苔

雲丹

森寺菓子料

三條家御肴料

森寺婢僕

梁川菓子代

座田束修并菓子代

伊丹藏人肴料

茶

服部熊五郎菓子料

猶印方三國大學

測量集成初篇

三條家へ獻菓

森寺器物買遣

春日讚岐守

城谷中將

横井平四郎

大坂堺行戻雜費

德大寺家菓子料

三三

一百文

一貳朱

一同

一七匁

一二步

一壹步

一壹步

一同

一三兩貳步

右上下四人、逗留賄・酒肴代

借物代・日雇代等

一壹兩貳步

船賃・宿賃共

一壹步

惣々 金四拾貳兩

安政五年四月十一日

安政五年四月十一日

銀三匁五分六厘

錢五拾八文

別書籍代

八兩三步

銀壹匁四分八厘

歸府之節

一三兩三步壹朱 七百八拾六文

右、上下四人、旅籠・川々賃錢、馬壹疋代

一二兩壹朱

右三人、小遣・書遣共

〳五兩三步貳朱 七百八拾六文

合惣〳 九拾六兩三朱

銀壹匁六分三厘

錢四十八文

外壹兩貳步

京坂共取集

荒子え

指引

貳兩壹步二朱 二百五拾七文

銀壹分六匁三厘

上納

〔橋本景岳先生年譜〕○橋本景岳全集所載

四月十八日、御側向頭取格となり、御手許御用掛を命せらる、(役料百五十石、)

十一日^丁 議奏・武家傳奏及學習院學頭等ノ學習院ニ於ケル精勤ヲ賞

シ、金ヲ賜フ。

〔徳大寺公純日記〕○臨時帝室編修局所藏本

四月十二日、晴、

一學院度々參勤御褒美、兩役金千疋ツ、拜受旨、坊城殿被傳了、

御禮、序ニ申上よろしく云々、從武傳被渡由也、

申斜參朝、御禮申上了、

〔坊城俊克雜記草〕○内閣記録課所藏本

四月十二日、晴、當番建通卿、宿加勢實愛卿、

今曉寅剋前、有地動、直平穩、

安政五年四月十二日

兩役一同ニ
學習院參勤
ノ勞ヲ賞シ
金ヲ賜フ

地震

兩役學習院
學頭等二金
ヲ賜フ

安政五年四月十二日

三六

學習院毎々參仕爲御褒美、相役一同に金千疋ツ、賜之旨、武傳光成卿被傳授、武傳卿同賜之、相役以書中傳達訖、建通卿爲學院別當之間、別段賜之、學頭已下役々賜之由、相役御禮參合、以表使申入、自余參入之便申入、殿下不及申入、太閤斗參入申入了、

〔菅葉〕○五條爲定日記
宮内省圖書寮所藏本

四月十二日、丁巳、晴、今日學習院に出精參勤之御褒美賜之候間、午後可參 朝旨、兼日右大將被示之間、可參 朝之處、自昨朝風邪平臥候間、令不參、後刻桑原新三位爲政入來、右大將被渡之由、被傳金千疋、御禮之義ハ、當分所勞候ハ、出仕之上可申上云々、畏拜受了、今日賜物、去冬聽衆に賜候殘金ヲ以テ被下候譯也、然ル處、口向之輩々、強ル歎願候ニ付、去冬被下、今日賜候分如左、

- 金千疋 傳奏一人
- 同千疋宛 議奏四人
- 同千疋 院傳奏一人
- 同千疋宛 學頭二人
- 同七百疋宛 有識二人
- 同五百疋 非藏人番頭四人

議奏傳奏學
習院學頭有
識非藏人番
頭等二金ヲ
賜フ

同斷 同 番頭代四人

同三百疋宛 掛り非藏人二人

同二百疋 同 加勢一人

右被渡方、先例と相違、今度武傳方右大將に被渡、議奏衆に之、右大將方被傳、學頭にも同斷、有識・掛非藏人等に之、右大將・學頭列座に之被渡、非藏人番頭・代等に之、奉行に被渡云々、爲榮當番三番詰宿等參仕、

略、○中

廿二日、丁卯、陰晴交、所勞快方ニ付參 内、過日學習院御褒美、且今度之一件ニ付御褒美兩様之御禮、議奏衆に申入之処被承知、學習院之方ニ、以表使可申上之旨被答、則申上退出、參于關白殿・太閤殿等、學院御褒美拜領之御禮斗申入、

〔非藏人日記乾〕○東京帝國
大學所藏本

四月十二日、丁巳、晴、○中

一番頭・々々代、學習院御會出席苦勞 思食、依之番頭江金五百疋、番頭代ハ金五百匹賜之之旨ニ而、奉行日野殿資宗、番頭・番頭代被招、被申渡被授下、宗堂・宗福頂戴之、後兩役衆、奉行衆、學習院傳奏・奉行・學頭等ハ、兩人御禮申入、以表使、御禮御内儀へ申上、里亭御

非藏人番頭
等二褒金ヲ
賜フ

安政五年四月十二日

三七

安政五年四月十二日

三八

禮之儀、太閤殿、殿下於此度嘗不及、參上之旨被申渡、兩役、奉行衆、學院傳奏・奉行・學頭等へ、番頭・々々代壹人宛行向、正登・義邦、自前番廻勤、

一學習院御用掛松室重甫・鴨脚光興等江、同上苦勞 思食、金三百疋宛、同加勢橋本堯寬江、金二百疋賜之、今度直々御渡被下、御禮之儀、無誘引、

〔非藏人日記坤〕○東京帝國大學所藏本

四月十二日、丁巳、晴、○中略、

一番頭・番頭代、學習院御會出席苦勞ニ被思召、依之番頭江金五百疋、番頭代同五百疋賜之旨ニ而、奉行日野殿、番頭・番頭代被授下、宗堂・宗福頂戴之、後奉行衆、學習院傳奏・奉行・學頭衆等、兩人御禮申入、以表使、御内儀江御禮申上、里亭御禮之儀、委于端日記、一學習院御用掛松室重甫・鴨脚光興同斷金三百疋、常加勢橋本堯寬同斷二百疋賜之旨、番頭江被渡之、御禮之儀、前同斷、

○參考

〔菅葉〕○宮内省圖書所藏本

四月九日、甲寅、晴、卯半刻參于學習院、禮記玉葉中臨文、講釋、禮師大濠雅五郎、讀書等訖、已刻退散、參入于關白殿、太閤殿等、進上今日會交名之寫、

四月廿九日、甲戌、陰、卯刻過參于學習院、詩經(下) 講釋、禮師大濠雅五郎、讀書等訖、已刻過退散、行于處々、且參入于關白殿、太閤殿等、進入今日會交名之寫、

五月九日、癸未、雨、卯刻過參于學習院、禮記講釋、玉葉中乘路車不式迄濟、讀書四人出席、等了、已刻過退散、今日禮師牧善輔、禮師大濠雅五郎、參入于關白殿、太閤殿等、進入今日會交名之寫了、先達附武士方書取差出候由、去月十三日、廣橋方久我_レ被達、其後評議之上返答方書付、去廿九日、久我方廣橋_レ被附、被落手之由、今日被噂之間、總々爲易見記于此、

見返り
大久保 大隅守

學習所

去巳七月方同十二月迄御入用凡高

一銀拾貫四拾目餘

內 九貫六百三拾九匁餘

三百五拾壹匁餘

五拾七匁餘

外

巳正月方六月迄壬月共

御入用高

銀九貫五百貳拾目餘

安政五年四月十二日

三九

學習院ノ經費

勘 使 方
御 賄 方
修 理 職 方

學習院ノ講書及講師

安政五年四月十二日

合銀拾九貫五百七拾目餘

目當高拾八貫目と差引

銀壹貫五百七拾目餘 増

右、去巳正月より十二月迄閏月共、十三ヶ月分學習所御入用、書面之通、目當金ニ見合相増申候、右、閏月有之、其上皇清經解唐本四帙御買上有之候故之儀ニ奉存候得共、是迄連も、閏月有之、又御本御買上ケニ相成候年柄も有之候處、其年ニ相應之御餘銀出來有之、然ルニ、去巳年之儀、春來何となく請取物増方相成候哉ニ相見候付、前以御用掛り取次にも申談、諸事心を用、可成丈省略有之候様、雜掌共にも精々爲談候得共、書面之通、増方相成申候、右増之分、外ニ取計方勘辨も無御座候付、去々辰年迄出來候御餘銀之内を以、拂方取計候様可仕哉、此後右様御遺増相成候も、御必用之御本御買上ケ之儀被 仰出候も、容易ニ御請も難仕、左候も、學習院第一之御用支相成、夫而已ならず、御用柄御本御買上ケ手支候様ニ恐入候儀ニ付、自然雜掌共爲御救被下候御手當邊にも相齎可申哉、左様相成候も、銘々難澁も可相成候間、夫是深勘考仕候之處、請取物萬端、格別際立出精減方之義、心掛ケ候様、雜掌共嚴敷可申談様、御用掛取次申渡候方可然哉之旨、御賄頭申聞候付、去巳御遺増之分申聞候通爲取計、以後請取物萬端、格別際立出精減方之義、心掛候様雜掌共嚴敷申談候様、御用懸取次可申渡と奉存候、尤右之趣、學習所掛り堂上方、并非藏人にも御達置御座候様仕度、此段申上候事、
二月

追、寫御序ニ申出度存候、亂書可被免候也、

愈御安福恐賀候、抑學習院去巳年御入用之儀ニ付、附武士差出候書付寫、入見參候、學頭始非藏人・雜掌迄、夫々被示含可給候、仍申入候也、

四月十三日

右 大 將 殿

光

成

返答書

附武士書取寫之趣一覽候處、去巳年學習所御入用銀目當高拾八貫目と差引、一貫五百七十目相増候趣、右、閏月も有之、年中關會も僅一ケ度、其上皇清經解御買上有之、聽衆に御褒美も被下、彼是ニ右之次第と存候、是迄嘉永四年一貫六百卅目餘不足、同五年一貫八十目餘不足有之候、其節々、前年之餘銀を以、遺拂ニ相成有之候間、於此度も同様前年之餘銀を以、遺拂ニ相成候様と存候、尙又以後請取物萬端、格別際立減方之義、夫々申談置候得共、會數之もより、且御造立後、追々經年數、御修復邊も難捨置場所出來、惣休御用向も最初とハ相増候間、雜費も隨る相増候譯合、是等不得已儀ニ付、往々之處、心配之筋ニ有之候、以來書籍御買上之義も、餘銀之内を以、遺拂ニ相成候様、兼る御談置申度候事、

幕府、甲州街道上野原・下鳥澤・上鳥澤・猿橋・駒橋・大月・下花咲・上花咲・下初狩・中初狩十宿ノ夫馬賃錢割増ノ五箇年延期ヲ令ス。

〔老中達〕

○四月十二日觸達

四月十二日、(忠徳月番若年寄)中本多越中守御渡御書付、○安政年錄

此度甲州道中、上野原宿外九ヶ宿人馬賃錢割増、左之通可請取旨申渡、

甲州道中
上 野 原 宿
下 鳥 澤 宿

安政五年四月十二日

甲州街道上野原宿外九ヶ宿ノ人馬賃錢割増延期ヲ令ス

安政五年四月十二日

去る丑五月方當午四月迄、
中五ヶ年之間、人馬賃錢都
合四割五分増申付置候処、
猶又當午五月方來ル亥四
月迄、中五ヶ年之間、是迄
之通四割五分増、

右割増錢申渡候間、可被得其意候、
右之趣、向々ニ可被相觸候、

午四月

〔大目付回達〕

○侯爵池田仲博所藏本
公儀御觸留所藏

○四月十二日福井藩等江戸留守居へ

四月十二日、大目付中の方御達書、津山様衆方到來、薩州様衆に致順達候、

〔信月番格也〕
内藤紀伊守殿御渡候御書付寫壹通相達候間、

〔上二職〕

被得其意、無遲滯順達、留より田村伊豫守方

ニ可被相返候、以上、

四月十二日

大目付

松平越前守殿

松平阿波守殿

松平薩摩守殿

松平三河守殿

御

松平兵部大輔殿

右留守居

〔津山藩記録〕

○子爵松平康春所藏本

四月十二日、晴、○中

一大御目付田村伊豫守殿方、左之御觸書、御留守居に到來、

内藤紀伊守殿御渡候御書付寫壹通、

袖ニ、大目付に

〔鳥取藩江戸留守居日記〕

○侯爵池田仲博所藏本

安政五年四月十二日

上	鳥	澤	宿
猿	橋	宿	
駒	橋	宿	
大	月	宿	
下	花	咲	宿
上	花	咲	宿
下	初	狩	宿
中	初	狩	宿

〔公儀御觸留〕

安政五年四月十二日

四月十二日、

一大御目付中^{○中}御達書到來、^略

但、甲州道中人馬割増之御達之、

〔久留米藩御内證記録〕^{○伯耆有馬 類聚所藏本}

四月十四日、陰、^{○中 略}

一甲州道中、上野原宿外九ヶ宿困窮之付、人馬賃錢割増之儀之付、公儀御觸書之趣、御家中之面々末々迄、無洩落相觸候様、諸頭中に可申聞旨、岸相模より不破左門に、以切紙申渡之、

幕府、廣島藩主淺野齊肅^{安藝守○後備後守}ノ退隱ヲ聽シ、嫡子慶熾^{上總介○後安藝守}ヲシテ其家ヲ襲ガシム。

〔幕府沙汰書〕^{○東京帝國大學所藏本}

四月十二日、

松平安藝守

名代松平近江守

嫡子

同 上總介

病氣之付、願之通隱居被 仰付、家督無相違、嫡子上總介に被下之、

右於御白書院縁頗、老中列座、紀伊守申渡之、

○安政年録ニモ、マタ本書ト同一内容ノ記事アリ。

〔溫恭院殿御實紀〕^{○續徳川實紀所載}

四月十二日、隱居家督之候、

一

松平安藝守

名代松平近江守

嫡子

同 上總介

右病氣に付、願之通隱居被 仰付、家督無相違、嫡子上總介に被下之、

〔藝藩志要〕^{○侯爵淺野長勳所藏本}

四月十二日、公退老し、若公藩職を繼襲せ、公は已に退隱靜養に決るや、昨十一日、青山侯をして

公に代り、退職請願書を呈出せしむ、本日青山侯は、幕令に依り 公の代理として、若公と俱に登城せ、乃ち 公の請願を許可し、又 若公の家督相續を命せ

安政五年四月十二日

淺野齊肅退隱ノ請ヲ聽シ嫡子慶熾ヲシテ家督ヲ襲ガシム

安政五年四月十二日

四六

らるゝ旨、閣老内藤紀伊守を以て台命を傳達せり、

幕府は、東叡山防火及石州・大森海防は、依然服務を令せ、今般 老公退隱の請願書呈出に際し、同日、從來服務せる東叡山防火番は、依然後嗣者へ擔任の命あるを希望せる旨を申請あり、依て本日 若公の襲職と同時に、閣老より防火擔任の台命を傳達し、併て石州・大森警備繼續従事を命せし所なり、

〔金澤藩家老〕 奥村榮通御用方手留帳〔侯爵前田利爲所藏本〕

四月十二日、○中略、

家督相續歡使者ノ件

今日安藝守様御家督被蒙 仰候付、爲御歡御使者、各内可相勤旨、以御近習頭 仰出、御口上書被渡候〔本多政均、金澤藩家老〕付、播磨守八半時過退出、直〔本多政均、金澤藩家老〕被相勤、夕七半時、皆重る出席、被相勤候義等、以同人被申上、委曲ハ略之事、

〔熊本藩〕 熊本藩記録〔侯爵細川護立所藏本〕

四月十三日、晴、○中略、

一松平安藝守様御隱居、上總介様御家督〔本多政均、金澤藩家老〕付、御前様に御歡謁有之候段、落合〔本多政均、金澤藩家老〕昨日申來候〔本多政均、金澤藩家老〕付、今日御裏に罷出候、麻上下、

〔幕府沙汰書〕〔東京帝國大學所藏本〕

四月十五日、

一今四打四寸五分廻り、御黒書院に

出御、水戸殿・尾張殿

御對顔、○中略、過る、御白書院に

渡御、四品以上例月次之通御礼相濟る、左之通御礼畢る、四品以下一同御礼被爲請之、

但、四品以下一同御礼被爲

請候段、於大廊下・帝鑑之間、紀伊守演達之、

○中略、

慶熾登城襲封ノ恩ヲ謝シ物ヲ獻ズ

御太刀一腰
金五枚
綿五十把
御刀〔別所藏〕十五枚
御馬〔別所藏〕二疋

綿二十把
金馬代

○中略、

安政五年四月十二日

家督之御禮

松平上總介

隱居之御禮

松平安藝守

名代松平近江守

四七

安政五年四月十二日

卷物五代
銀馬代

同

同

同

略、中

右畢る、入御、

略、中

御臺様

白銀十枚

卷物十枚

本壽院様

白銀十枚

卷物五枚

御臺様

白銀五枚

本壽院様

同三枚

家督之御礼申上候之付、以使者差上之、

隠居之御礼申上候之付、以使者差上之、

松平上總介家來

四八

淺野右近

關藏人

杉田相模

石井大膳

大橋和多理

松平上總介

松平安藝守

右於檜之間、謁御留守居佐野日向守、

○安政年録ニモ、マタ本書ト略ボ同一内容ノ記事アリ。

〔藝藩志要〕

○侯爵淺野長勳所藏本

四月十五日、

公大光は、老公温徳公代理青山侯と共に登營、白書院に於て、閣老列座して、將軍家定に謁見

して、家督の恩を謝せ、續て青山侯は、老公に代りて、上謁進獻し、畢て家老淺野右近・年

寄關藏人・同杉田相模・番頭石井大膳・大橋和多理の五人も、亦謁見せ、皆先例に據る所を

り、

四月十八日、

公は名を安藝守、老公は名を備後守と改稱せ、

〔安藝淺野家譜〕

○東京帝國大學所藏本

齊肅年十五、襲封、敍從四位、任侍從、尋進少將、命浚治伊勢・美濃諸川、安政五年告老、慶應

四年正月十二日、卒、年五十二、齊肅初敍從四位下、後進階一等

慶熾生於廣島、嘉永三年赴江戸、翌歲初謁將軍、敍從四位上、任侍從、稱上總介、已代父受

封、稱安藝守、

安政五年四月十二日

四九

慶熾安藝守
ト稱ス

安政五年四月十二日

五〇

齊肅

從四位上少將 勝吉 安藝守

初長肅 備後守

母 家女

室 家齊公女

於武州江戶生

於藝州廣島卒

葬 藝州新山日通寺

慶熾

從四位上侍從 定吉 定之丞 善次郎

初長裕 上總介 安藝守

養母 家齊公女

實母 家女

室 尾張大納言源齊莊女

清水中納言齊彊養女

齊彊後紀伊大納言齊順養子

於藝州廣島生

於武州江戶卒

葬 藝州廣島國泰寺

庄内藩世子酒井忠恕攝津守

領内與内坂下ニ於テ藩士ノ訓練ヲ閱ス。

〔操兵練志録〕○莊内史談
〔朱書〕會所藏本

一 四月十二日、於與内坂下、

〔酒井忠恕〕若殿様爲御操練、五ツ時早メ之御供揃〔晴天〕こゝ被遊

御出候、惣人數〔用人〕五ツ時揃、御待受申上、

御出馬之注進、御馬乘馳參、一旦御支度御小屋〔用人〕ニ被爲入、秋保政右衛門御都合申上候、次

第昨年御同様異儀無之候、當 御操練御手續圖記、御次第書之通無御滞被爲濟候、

御出馬五ツ時、御歸陣七ツ打三寸五分、

御途中之御行列、昨年之通、

一 惣軍着到名前上り帳寫、

略、○中

三 隊中軍總人數、千九百五人、外〔朱書〕四人、

〔朱書〕昨巳年千九百五拾壹人ニ見エ、
外〔朱書〕四人、

一 御操練無御滞被爲濟、御覽所御小屋ニ、頭々被 召出候順、昨年之通、右被 召出相圖、

御馬驗ふり候事ニ相約ス、

安政五年四月十二日

五一

酒井忠恕藩士ノ訓練ヲ閱ス

安政五年四月十二日

五二

昨年標旗懸り水野勘内儀、於江戸表調練被仰付被下、出府御差止、教示相勤候、格別之譯を以、御内々被召出候へとも、當年標旗懸りハ、被召出無之旨、御内沙汰有之候、御意ふり、左之御模様ニ被遊候よし、

三隊士大將奉伺御機嫌候節、〔朱書〕能天氣かこる事おひ致と 御意、

御組頭・寄合組頭ニハ、御意無之、

武者奉行奉伺御機嫌候節、〔朱書〕前同様ニ 御意、

御近習頭・御手廻頭同斷之節、〔朱書〕能天氣と 御意、

武者奉行貳度目罷出、鐵炮廻合可始旨申上候節、〔朱書〕御磨、

武者奉行を召ス、〔朱書〕旗本備へよと 御意、

御晝後、

政右衛門罷出、三隊之御下知伺候節、〔朱書〕御磨、

御操練濟、頭々被 召出候節、

士大將に、〔朱書〕々々ハ都合もよく相濟、引立も能ため一同揃ひ、滿悦いとし、江戸表にも可

申上と 御意、

御組頭ハ御手廻頭迄、〔朱書〕いづとも出精いとし、引立太儀と 御意、

御番頭已下、〔朱書〕一同骨折太儀と 御意、

御歸陣、三隊前通 御之節、〔朱書〕一隊ツ、ハ、三度御軍扇、

十文字道手前、大纏披キ候処ニハ、〔朱書〕御左に、御軍扇、

十文字道、通 御之節、〔朱書〕御右と、御左へ御軍扇、

一御人數御引揚之次第、昨年之通異儀無之、各歸陣、頭々直ニ登城恐悅申上之、奉伺御機嫌候事、

一四月十五日、御用之儀有之、麻上下着用五ツ半時登 城候様、昨日御家老中連名之奉書到來、御居間於

御前、御操練御用出精、諸事無滯相濟、太儀之蒙 御意、銀子一臺三枚被下置、頂戴之仕難有仕合、御執合宅馬殿、〔加藤、家老〕

御近習持出之、

〔朱書〕御意之趣、

操練用出精太儀、諸事無滯相濟候ニ付爲取候、

一同日、嫡子與五郎儀、教授御用手傳出精相勤候ニ付、爲御称譽銀壹枚被下置、同日、御肴被下置候、外教示方六人同様吹聴有之、〔朱書〕外服部文藏於江戸表、五月朔日、同様被下置候

安政五年四月十二日

五三

安政五年四月十二日

五四

旨、銀壹枚也、吹聽達ス、

一 御裕壹、御内々拜領被成候由、加藤宅馬、

一 今度 御操練濟ニ付、御酒・御吸物被下置候間、明十六日四ツ時登城之事、御小姓頭達有之、(朱書)御列卒御供仕、廿八日ニ被下置候事、

大野藩主土井利忠能登守 特ニ租入ノ一部ヲ割キ、文武獎勵ノ費ニ充ツルコトヲ藩内ニ達ス。

〔大野藩達〕○子爵土井利忠所藏本
大野藩記録所藏

○四月十二日藩士へ

四月十二日、

(堀家考)
一 於御列座、三郎左衛門殿左之御書付○中御渡被成、及席達候様被仰聞、夫々に相達、

當時形勢之義々、外國條約書并應接書等之趣意、何れ毎度致拜見候次第、今日何様之變事出來候哉、難計、付る々文武之藝術尙以御主張被爲 在度

御含ニ候得共、小給并家内多之者杯々入費ニ追々、志有之者、出精難相成、如何計御殘念思召候、右ニ付、今般以

特ニ租入ノ一部ヲ割キ文武獎勵ノ費ニ充ツベキヲ達ス

御深慮、御手元ニ勿論、御收納之内四厘通、文武之兩場御傾ケ、高下之無差別、修行相成候様被 仰出候、依る御家中下々ニ迄迄、正被下米之内、右ニ準し四厘通被成御預、藝事ニ付入費之義々、相應之御仕向可有之候、老年或ハ性質虛弱ニ有、修行難相成者考、壯年之者に相讓、坐一廉之御奉公ニ相成、却る安心ニ可有之候、右之通被仰出候義々、不成容易思召、且莫大之御出方ニ相成候義、何れ難有恐察仕、兼々被 仰出候通、彌儉素を旨とし勵勤可致候、御仕向規則之義々、兩場ニ御達可有之候、右之通被 仰出候間、不洩様可被相達候、

○參 考

〔大野藩御用留〕○子爵土井利忠所藏本

三月十一日、

○中

一 左之通、以御小姓頭被 仰出、夫々に及席達、

明十二日、五時之御供揃ニ有、調練稽古爲 御覽、新田野ニ御出被 仰出、御供・御道筋左之通、

御庭御路次口方鳩御門、大手・清水御門、錦町最勝寺前方、熊野後中道通、歸右同斷、

御 小 姓 頭

御 刀 番 壹 人

安政五年四月十二日

五五

大野藩主土井利忠藩士ノ調練ヲ覽ル

安政五年四月十二日

五六

御次向不殘
 御醫師壹人
 御次番不殘
 御徒目付壹人
 御徒士三人
 御鎗壹本
 御箱壹
 御茶辨當
 押
 御草り取
 御先拂
 惣合羽籠
 御次物持三人

一御本陣茶臼山下之事、
 一御往來共、御歩行之事、
 一御辨當御晝苞之事、
 一御刀懸・毛氈・御手あぬぎ之事、
 一御幕雪隠之事、
 一御供之面々、陣笠・頭巾・筒袖縮袴・割羽織・股引・かるさん之内、勝手次第之事、
 一右之面々、腰兵糧之事、

但、諸士以下ハ追々辨當米被下候事、

一茶場之事、
 一天氣不定ニ候ハ、十四日迄、日送り之事、
 一萬事質素ニ可致事、
 一惣小屋無之事、

三月廿日、

一兼る被 仰出有之、於新田野訓練有之、爲 御覽五時之御供揃之被爲 入、七時被遊 御歸候、不參左之通、

不快

村・井 外記

同

鷹見文左衛門

同

佐合吉右衛門

同

萩原平藏

四月二日、

略、中

一左之通、以御小姓頭被 仰出、夫々に及席達、

明後四日、六ツ半時之御供揃之、大砲稽古爲 御覽、新田野へ御出被 仰出、御供・御道筋左之通、

御庭御路次口方鳩御門、大手御門・清水御門、鋸町・横町・春日町大道通り、御歸り右同斷、

御小姓頭
御刀番三人

安政五年四月十二日

五七

大砲稽古

安政五年四月十二日

五八

- 一 御本陣榻林添之事、
- 一 御往來共、御歩行之事、
- 一 御辨當御晝苞之事、
- 一 御刀掛・御毛氈・御手焙之事、
- 一 御幕雪隠之事、
- 一 御供之面々、陣笠・頭巾・筒袖次伴・割羽織・股引之内、勝手次第之事、
- 一 右之面々、腰辨當之事、

御次向不殘
 御いし壹人
 御次番三人
 御徒目付壹人
 御徒士三人
 御鎗壹本
 御箱壹
 御茶辨當坊主
 押
 御草り取
 御先拂
 惣合羽籠
 御次物持三人

但、諸士以下ハ、追る辨當米被下候事、

一 茶場之事、

一 萬事質素ニ可致事、

一 惣小屋無之事、

〔大野藩記録〕○子爵土井利章所藏本

三月廿三日、

一 昨日被 仰出候通、訓練爲 御覽、五時之御供揃之る、新田野ニ被爲入、八時被遊 御歸候、

五月十二日、

一 於御列座、(小林、家老)元右衛門殿右之通申渡候様被仰聞、於役所申渡候、

臨時御家中夜廻り相勤、

太儀ニ 思召候、依之御

取扱方も可有之之所、御

時節柄、不被爲能其儀候、

町廻り方并築城土圖御

手傳罷出、太儀ニ 思召

候、依之御吸物・御酒被

下候、

但、金五百疋、

右、内山介輔・小形元助ヲ以申渡、

安政五年四月十二日

西洋流 師 世 話 役 範

砲術修行ニ付 御番方御免

一 統

五九

安政五年四月十三日

六〇

十三日午蘭國領事「クルチウス」Curtius 老中松平忠固伊賀守〇上田藩主ヲ其邸ニ訪ヒ、條約改訂ヲ要求ス。

〔老中松平忠固邸日蘭對話書〕

〇宮内省圖書寮所藏本
八條廳託手録所載

〔表紙〕
「午四月十三日、於

御老中松平伊賀守殿御宅、

松平忠固邸
日蘭對話書

和蘭領事官應接書寫

安政五戊午年四月十三日、和蘭領事官、於御老中松平伊賀守殿

御宅申立候趣左之通、

一應挨拶畢、

領事官

一今日者、重大之儀を言上仕候心得ニ參上仕候、御都合次第可申上候、尤手廣く申上度候得共、先今日者、大意取縮め、一通り可申上候間、追テ御委任之方被爲命候ハ、其方に委細可申上候、

伊賀守

一可承候、

重大ノ件ヲ
述ベシ

領事官

一昨年兩度之好ミ彌厚く相成、御條約も御取結ニ相成、附録之趣意も、至極宜敷事与奉存候、右ニ付、猶今日者申上度義有之候、

一西洋一體之模様者、追々御承知も可有御座候得共、猶政府カ申付越候趣も有之候間、次ニ可申上候、

一西洋各國、亞墨利加一同、御當國与條約取結度志願有之、和蘭國も同様ニ有之候、

一和蘭政府ニ有之候、各國トの御條約者、容易ニ御差許之儀難計ト相心得居候得とも、左

候而者、御安全ニ差支候御場合も可有御座候間、此度委細申上候儀ニ御座候、

一右御條約も、一旦ニ御取廣相成候而者、猶御差支之儀ニ可有御座候哉ト相心得候間、

漸々御取廣之方、可然奉存候、

一漸々も餘り永く相成様ニ而ハ、却る御不都合之義も出來可致候間、其邊ハ御勘考有御

座度候、

一度マ候處ハ、日本も諸州与同様ニ相成度、各國之志願〔イテ〕付、右同様ニ相成不申候而

者、宜クは問敷候、

一右ニ付、是カ後ハ、在留中兼々政府カ申付越候儀を可申上候、尤漸々事を運ヒ候取計

安政五年四月十三日

六一

西洋各國日
本ト條約ヲ
結バントス

日本ト外國
ノ間ニ事起
ラバ斡旋ス
ベシ

安政五年四月十三日

方を申付越候、

一右に付、事を純熟に取計度候、若御當國に萬一御危難筋之儀有之候ハ、達布可申上候、或者御當國政府より、御尋之義も有之候ハ、心附候儀可申上候、且又日本と外國との御引合出来候ハ、其節を力を盡し取計候ハ勿論、御六ヶ敷義を相増候様之取計方考不仕候、

一右に付、條約之義を、私へ被仰付候ハ、取計可申候、

伊賀守

一右考、和蘭國との條約に候哉、

領事官

日蘭條約ヲ
締結セント
欲ス
通用金銀輸
出入ノコト
輸入税ノコ
ト

一日本と和蘭との條約に御座候、

一右條約考、於江戸表御談判、新に取結申度奉存候、

一右條約中にて、長崎を布未事整兼候二三件有之候間、夫を取整度候、

一其初ヶ條考、日本通用金銀勝手輸出、外國之金銀も、同様輸入之義に御座候、

一二ヶ條考、諸國之租税を定度候、是迄之三割五分を相改め、其品々に付、運上を差出度候、

條約附錄改
正ノコト

一猶此上考、長崎を布取結候條約附錄を改革仕度候、

一右改革考、附録中にて、長崎・箱館に於て、日本人と和蘭人との交際を相改度義に御座候、

一右交際を御改革に相成、新條約に相載候ハ、諸州を布、自由之港と相唱候もの可相成、各國を布も、差支有之間敷候、

一日本之御都合も、右之内に相加へ候様可仕候、

一其内之醫道病院、諸科之職人傳習之事も相籠り候、

一扱御禮申上候考、拜禮無滞相濟、難有奉存候、

一猶於江戸御取扱振、御手厚く被仰付難有、道中筋も、夫々御手當被下置、難有奉存候、

一道中筋を布、御當國之御爲、且和蘭之都合宜敷義可有之と、心掛通行仕候、

一右に付、下關・兵庫を、長崎・箱館同様御開港相成候様仕度奉存候、

一外國之振合通り、和蘭を布、政務を取計候役人を江戸に差置、セケレターリス其附屬之者を差置度候、

一本國より、若輩之もの共を差越し、江戸に於て、日本語を稽古爲仕度候、

一右役人考、妻子を携候様仕度、於政府相願候、

安政五年四月十三日

六三

醫道病院諸
科職人傳習
ノコト

下關兵庫ノ
開港ヲ欲ス
公使ノ駐劄
ヲ欲ス

日本語ノ稽
古ヲ欲ス

安政五年四月十三日

六四

一若下關・兵庫御開に相成候ハ、長崎・箱館も、今一等緩優之御所置に相成候方、双方之便利と奉存候、

一今二ヶ條別段申付越候義を可申上候、

伊賀守

一可承候、

領事官

一右考、格別之御方に申上候心得を、是迄差扣居候、

一踏繪考、昨年御差止に相成、政府に於るも、格別難有奉存候、

一右御差止之御所置考、諸州に於る、速に承知仕候義と奉存候、

一外國之御交際に於る、右踏繪御差止考、格別之御所置と奉存候、

一右に付る考、此上御當國に於る、御危難筋之儀を有之間敷奉存候、

一御當國を、右宗法を御取用相成候を、和蘭におひて不相願、諸州も同様相願候義と考無御座候、

一右申上候通り、宗法傳染相願ハざる義に候得共、後來万一右宗法に染候もの有之節考、如何様之御仕置に可被仰付候哉伺度候、

踏繪ノ廢止
ヲ謝ス

耶蘇教徒ノ
處分如何

遊女ノ生ミ
シ兒ノ處分
如何

一右御返答、只今相伺候義と考無之、篤と御勘考有之候様相願候儀に御座候、

一和蘭人長崎滯留中、遊女に出生之兒有之、追る考外國人も同様之義可有之候、御舊例

考、出生之兒本國に連越候儀不相成候御國法に有之、右之舊例を御改革相成候様奉願

候、右等ハ、追る御相當之御所置可有之義とハ奉存候得共、猶篤と御勘考有御座度候、

一政府之御仁政ある、右人情を御察被下候様仕度、尤右母親承允之上に無之る考、連越候儀考不仕候、

一右様兩國親睦相成候得考、一港之内に於て、双方高官之役人可罷在、右役人往復之書翰

を、同様之格に有之度候、右ハ私事に無之、公務之事に付往復之文體ハ、双方同等之格

に有之度候、

一右件々一と通り申上候迄に御座候、猶委細之儀考、御委任被爲命候ハ、其方に御談判

仕、條約取整、双方調判仕度奉存候、

伊賀守

一申立候義考、夫迄に候哉、

領事官

一此外別段申上候儀無御座候、

安政五年四月十三日

六五

安政五年四月十三日

伊賀守

一何事同列共申談、掛り役人より談判可及候、

以上、

午四月十三日

〔蘭國領事參府掛并長崎奉行上申書案〕

○長崎縣廳所藏本
和蘭領事官參府御用留所藏

○四月十二日老中松平忠固へ

和蘭領事官并筆者蘭人共明十三日

御手前様御宅に罷出候道筋之儀申上候書付

六名

和蘭領事官并筆者蘭人共、明十三日(マ)時分御手前様御宅に罷出候に付、別紙道筋之通、通行爲致、途中爲取締、役々爲附添可申候、依之此段申上候、以上、

四月

〔老中達〕

○和蘭領事官參府御用留所藏

○四月十二日附在長崎奉行岡部長常へ

(朱卷)
「午四月十二日、御殿方、簡木貫一持參、」

六六

(島津家本外國關係文書
開集錄 開國起原)

松平忠固邸
へ蘭國領事
訪問ノ件

長崎奉行に

阿蘭陀

領事官

右明十三日九時過、伊賀守宅に可被差越候、

四月十二日

〔蘭國領事參府掛并長崎奉行覺書〕

○和蘭領事官參府御用留所藏

○四月十二日老中松平忠固へ

御宅に和蘭人罷出候節手續書

六名

和蘭領事官、來十三日、御宅に罷出候様御沙汰に付、彌御治定に候へ、前廣長崎奉行方申達置可申候、

一當日四半時前頃、掛一同御宅に罷出居、蘭人へ、九時過頃、罷出候心得ある、御都合相伺、只今可罷出旨、御目付支配向ヲ以、旅宿に罷在候長崎奉行支配向に申遣一、直に出門爲仕候積取計可申候、

一御平服御着用、掛一同も、同様相心得、御家來も同斷、

安政五年四月十三日

六七

蘭國領事訪
問手續ノ件

着服ノコト

安政五年四月十三日

六八

一蘭人々、長崎奉行支配調役同道仕罷出、御門前より下駕、調役一同御玄關を上り、領事官・書記役とも、大書院に相通可申候、

但、御玄關下座敷迄、御取次兩人程罷出、調役案内仕、公用人壹人、御玄關上鏡板邊に出迎、先立仕、大書院御廊下迄、御取次一同案内いたし可申候、尤筆記役も、一同こ上可申候、

蘭人への、會釋無之、調役之取次致し候心得之事、

蘭人罷通候後、調役々、外御席に御取次案内致し、休息爲致置可申候、

一大書院次之間に出迎、掛一同會釋可仕候、

一其節大書院に御出席、

長崎奉行蘭人召連、大書院に罷通、御椅子有之邊々、壹間許り下に御立被成、御一揖有之、御誘ひ有之、領事官椅子の前に立候節、乍御立無異之御尋等御挨拶有之、彼方々も、時候并御安否等、相伺可申候、右相濟、先ッ椅子に寄可申旨被仰達、御自身も、椅子に御着座被成、此時御給仕之者、飯臺三脚持出、多葉粉盆・茶も追々差出、煎茶茶臺に差出す、但、烟草箱に、多葉粉を入置可申候、且喜世留も、多分御差出之方、相用可申候間、其心得可有之事、

參府掛會釋

老中對面

對話

一掛り役々々、領事官引續御書院に罷出、御椅子に御着被成候節、椅子に寄可申候、

一通り時候等之御咄も有之候、申立候義も有之由こ付可承旨、御沙汰有之、此義何の方宜次第御斟酌、追々御對話相濟程合見計、茶差出、凡申上候義も切候へ、申立候義へ、是迄候

哉と、御尋有之、最早申上候義も無之旨、申上候へ、御目付々、御家來に申達、供宜旨と、通辯々爲申達、蘭人立候節、御立被成、御挨拶有之、六尺程御送之御心得、乍御立御一揖有之、懸り役々々、見計御先に立、次之間こ送可申候、同所御廊下々、公用人案内致、御取次等も、最初出迎之處迄送可申候、

一御對話中、掛役々々、御席々少々引下り列席、椅子に罷在可申候、長崎奉行へ、御座敷中央御應對之間、椅子に罷在可申候、

一御應對始り候得と、御家來を引可申候、

一御刀へ、椅子に着座迄へ、御後こ持居、椅子に御着候へ、御脇こ有之候御刀掛に被懸置可申、掛之面々、刀へ御次之間末之方こ差置申候、

一通辯之義へ、支配勘定格森山多吉郎差出可申候、尤通詞も、御席に罷出居、通辯萬一不都合も有之節と、心附候様可仕候、

一御應接へ、長崎奉行に被仰聞、奉行々多吉郎へ申聞候事与奉存候得共、多吉郎義へ、支配

通譯ノコト

安政五年四月十三日

六九

安政五年四月十三日

七〇

應接筆記ノ
コト

勘定格にも有之候間、御直に伺候も可然哉、懸跨候間、多吉郎伺候様可爲仕候、尤奉行も、御取次いたし候心得に罷出居申候、

一 應接之趣を、奥御右筆聞取居相認、長崎奉行支配向之内、一同相認可申候、

一 御玄關向、表席廊下廻り御障子等、取まつし有之、

一 對客之間、大書院とも、障子御取まつし無之、平日之通に可然奉存候、

一 給仕を、御家來相當之者へ、御都合次第可被仰付候、且又御門前見物等立可申候間、御門内外共、足輕少々御差出、制止等可被仰付、勿論早く被差出候ると、却る見物淺招候間、蘭人參候淺見懸出候位之方可然哉奉存候、

一 家具・煙草盆其外、御有合御用ひ可然候、

一 御武器へ、平日之通被差置候る可然奉存候、

一 御座敷向并御座敷廻り共、聊御取繕等と及申間敷奉存候、

一 御床飾を無之、

一 蘭人供方へ、下宿等に被差置候方、目立不申可然哉、

〔眞福寺詰蘭國領事參府掛日記〕
○帝國圖書館所藏本
 四月十二日、

中	田	海	助
渡	邊	峯	藏
向	方		
岡	田	源	三郎
嶋	田	林	三郎

一例刻交代、名前書夫々に達、

○中略、

一 明十三日、昼九時出門を、蘭人伊賀守殿御宅へ相越候旨、御小人目付高橋金之助方達有之候間、出役等之儀、例之通相觸、此方上役へ其段及文通候事、

○中略、

一 一夜五時門を、

一 門出切手十一枚、御小人目付高橋金之助へ返す、

四月十三日、曇、

中	村	佐	七
川	口	彌	一郎

安政五年四月十三日

七一

安政五年四月十三日

七二

向方

天野喜兵衛
平松喜太郎

一例刻交代、名前、書出ス、

一小遣定吉出る、

一稻澤彌一兵衛爲見廻相越ス、

一今昼九時出門ニ、蘭人兩人松平伊賀守殿ニ罷越、同夕八半時頃罷歸り候事、
但、出役詰合方平松・中村罷出る、廻方双方四人同斷、

〔幕府沙汰書〕

○東京帝國大學所藏本

四月十三日、

○中略

一伊賀守、宅ニ阿蘭陀領事官相越候ニ付、御用捨ニ、今日登 城無之、

〔安政年録〕

○内閣記録課所藏本

四月十三日、

○中略

一伊賀守、宅ニ阿蘭陀領事官相越候ニ付、今日登 城無之、

〔高麗環雜記〕

○東京帝國大學所藏本

四月十三日、

一蘭人、伊賀守殿於御宅、應接有之、

〔代官竹垣直道日記〕

○維新史料編纂會所藏本

四月十三日、晴、

一朝五半時出宅、○中略

御殿ニ出ル、○和蘭領事官、伊賀守殿御宅ニ相越候ニ付、奉行衆登

城無之、○宮重ニ逢、○四半時過退出、○蕃書調所見廻、詰合虎五郎、九時過退散、

〔湯蠻雜纂〕

○水戸藩士茅根伊豫之介手録
公爵徳川順順所藏本

四月十三日、和蘭領事官、上田閣老之宅へ應接有之所、蘭夷之倨傲甚敷、墨より内情を聞

得、輕侮致候事と相見へ候由、扱論する所の條ハ少々共、事ハ墨之申立より大なる

事之由、其節、上田之音聲低く、書留ニ指支候と、岡田新五太郎 應接之節、書役ニ出候、物語ありと

云、○中略

一蘭夷、十三日ニ上田侯へ罷出、申立候ケ條之内眼目、海軍操練傳習之事 三四年前より、幕方永井玄蕃等を被遣、追々

安政五年四月十三日

七三

蘭夷倨傲

「ケルチウ
ス」ノ地位
及人品

安政五年四月十三日

傳習を受

「ふり」を本に致し、長州下ノ關・攝州兵庫兩所へ港を開き、互市を始メ、尙又兩所之間、
内海にて海軍操練之修業をあり、自由に乗あるき度意味之より、尤外にもケ條あり共、
此事大眼目と云、又墨夷條約之事を付云々前こある越人之説、之事も申立候より、領事官と云事、蘭
語にては何と申候哉、コンシユルよりハ餘程上等之官と見エ、墨夷も敬を加へ候由、併
人品ハ小國丈う餘程劣り、先年長崎へ魯夷フウチヤチン來り候節も、此度之蘭夷をハ愚
弄せしと云、四月十六日、中根靱負話、

〔水戸藩士木村三穂介書翰〕○公爵徳川順所藏本
國事記所載

三穂介書狀、是又高橋より來る、○國事記

午四月廿一日、江戸方來簡之寫、○新家雜記

一岡田新五太郎へ用向有之、當十三日ニ罷出候處、此日領事官伊賀殿へ願差出候得共、ケ
條少く、願之趣ハ不容易より、岡田もあきれ、如何此先相成候や、嘆息ニ餘りあり候之様
ニ御坐候、併御用談ハ承り不申候、

十三日 伊賀殿宅應接出席

伊賀 土丹 (本) 長玄 民部 駿河 阿波
御徒目付與頭 御徒目付
菊池 大介 田中甚太郎 小山達太郎

忠固邸應接
ノ列席者

吟味改役
青山彌總右衛門

奥御右筆二人
佐藤清五郎

筆役
岡田新五太郎

領事官

イハドンクルキルシス

年四十五才

筆役

グルウフハンホルスプルツク

年二十四才

夷賊買物之品々

西洋翻譯書 數品 農業書類 數品 弓 十三四張 面・小手 三人前

以上、岡田新五太郎話、

新五太郎話ニモ、伊賀殿ハ、如何にも低音ニ有、書取兼、おーかゝる一答返シ不申候ハ、不
相成より、又領事官ハ、堂々と明寥(マヨ)之より、扱々こまりて候ことニ御坐候、最初よりあく
おくれを取候ハ、此先如何にも心配仕候、左も無之候も、和蘭ハ、墨夷よりも一段我儘
この、此方之申聞も不取用、隨意之振舞ニ有、諸役方アキレハテ居申候、堀田も、彌廿日歸
府ニ相成申候、川路一日おくれニ相成候や、又一日早く相成候や、堀田トハ一日違と申言
ニ御坐候云々、

(新家雜記)

「ケルチウ
ス」ハ「ハリ
ス」ヨリ傲
慢

〔水戸藩士鮎澤伊太夫書翰〕○國事記所載

四月廿二日、高橋より届、鮎澤書狀、

安政五年四月十三日

扱、御閑老往復一通入御覽申候、其宅書類他へ借出―不有合、定る何方より、相運候事と奉存候、堀・川等も、今明日之歸府可相成候處、如何之御決議可相成哉、六日、亞賊へ應接有之、未人心不居合、暫く下田へ引取相待候様諭候處、左様あらハ、幕も京も權と申無之、異議有之ものを、援兵可致候間御討罰可然、是迄者日本之爲こ深切こ計候へ共、左様之事あらハ、五大州之爲こ計り可申云々申候よ―御坐候、當十三日、伊賀殿御宅こゑ、蘭夷こ應接、其節岡田新五太郎筆者こ出候處、亞人へ打合(不明)候故、亞よりも壹際暴こゑ、願筋ハ廉ハ少候へ共、亞よりも不容易大造之事と心痛いと申候、應接之模様ハさ―置貴考之通、京師公卿を流―候、亞賊を追還―掛合直―致候、分目と相成候處、當今之御役人之腹こゑ、如何様無謀之事仕出―申候も難計、實こ我(徳川實昭)太公へ無實之御難釀し不申ものこ無之、御進退御驅引御大切之御場合こ御座候、

川越藩主松平直侯大和守書ヲ幕府ニ上リ、藩帑窮乏ノ狀ヲ陳ジ、借用金ノ返納ヲ猶豫センコトヲ請フ。

〔川越藩主松平直侯願書〕○伯耆松平直之所藏本
川越藩日記所載

○四月十三日老中久世廣周へ

私儀、養祖父(兼典)大和守天保十三寅年相海防禦蒙 仰候以來、今日こ至迄、不容易御用相勤來

海防勤務ノ
タメ藩帑窮
乏ニ陥ル

候段、武門之冥加難有仕合奉存候、不似之私汗顔不少候得共、彌微力を盡し、寸分之御奉公相勤候心底こ御座候所、唯々當惑仕候と、貧困窮迫こ御座候、尤勝手向不如意之儀者、毎以度々申上候通、從來之儀こ御座候所、天保度、海防御用蒙 仰、陣屋を始、所々臺場取立、大砲鑄造并手船製作等こ用途不少、多人數彼地に差向置、且數度夷舶渡來中こハ、永々滯船も有之、其時々、兵糧を始入費ハ勿論、一度こ養祖父自身出張致、在所表々も多分之増人數繰出し候仕合こゑ、物入而已相重り、既難相凌地こも至候得共、拜領金・拜借金又こ御貸附金等之御仁惠を基こ仕、多數之借財致し、九ヶ年間無滯相勤、同人死後、養父(兼地)靜壽齋代こ相成候も引續相勤、其後内海御新築之砲臺被成御預、彌増之冥加無此上、遂こ私儀、同様之蒙 仰難有奉存、倍勝手難澁こ者相成候得共、精力を盡し候上、無據養祖父以來、私こ相成候も、追々歎願仕、拜借金・御貸附金共、上納方三ヶ年、又ハ一ヶ年ツ、是迄被成下御猶豫候故、乍闕々虎口之御奉公相勤來、難有奉存候、乍去、右申上候通り、無理こ無理を重來候勝手向故、養祖父以來格外儉素相用候得共、右御用こ付る之借財向、計貳拾万三千七百兩こ相成、從來之借財向者、別る莫大こ合候得と、五拾四萬三千兩餘こ相成、高不相應之事こ有之、如何共此姿こ永續之目的無御座、當惑心痛此事こ御座候得共、猶必至を究、倒也候迄ハ行詰候心底こ御座候、然ル所、右連々之拜借金・御貸附金口々、別紙之通之

借財五十四
萬三千兩餘
ニ及ブ

内、嘉永二酉年御貸附拜借之分ハ、去暮以來、御猶豫之儀相願候得共、御聞濟不被成下、猶其外口々、當年上納之分六千兩餘、來未年より年割一ヶ年分上納高八千七百兩餘ニ相成申候、當時御警衛御用ニ付ル之用途九千兩程ニ有、相重リ候ル者、素より切詰之物成、是迄追練ニ而已相成居、更ニ配財之道無御座候、乍併、拜借金・御貸附金之儀者格別之御譯故、如何様共差略致シ、無滯返上納仕、御警衛御用勤續候様仕度、種々評議爲相盡候所、誠ニ以恐入候儀ニハ御座候得共、年割通無滯返上納仕、御警衛御用勤續候儀ニ、迎も此先見居無御座、甚以恐入當惑苦心罷在候、不容易御用相勤候上ハ、申上候迄も無御座候得共、萬一之節ハ家來共一同、輕命粉骨碎身仕候者共ニ御座候得共、常々宛行筋も相應ニ不遣候半有者、譜代顧恩之者トハ乍申、斯虎口ニ差置候上ハ、誠ニ以歎敷、不堪痛心儀ニ御座候得共、兼々申上候通之勝手振合、其上私養子引移、家督勤出を始、物入多々中、震災・風損等ニ有一時ニ入費相嵩、實ニ進退極場合ニ陷、更ニ融通之道絶有無御座、家督後早々右様之次第、殊ニ私養子之身分与申、家祖ニ對シ不好儀ニ御座候ヘ共、不得止候間、家之先格をも闕、出格之嚴法相立、儉素相用、家中之儀者飢渴を爲凌候迄之手當方ニ御座候有、如何にも歎敷難忍儀ニ御座候、右様之次第ニ有、迎も御警衛御用相勤リ候儀ニ無御座、日夜寢食を不安候、左候迎、容易ニ御赦免奉願候儀ハ、於武門無面目次第、可恥之至ニ御座候間、何事ニ爲

海防勤役中
借用金ノ返
納猶豫ナ請
フ

一家之微力を盡シ、是非共勤續度志願ニ御座候間、前文拜借金・御貸附金之儀、度々申上候も奉恐入候得共、何卒右之次第深 御憐察被成下、出格之御評儀を以、御警衛御用勤中、別紙口々返上納方、悉皆御用捨被成下度、偏ニ御絶申上候、此儀御聞濟無御座候上者、不本意之至奉恐入候得共、勝手振合可ニ取直シ候迄、御警衛御用御赦免被成下候様奉願候外無御座候、右御用筋之儀ニ、前文申上候通、養祖父以來、辛苦を盡シ永年相勤來候儀、其上當今之御時勢、進ニ出相願候有も相勤度此節ニ臨ニ、貧困之爲、後レケ間敷儀及歎訴候次第、如何共背本意候而已ニ有、畏縮不少奉存候、左候迎、返上納金無滯調達致シ候上、地場ニ付御警衛御用勤續候目的更ニ無御座、進退途を失ヒ、難堪恐惑儀ニ御座候、何卒右窮迫之地位、深き以 御憐恕、是非々々拜借金并御貸附金返上納方之儀ニ、御警衛御用勤中、悉皆被成下御猶豫、微力ニ有虎口一方之御用相勤續、養祖父以來辛勞之微功相保、忠孝萬一之寸志相立候様仕度、此段只管奉歎願候、以上、

御名
(松平直侯、川越藩主)

四月

○別紙

蓮池御金藏ニ返上納可仕分

一金七百兩

安政五年四月十三日

蓮池金藏ヘ
返納スベキ
借金

安政五年四月十三日

八〇

天保四巳年・同五年兩年、拜借被 仰付候金七千兩之内、來未暮方、年々上納可仕分、

一金千兩

天保十亥年拜借被 仰付候金壹万兩之内、右同斷、

一金千兩

弘化三年拜借被 仰付候金壹万兩之内、右同斷、

金貳千七百兩

馬喰町御貸附金・古拜借口々

返上納可仕分

金八百九拾六兩壹步

永八拾三文三分

無利足元高三万貳千九百拾七兩下永百四拾四文七分之内、當午暮方、年々上納可仕分、

金百八兩壹步

永八拾三文三分

右同斷、元高千八兩壹步下永八拾三文三分之内、右同斷、

一金四百兩

馬喰町御貸附金ノ返納スベキモノ

元金貳千兩口、納殘千六百兩之内、右同斷、

一金百六拾兩

右貳千兩之内、納殘千六百兩之利、

一金貳千兩

弘化二巳年拜借、

一金貳百兩

右貳千兩之利、

一金百貳拾兩

口々溜利金四千三百貳拾兩之内、當午暮方、年々上納可仕分、

金八兩三步

永百三拾八文九分

元金貳千兩之内、納殘千六百兩口、弘化二巳年壹ケ年延利金百六拾兩之内、右同斷、

金三千八百九拾三兩壹步

永三百五文五分

右同斷、去ル酉年拜借口々返上納可仕分

安政五年四月十三日

八一

安政五年四月十三日

八二

一金八百兩

元金八千兩口、納殘五千六百兩之内、昨已暮方、年々上納可仕分、

一金五百六拾兩

右八千兩口、納殘五千六百兩之利、

一金七百四拾六兩貳步

永百六拾六文八分

右八千兩口、溜利金貳千貳百四拾兩之内、昨已暮方、年々上納可仕分、

金貳千百六兩貳步

永百六拾六文八分

右之通御座候、以上、

〔川越藩日帳〕

○伯耆松平直之所藏本

四月四日、○中略、

一御老中松平伊賀守殿・脇坂中務大輔殿に、明朝御登

城前、御逢被 仰込之、御使者三上雄之進相勤之、伊賀守殿御用人山本四郎右衛門・中務大

輔殿同比永孫六に、御口上申述候所、明日と御用多に付、御斷被成候旨、以同人共、被仰聞

(川越藩記録)

之、

但、伊賀守殿に、被仰上候義も有之に付、外様御逢等も有之候ハ、御別間とる 御

逢被成度段も申述之、

○中略、

四月六日、○中略、

一御老中松平伊賀守殿・脇坂中務大輔殿に、明朝御登

城前、御逢被成 御座度、被 仰込之御使者小笠原源次相勤之、伊賀守殿に御用人波多

與大夫に面會、御口上申述候処、明日若差掛に御用向被成御座候に付、無御據御斷之義、

何事其内 御逢可被成之旨、同人を以被仰聞之、中務大輔殿に御用人金田蔀へ面會、御口

上申述候所、御逢可被成に付、四ツ時前迄に御出被成候様、同人を以被仰聞之、

四月七日、雨、○中略、

一卯中刻過、御出、御老中脇坂中務大輔殿に、爲 御逢被成御座、巳ノ刻過、

御歸駕、

一脇坂中務大輔殿に、今朝 御逢之爲御挨拶、御使者三上多平次御勝手に相勤之、

○中略、

安政五年四月十三日

八三

松平直侯脇坂關老二面談ス

安政五年四月十三日

八四

四月十三日、晴、○中略

一卯中刻過、御出、御勝手掛御月番久世大和守殿御登

城前、爲 御逢被成御座、左之御願書 御直之被差出、委細被 仰述候所、被御落手、厚

御差含可被成旨御答有之、巳刻

御歸殿、

但、御願書 御直筆之、別紙老御帳付共認之、兩通壹包、折掛之被出之、上ハ包、御名御直認之、

○川越藩主松平直侯願書、上ニ掲グルヲ以テ、之ヲ略ス。

一右御同方に、右御逢之御挨拶、御使者小笠原源次御勝手に相勤之、

○中略

四月十六日、曇、○中略

一卯中刻過、御出、松平伊賀守殿に御登

城前、爲 御逢被成御座、御勝手向之義之付、委細當十三日、御勝手方御月番久世大和守殿に

被仰上候之付、御内願通り相成候様、厚御差含被 仰出之、辰中刻過、

御歸駕、

久世閣老ニ願書ヲ出ス

松平忠固ニ面談ス

一右御同方に、右御逢之御挨拶、御使者小笠原源次御勝手に相勤之、

○中略

四月廿二日、○中略

一御老中堀田備中守殿に、明朝御登

城前、爲 御逢被成御座度、被 仰込之御使者三上雄之進相勤之、御用人淺井伊織に面會、

御口上申述候所、明日之御差支之付、御斷被成候旨、同人を以被仰聞之、

四月廿三日、晴、○中略

一千鯛一箱、御樽代五百疋、御頼御老中堀田備中守殿に、今般京都表方御歸府之付、爲御怡被

遣之、御使者三上多平次相勤之、御用人兼子文藏へ面會、御口上申書差出候所、御用向御

取懸之付、後刻披露可致之付、御禮之義御 宜相頼候旨申聞之、

但、本文御怡品之儀之、御用頼之場之御贈り之事、

○中略

四月廿七日、○中略

一御頼御老中堀田備中守殿に、去ル廿三日御登

城前、爲 御逢被成御座度段、被 仰込候所、御斷相成候之付、何事近日之内、猶可被

安政五年四月十三日

八五

堀田閣老ニ物ヲ贈ル

仰込之旨申述置候所、此節何角御用多可被爲入、殊此方様も、彼是御用繁被成御座候之付、近日之内に、御見合被成候得共、種々御願被成度義も被成御座候る、近日猶 御逢可被 仰込候へ共御延引候旨、爲御挨拶、御使者右同人相勤之、御用人兼子文藏に面會、御口上申出候所、被爲入御念候義、御口上之趣可申聞置旨申聞之、

略、○中
五月十二日、晴、○中

一堀田備中守殿御勝手は、明朝御登

城前、爲 御逢被成御座度、被 仰込之御使者三上多平次相勤之、御用人 金子文藏に申述候処、被成御承知、明朝五半時頃迄に御出被成候様、同人を以被仰聞之、夫々内藤紀伊守様に、右同斷、御使者右同人相勤之、御用人 安藤瀬平に申述候処、被成御承知、堀田殿御濟次第御出被成候様、同人を以被仰聞之、

但、堀田殿あるは、御別間ある御逢被成度旨被 仰込、御承知之、

一御老中内藤紀伊守様は、明朝 御逢之儀、先刻被仰込被成御承知候所、御差支之儀御出來候付、御斷被成候旨、御用人を御留守居迄、以紙面申來之、

五月十三日、晴、○中

堀田閣老二
借金返納延
期ヲ内願ス

一辰刻、御出、御手寄御老中堀田備中守殿に、御登

城前、爲 御逢被成御座、御拜借金御年延之儀に付、去月十三日、御勝手御月番久世大和守に被差出候寫御持參之、被差出之、厚御含之儀御頼被 仰述之、夫々松 三河守様・同確

堂様・同御物容様に、近々御在所に御發駕に付、爲御暇乞被成御座、御通り、御用人御呼出御口上被 仰述之、水戸中納言様・同前中納言様・同御簾中様・同鋭君様に、同斷爲御暇乞被成御座、御奥に御通り、御對顔御饗應被進之、亥刻前

御歸殿、

但、御供頭に支度被下有之候事、

一堀田備中守殿に、右御逢之御挨拶、御使者三上雄之進御勝手に相勤之、

〔川越藩記録〕○伯耆松平
直之所藏本

四月十九日、○中

一江戸へ御用狀到來、當十三日、久世大和守殿に爲 御逢被爲入、御直書を以御願被成候処、厚く被成御含候る、御沙汰可被成段被仰聞候旨、申越之、

○川越藩主松平直侯願書上
ニ掲グルヲ以テ、之ヲ略ス。

彦根藩士長野主膳 書ヲ藩主井伊直弼 二上リ、諸侯抑制ノ策ヲ

安政五年四月十三日

閣老ニ進言スベキコト、水戸藩ト提携ノ不可ナルコト等ヲ切論ス。

〔彦根藩士長野主膳建議書〕○子爵源榮一所藏本
井伊家秘書集錄所載

○四月十三日藩主井伊直弼へ

乍恐奉申上候、

京都ノ情勢
江戸ニ傳ハ
幕府ノ奥役
秘密ヲ洩ラ
ス

京都之様子も、追々世間へ洩候様子ニテ、此間中御旗本^(藩邸)なる寫取之書類を見受候處、皆々實事^(藩邸)なる、右ハ如何成手より洩候事哉と存候處、京都にてハ太閤殿・傳奏方等より出候趣、御當地^(藩邸)なるも御奥役之手より出候由、右ハ堀田家之西洋好、川路・岩瀬之徒賄賂を取、夷人之最負を致し候^(藩邸)付、皆々佞臣之爲こ主家之天下ヲモ取失ひ可申として、事こよりの徒を打果し候程之用意も有之趣、左候は、其上ハ一橋を將軍^(藩邸)と、紀を西丸へ、御家を御大老にして、御老中以下御役替之義、關東^(藩邸)なる御承引無之候ハ、一致して強奏^(藩邸)なるも可仕杯と、内々打寄評議之方も有之由、右趣意を考候處、是迄水府老公等之好言を尤こ存同意之方々も、能々内間へ入候得ハ、天下之威を奪ひ候きさし見へ候^(藩邸)付、左様なるも末を^(藩邸)んし、神君以來之御法則を失ひ候^(藩邸)ハ不相成處々、御家を立物^(藩邸)として年來之鬱憤を晴し候所存と相見へ、折々彦根公營中^(藩邸)なるケ様^(藩邸)之事被仰、堀田・岩瀬等赤面杯ト、一橋當りへも申込居候族も有之由^(藩邸)御座候、右ハ可相成義とも不奉存、物好之徒口々申て人氣を動し候迄

慶喜擁立幕
閣改ノ隠謀

人心收攬ノ
要アルモ輕
薄ノ語アル
ベカラズ

諸侯抑制ノ
策ヲ閣老ニ
進言スベシ

士氣ヲ鼓舞
シテ器ヲ用
フベシ

之事とハ奉存候へとも、閣老方にて此度之 勅命^(藩邸)を御隨ひ候事六ヶ敷思召候様なるハ、何と天下^(藩邸)一變之期^(藩邸)迄及可申ハ必定にて御座候得ハ、自然之節ハ二百餘年來之御高恩を御報し不被遊^(藩邸)るハ、乍恐不相濟候へハ、何分今之人氣を治メ候^(藩邸)ハ、先表を今之人氣^(藩邸)を叶ひ候様^(藩邸)を見せ置不申てハ、仰之旨も隨ひ兼候故、先人氣を取被爲置候事肝要之場なる候へ共、さりとして輕薄之御詞等御出し被遊候^(藩邸)ハ不相成、其上丹羽家^(藩邸)・土州家等、京留守居々申越候趣^(藩邸)なるハ、京都之御勢^(藩邸)ひ強く候間、此上ハ他を不顧強く被仰立候様^(藩邸)と皆々申越候趣、左候へハ、此儘諸大名之赤心を御尋^(藩邸)候ハ、只京都之氣を而已汲候様可相成、却る關東^(藩邸)に背候端も可相成候^(藩邸)付、早々御治道御決著之上、諸侯之氣を押へ候御手段無御座候^(藩邸)ハ不相成、其邊之事閣老方へ御添心被爲在候ハ、公儀へハ莫大之御奉公も可相成義と奉存候、

一御家^(藩邸)もケ様之時節^(藩邸)ハ一人^(藩邸)なるも其人を御撰出被遊度候處、是迄之人氣^(藩邸)にてハ御大事之御用^(藩邸)を立候人體ハ多分不相見候へとも、又候臨時^(藩邸)ハ存外良臣も出可申者^(藩邸)御座候間、只今^(藩邸)なるハ、士氣を勵し候^(藩邸)、其器を御試被爲在度奉存候、乍恐是迄ハ内外共思召ヲ考居御心^(藩邸)を合セ候事を詮と仕居候風儀^(藩邸)なる御座候へハ、今更一人立候^(藩邸)大事之御間^(藩邸)を合候程之明智も多^(藩邸)ハ有間敷候得共、御賢慮^(藩邸)にて士氣を御引立被爲在候ハ、御爲^(藩邸)

安政五年四月十三日

岡本ノ上書
ニ從ヒ水戸
ト提携スル
ハ不可

水戸老公ノ
心術宜シカ
ラズ

可相成器も出可申、當今之時勢ハ英勇之氣を勵し度義ニ付、君公御英雄を表ニ御顯シ被爲遊、其中ニ可然考慮を差上候様被遊候ハ、各心ニなき事迄も思召ニ叶候様之考可仕、其中ニハ實ニ御用立候人物も顯レ可申、其中ニても自分之名譽を顯し、公邊之御名を落し候てハ不相成旨、筋々被仰出候ハ、銘々主人之爲ニも同様ニ存、一心決定之士彌其氣を勵可申、（平介、藩政家老上書ハ三月二十八日ノ條ニ收ム）岡本之上書、御褒詞被下置候事ハ難有仕合奉存候、併水府へ取入之一條ハ甚非ニシテ、御有名之御家よしてハかけても有間敷事ニ候間、右答ハ拙者ハ岡本へ段々厚御心配之條々、君公ニも定る御満足ニ可思召、於拙者共ニ難有奉存候、扱右様之御心配故、又候御考端ニも可相成と存、拙者愚存をも申上候、御上書之旨御尤ニ候へとも、老公ハ昨冬公儀へ過言之御斷申上置、直様裏へ廻り京家へ讒奏同様之事被致候、左候へハ、文面にてハ如何程理を盡し尤と聞へ候ても、内心ハ非道之爲方ニ候間、たとひ如何程御迷惑相成候とも、非道ニ同意之思召ハ有間敷奉存候、併一橋ニも將軍ニ御直り、神君以來之御法令だ亂レ不申候ハ、如何様ニも御奉公ハ可被遊候間、御安心被成候様ニ申遣し候事ニ御座候、右同人之上書、御家を大切ニ被存候處ハ至極宜敷、京都ニ殿下ハ弱く、太閤殿之方ニ理を申ハ、癖儒之口ニ迷れ候事ニ、同人之非ニハ無御座候、水府へ取入等之事ハ甚非ニ、士氣を

勇氣ノ上申
ヲ嘉納スベ
シ

失ひ候御基本ニ御座候へとも、先ハ此御時節、言路をふさぎ候ハ不相成と存、右様ニ申出候事ニ御座候、勇氣を爲出候ハ、彌以正道を示し不申てハ不相成、又道を而巳申聞候ハ、勇氣くしけ候事も可有之候へハ、國初ニ諸方々參り候士氣ヲ治メ被成候御方々之御骨折、今更思ひやり候事共ニ御座候、
一 只今之時勢ニハ、君公之御英雄ヲ御表へ顯シ候ハ、多分勇氣ニ進ミ可申、其中ニ善を納、非を御用無之ハ、御方寸之中ニ可有御座奉存候間、少しニも勇氣を申上候者ハ、皆々思召ニ叶候様ニ御見セ被遊被下置候様、御賢考奉願候、以上、
四月十三日
義言上

鹿兒島藩主島津齊彬薩摩守 外交問題ニ關スル京都ノ情報ヲ得、之ヲ重臣ニ告ゲ、其對策ヲ諮フ。是日、家老新納駿河久 意見書ヲ上ル。

〔島津齊彬書翰〕○公儀島津忠重所藏本
島津齊彬公文書所藏

○四月十二日島津久光宛

一筆申入候、愈御平安珍重存候、然者外夷之事ニ付ル京都々申來候事有之、急ニ御談申度儀も有之候間、何と云く今日ニ登城可被成候、尤以満々家老中にも不申聞譯故、只定例御出之積ニ御出可被成、左候ハ、九ツ過ニ御逢可申候、誠ニ不容易儀到來以爲一候、委

安政五年四月十三日

京都ヨリ外
交ノ件ニ關
シ報アリ登
城ヲ求ム

安政五年四月十三日

細之御面談之上可申述候、恐々、

四月十二日

周防殿

用事

薩州

九二

〔新納久仰日記〕

○公爵島津忠重所藏本

四月七日、明後九日、指宿ヨリ

上様御歸殿之儀、被仰出候ニ付、今朝ヨリ用達茂右衛門事、爲差引遣候事、

一今晝指宿ヨリ、〔島津久徳、家老〕下總殿・拙者へ、山口直記ヨリ之御内用封相達候、右ハ京都原田才助ヨ

リ、極内申上候異國人御取扱振リ之重キ御内用向ニテ候事、

○中略

四月九日、○中略

一上様今朝巳之刻、指宿二月田御茶屋御立ニテ、七ツ半時分、御機嫌能御歸殿被遊候御事之、

四月十一日、用達茂右衛門事、指宿ヨリ今夕方罷歸リ候段、足痛有之、名代ヲ以テ届申出候事、

京都原田才
輔ノ報至ル

齊彬指宿温
泉ヨリ歸ル

四月十二日、出勤毎之通、明日ハ、花尾山并ニ一之宮へ、

〔島津齊興、前總主〕宰相様御位階御昇進之御代參相勤候筈ニテ、致手當置候處、亞墨利加使節一件、京都ヨ

リ申來候儀ニ付テ御用有之候間、明日者致出勤候様、左候テ、右之御代參ハ、若年寄へ繰替候様、致承知候ニ付、隼見殿へ相頼候、隼見殿俄ニテ餘程手當取込有之候半ナガラ、無據右之通ニテ候事、

○中略

四月十三日、出勤毎之通、昨日致承知居リ候異國人御取扱振之儀ニ付、存分申上候様トノ

御事ニ付、拙者存慮左之通リ相認メ差上置候、尤書付候ニハ不及事候得共、只今拙者見

〔兼〕居之成行ヲ申上置候、

墨夷御取扱振之儀ニ付、於京地堂上方上奏ノ趣有之、被惱

叡慮、關東表へ

仰達之御旨被爲 在候由、御内々承知仕、右ニ付、

御當國御手當向何様有之可然哉、存慮之程奉申上候様被仰付、左ニ申上候、

一、關東御取扱之事ハ、私式可奉存儀ニ無御座、何茂閉口仕候、乍去、是迄之御所置、於京地、御不安ニテ、以來御取扱振相替候ハ、是迄之御條約、御變易可相成、左候得ハ、異

安政五年四月十三日

九三

新納久仰外
交問題ニ就
キ意見書ヲ
上ル

安政五年四月十三日

九四

人共、難題可申立ハ一定ニテ、猶應接モ六ヶ敷相成、詰リハ爭亂ニモ及可申哉、誠ニ不容易時機成立可申奉存候、其路ニ至テハ、御當國三方洋海之御國柄ニテ、一入防禦モ御嚴重不備置候テ不叶勿論、當時御手當專務被仰付候御事ニハ御座候得共、猶一涯實意ニ基、諸所臺場始、大小砲御製造、玉藥等大分被備置、調練等モ猶無油斷被仰付候様有御座度奉存候事、

一、江戸御屋敷、當分モ守衛人數被差登置、大小砲モ御手當之事ニハ候得共、是以今一涯御手當被仰付候様有御座度奉存候事、

一、京大坂之儀モ、時機ニ依リ、守衛人數不差出候テ不叶儀モ難計御座候間、是亦人數賦等被付度奉存候事、

一、御國之儀ハ、前文申上候通三方海岸、殊ニ琉球島々ヲモ被相拘、餘國ニ違ヒ候御國柄ニ付、萬一及爭亂候節ハ、江戸御屋敷守衛ハ何程モ御手厚被仰付、其外江戸近海防禦之儀ハ、不及御斷、御國中モ御手當嚴重ニ被仰付候様有之度奉存候事、

右之通、大意申上候、諸御手當、只今ヨリ一涯御手厚被仰付度、尤今般京地

御評議之事ハ、イマタ關東御決着ニモ不至事ニテ、極御内通申上候譯ニ付、押出シ及評議、若哉何カ故障筋到來仕、以後御内通之塞ニモ相成候テハ、第一御不辨之儀ト奉

存候間、此涯至極内密之御取扱ニテ、御手當向ハ、只今ヨリ分テ御嚴重被仰付度儀ト奉存候、以上、

四月十三日

新納駿河

右之通、今日下總殿・拙者、

御前へ被爲 召、細々

御沙汰モ有之、且ハ御問合モ被爲

在候ニ付、心得之程ハ存分申上候、左候テ、右書付モ差上置候事、

略、中

四月十六日、出勤、九ツ時ヨリ二之丸御寶藏へ差越、御金壹萬兩出シ方イタシ候、此節京都

一卷ニ付、段々海防御手當筋有之御入用金ナリ、御側役山口直記・御趣法御用人福崎助

八・御納戸奉行東郷藤兵衛等相詰候、八ツ前相濟、直ニ退出候事、

略、中

四月十七日、略、中

一八ツ後ヨリ、御軍賦役安田助左衛門・稅所七郎右衛門等被參候テ、此節京地一件ニ付、御軍賦備、猶又御手厚不被仰付候テ不叶譯ニ付、段々申談事ニテ、夜入四ツ過被歸候事、其

安政五年四月十三日

九五

安政五年四月十三日

九六

内御船奉行松本十兵衛事モ、先頃ヨリ長崎へ軍船乗行方等傳習トシテ、御船手之者共被召付、出崎被仰付置候處、兩日以前歸着ニテ、今日拙宅へモ參リ、傳習之筆記、且ハ船中ノ諸事、繪圖面ナト段々持參有之候ニ付、助左衛門・七郎右衛門等、何レモ打寄り致熟談候、左候テ、松本ハ早目ニ被歸候事、

略、中

四月廿一日、出勤毎之通、今日モ

御前へ被爲 召、御軍備一件、段々被仰付、且吉川源右衛門へ、御内用金綱等之儀モ被仰付候段、致承知候事、

略、中

四月廿三日、七ツ後ヨリ、安田助左衛門・税所七郎右衛門・木脇喜左衛門被參候テ、御用談ニテ四ツ時分被歸候事、

四月廿四日、出勤、八ツ退出、夫ヨリ二之丸調練方へ罷出候、七ツ過、再度被爲 入候ニ付、直ニ罷出、先日ヨリ致承知候御軍備取シラへ事トモ、段々御内慮奉伺候處、品々御差圖被成下候事、

略、中

軍備及内用
金ニ就キ命
アリ

四月廿六日、略、中

一今日出勤之處、御小納戸伊集院中ニテ以テ、新橋下臺場之儀ニ付、別テ御趣意違之筋ニテ、大形之至致取扱候旨、

御叱リ承知仕、誠ニ奉恐入候、仍則テ御軍賦役等、右之臺場へ差遣シ、且ハ田中仁右衛門心得等、細々糺方イタシ候處、仁右衛門御答申上違候處ヨリ、大キ御趣意違ヒ相成候哉ニ事情相分リ候ニ付、其段中ニ・仁右衛門等ヨリ申上候處、殊之外御機嫌御解ケ被下候段、中二等ヨリ承知イタシ、誠ニ難在奉存候、暫時ハ何様ニ御斷申上候テ可然哉、大キ心痛イタシ候處ニテ、七ツ前迄相詰居候テ退出候事、

略、中

四月二十七日、出勤毎之通、略、中

一今日山口直記ヲ以テ、京都・關東惑亂之次第極内々ノ御書付、下總殿・拙者兩人限リ、拜見被仰付候トノ事候へトモ、今日拙者拜見不相調候間、下總殿御預リ被致候、京地・關東之御混雜、大變之御模様、此末如何可相成哉、誠ニ以テ我々敷モ奉恐入、配念之事ニ、

四月廿九日、一昨日、下總殿御預被致候京地・關東混雜之御書付、昨日拙者相受取リ、細々拜見イタシ候、今日御側役山口直記へ相付、返上イタシ候、何共奉驚入候次第、此末之御

安政五年四月十三日

九七

京都及關東
惑亂ノ報

安政五年四月十三日

首尾如何可相成哉、誠ニ以治亂不定ノモトト奉存候程之事ニ、
一今日海防急務論一結、山口直記ヲ以テ御下被下候間、御預申上置候事、

〔鹿兒島藩士〕原田才輔京都報告書○公爵島津忠重所藏本
齊彬公史料所載

○三月鹿兒島藩廳宛

鷹司太閤内
覽辭退ノ風
評

〔鷹司政通〕太閤殿御儀、一昨日頃、御内覽ヲ御辭退御願被成候由、此度ハ多分可被 免哉、何レカ
御所向、御混雜不相成候テハ宜哉ニ候得共、既ニ昨日、万里小路殿御引籠可被成杯被仰
立、御同列方ヨリ御説得等モ被有之候由、

朝廷ヨリ幕
府ニ御沙汰
書下ル

一御所向御返答之次第、江戸表エ被仰進候段、去ル廿八日、御所向エ御達ニ相成候由、右ハ
何レ江戸ヨリ

思召被仰進、彼是御往復ニ可相成哉ニ候得共、約リハ是迄、御三家方以下諸侯方、江戸表
エ兼テ被差上候御建儀書ヲ、可被入

叡覽ニトノ御中折レニテ、御所置可相成ヨリ外有之間敷哉ニ、内實其筋之御方々之御見
込之趣、極密挨拶申候、如何可有御座哉聞取之儘、此段申上候、以上、

午三月朔日

勅答仰出サ
レノ裏面

異國一條ニ付、

御所表御返答之御模様洩レ聞之儀、内談仕置候先キ之者申聞候者、右一條、一ト比トハ
餘程御秘シニ相成候趣ニテ、聞込後レニ相成候得共、左之御趣意柄ニテ、最早御旅館エ
御返答ニ相成候哉之由、尤御返答振、内見モ仕候得共、堂上方之御前ニテノ事故、得寫取
不申由、

一人心居合方之儀、

關東ニテ御引受相成候上ハ、

祖宗之被立置候儀ニ相振候モ、痛ミ

思召候得共、先ツ當節之次第無御餘儀御事ニ

思召候間、御瑕瑾ニ不相成様、御取計頼

思召候旨、

一右之外、御警衛向等之儀ニ付、思召之廉モ有之候由、

右之趣相洩シ申候、今一段不委敷、取摘候聞ヘ口ニ御座候上、後レナカラニ御座候得共、
御斷旁入御内聽申候、且御所内ニテモ、兎角御存込一樣ナラズ、議奏久我家ニハ、是迄御
爲方ヲ被存候テ、被申立置候儀モ有之候処、前段之御返答振ニテハ、御存意ニ相振レ候

久我建通辭
職ヲ請フ

安政五年四月十三日

安政五年四月十三日

一〇〇

旨ニテ、御役御免之御出願被致候トノ風説御座候由、右之段申上候、以上、

三月十二日

勅答文案ニ就テノ紛議

此間極密申上置候御返答振一條等之儀、相洩シ吳候モノ承込候次第ハ、堂上方之内ニテ書面内見之上、記臆之趣ヲ相洩シ吳候儀ヲ申上置候儀ニ御座候處、右書面之内、御頼ト御座候二字、

御所内ニテ御承引無之御方々有之、彼是御混雜ニ相成、兎角 御返答振、御未定之由ニ相聞候旨、猶又相洩シ申候間、此段申上置候、以上、

三月十五日

過刻御沙汰御座候一條、御趣意差合其筋エ罷越探索仕候處、左ニ申上候、

一 明十八日、御參 内之儀ハ、未廣橋殿御退出無之難相分候得共、是迄之振合ハ、多分御參 内被仰出候ハ、廣橋殿御宅ニテ、所司代始夫々へ、御通達向御取計之儀ニ付、明十八日、御參 内ハ無之哉ニ被察候、明十八日、御參 内ト申儀ハ、定テ昨日頃、廣橋殿御附衆エ、於

229782

傳奏東坊城卿辭職後補闕ノコト

禁中御祥月之日限御問合有之故、十八日ニテモ可有御座哉ト被仰上候儀ニテモ可有之哉、何分ニモ只今迄ハ、御參 内之御沙汰無之、若哉彌十八日御參 内ト申儀相分リ候ハ、早速可申越様手筈仕置申候、

一 東坊城殿御退役御跡ハ、一向ニ御噂モ無之由ニ候へ共、御老中御發駕後之御評定ニ可相成哉、關東表エ御人躰御相談被爲在候上ニ無之テハ、跡御役被仰付候儀無之由、且又不取留風聞ニハ、久我殿押テ御出勤之儀、御沙汰御座候付、昨日ヨリ御出勤有之由、御同人者、御順之儀ニ候へハ、御跡可被仰付御心組ニテ、御出勤被成候事ニモ可有之哉ニ相聞申候、

一 勅答御案之儀ハ、最前モ申上候通、一兩日已前ヨリ、格別御取締ニ相成候付、一向ニ御洩無之、東坊城殿御退役後、別テ御嚴重ニテ、頓ト御噂モ無之程之儀ニ御座候、乍併、先日申上置候

勅答御文言之内、御加除有之候由ハ承リ候へトモ、御案未拜見不仕、若哉御下ケニモ相成候ハ、勘辨仕、寫早速可差越旨、尤

勅答後ニテモ、同様差越可申旨、内々申居候儀ニ御座候、右之通、聞取之儘、此段奉申上候、以上、

安政五年四月十三日

一〇一

安政五年四月十三日

三月十七日

一〇二

乍恐口上

堂上八十餘
名九條關白
邸推參ノコ
ト

當十一日、晝七ツ時分ヨリ暮時迄之内、上様ヨリ御堂上方御召有之候由、追々ニ公卿方八拾四卿程御參内、右御人數一時ニ九條殿(御患關白)被押詰、同日夜五ツ時分、不殘御引取ニ相成、何カ至急之様子ニテ、御沓不被召

鷹司東坊城
兩卿賄賂ヲ
受ク

禁中へ御上リ、草履之儘御越ノ方モ有之、既ニ九條殿御玄關ニ、右草履殘リ有之候由、然ルニ、御趣意曉ト不分候得共、鷹司太閤殿金三百兩計、東坊城殿ニ三四ケ度ニ同五百兩計、御老中堀田備中守様ヨリ、御賄賂御受、禁中御評儀(議)之次第御内通被遊候趣ニ付、諸卿方御立腹、被仰合九條殿へ被押詰候哉ニ風聞、
一上様ヨリ、異國一條ニ付、

九條關白ノ
コト

鷹司太閤殿ヲ三四ケ度計御召被遊候得共、御所勞之旨御斷被成候付、當月十一日比、上様ヨリ以來何事ニ不寄差構申間敷候旨、太閤殿ニ被仰渡候由風聞、
一九條殿、亞人一條ニ付、御變振惡敷候由ニテ、先月廿五日比、九條殿ニ、久我殿御參内御面上、九條殿ヲ被言籠御歸殿、直様御引籠被成候由、且又九條殿御在勤中、久我

鷹司太閤ノ
コト

殿御儀、御所へ御參 内無御座候旨風聞、

一鷹司太閤殿御儀、關白職御勤中、

禁裏御圍米三拾万カ、三万石カ曉ト不分、關東表へ被仰立候處、御承引有之、然ルニ、御當職 九條殿ヨリ、禁裏ニハ御圍米ハ不用ニ付、難澁之御堂上方ニ配當爲致度旨被仰出候處、鷹司太閤殿ヨリ、此方御役中致置候儀、當職之自儘ニ難相成候由御答被爲在候處、九條殿儀、當職ヨリ取計候儀、御用ヒ無之候ハ、當職御辭退可致候旨被仰出候由、

主上ハ攘夷
ノ御決心

一禁中様ハ、亞人何レニモ相果シ可申、勝利ハ其時之運命ニ任セ候儀付、朕儀モ出陳可致候様被仰候由風聞、右之趣不取留空說而已ニ候得トモ、相聞ニ候儘、此段風聞奉申上候、以上、

三月十七日

勅答文ノ御
趣意

此間關東ヨリ御返答之 勅答御文段之趣意

神宮始、被對 御代々、

東照宮以來之儀、御變革之處、如何 思召候、其邊於關東、御勘考被在之候様子之由、

安政五年四月十三日

一〇三

一左之趣、御添書ニテ御達可被成哉、未御談シ未定之由、

伊勢之地ヨリ五里四方、諸陵ヨリ三里四方之内エ、夷人立入間敷様トノ事、

前段御文言、昨夜八ツ時比、漸御取極メ、今日午刻比迄ニ、御伺書廣橋殿方ニテ出來、今明日之内ニ

叡覽可相成由、

一十四五日比、備中守殿御參 内之上ニテ、右之御返答可有之候由、其砌川路殿・岩瀬殿エモ御酒肴可被下哉、是ハ御評議中之由、

一改メテ十七八日比、御暇參 内、其節關東エノ御返物、并御拜領物有之由、

一關東ヨリ御返答之御趣意ハ、關東ニテ御出來無之、(奉還御志)青蓮院宮并東坊城御相談之上、東坊城家ニテ、御内々御直筆ニテ御出來、今度御上京之御方之内ハ、極内御案文被遣候付、關

東坊城卿幕府ノタメニ御返答文ヲ作ル

東エ其儘御達相成候付、其御趣意ニテ、御返答被仰進候事之由、右ハ何レヨリ相聞エ候事哉、難分候得共、不取留事乍ラ、

御所表御混雜ニ相成、東坊城家、昨日御退役之御願書御差出被成候由、且又不取留惡說

青蓮院宮鷹司東坊城三人ハ同腹ナリ

ニハ候得共、太閤殿・青蓮院宮・東坊城家、全御同腹ニテ、一旦御評定相決候事モ、其後違變相成候儀、間々有之由、

議奏加勢任命ノコト

一久我殿、今度之一條御評定之節々、兎角御摺レ合有之、御引籠ニ相成候付、一昨日坊城家

ヲ以テ、御出勤之儀被仰諭候処、何角御取合ニ相成、坊城家俄ニ御痛痛ニテ御退散之上、(後見、願表)

同日ヨリ御引籠相成候付、議奏衆甚御無人ニ付、御出勤迄、加勢中山家・正親町三條家ハ被仰付候由、

一江戸表エノ御返答振、御銘名御存寄有之、容易ノ事ニ無之、有体書顯候テハ、此度御上京之衆之内ニ、怪我人モ出來可申場合相成間敷共難申哉ニ付、廣橋家ニハ、

廣橋卿ノ穩和論

東照宮以前ヨリ都テ武邊エ御任セノ儀ニ付、穩之御答有之候方、奉對御先代テモ無此上儀ト、再應被仰立候処、漸ク前段之御趣意ニ、御治定相成候由、

一青蓮院宮ハ、川路殿御内々御參

殿有之、何角御密談モ有之候由、且者今度之一條、關東江御内通モ有之由ニテ、一切箇條ヲ以、關白殿ヨリカ、青蓮院宮ハ御尋相成、御答之趣奏聞有之候処、

主上殊之外御立腹ニテ、先ッ江戸表エノ御返答、先日來其儘ニ相成、右之調手間取候事之由、

一兵庫開港之一條、何レニモ御除之儀、此度之

勅答ニ御書加可相成哉、今一通別紙ヲ以御達可相成哉、今少シ難相分由、

主上逆鱗ノコト

堀田開老參
内ノコト

拜見仕候、彌御安全珍重奉存候、然ハ、過日御咄申入候一紙ハ、手ニ入候ニ付、極内拜見致候、相違之處掛紙テモ可仕被仰下候處、此間以來モ御咄申入候通、粗々私一見之儘申入候得共、御別紙サヘ漸御廻ニテ、篤ト拜見候位之事ニ有之候、尤□□堂上列參ノ後、相替リ候儀ハ未聊モ不存儀ニ有之候間、此儀ハ何トモ只今モ篤御返答申入兼候、乍去、先ツ預リ申置、手元ヘ廻シ候ハ、校合可仕候、

一老中參内之儀、又々昨夜モ、大久保大隅守殿用人入來催促有之、則其人ヘ申入候處、今少々ノ處打合不相付候事故、今日之處モ延引ニ相成候得共、明廿日ニハ、必參 内被仰出候事ニ可有之候間、今十九日午刻前後未刻迄ニハ、本多殿方ヘ通達ニモ可相成、尤差掛候事故、事ニヨリ御殿ニモ無之便宜ノ方ヨリ、可被申入歟モ難被計ト申返答ニ有之候、乍去、明日之處モ又々延引モ難計候得共、十カ九ツ迄、明日被仰出儀ト被申入候、且又參内ノ儀ハ、何レ兩度ニ可相成候由ニ有之候、右之次第故、今日被仰出候節、私共ヨリ、御殿ニテ可申入迄ニ、將軍家ヘ於御前直ニ可申入モ難計候ヘトモ、聞付次第可申入候、一堂上方列參聞繕候處、追々相分候ヘトモ、今少々相分兼候處モ有之候間、重立候方、中山大納言殿・正親町三條中納言殿・大原三位殿・豊岡三位殿邊ノ様聞ヘ申候、尙又相分候

ハ、可申入候、以上、

三月十九日

別紙

今度堀田殿ヘ附添上京ノ川路殿其外ヘ、御料理ニテモ可被下哉之事、右ハ何レニモ無之、從關東被進御品ニ附被申原矢十郎殿・立田彌助殿等エ、御料理拜領物等有之候、餘ハ無之候事、

御返答御案文、昨十九日、堂上方一同、未申刻參

内被 仰付、右御案内ニテ御返答可相成候間、拜見之上、難有可奉存旨被相違候処、大原三位殿不承知之由ニテ、難儀ヲ被爲仰、御文言之字儀ヲ初、其外論被掛、彼是論判有之、昨夜迄ハ一向御返答御治定ト申体ニモ無之事之由、不取留相聞候付、此段申上置候、以上、

三月廿日

奥州仙臺家老片倉小十郎儀、此節上京、堂上方之内、野宮家ハ親類之由、同家ニ竊ニ逗留

安政五年四月十三日

一〇七

大原重徳勅
答文案ニ不
服ノコト

仙臺藩片倉
小十郎上京
ノコト

安政五年四月十三日

一〇八

罷在、何用ニテ上京有之候哉之儀、野宮家ニテ被相尋候処、此度備中守殿爲御使御上京ニ付テ之儀ノ由、尤此度備中守殿ヲ以、從江戸表被仰進候御趣意ハ、江戸表ニテ諸侯方ヲ始メ多分御不伏ニ有之、

御所向御返答之次第ニ寄候テハ、備中守殿ニ仕掛ケ可申内存之由、右ニ付、兼テ人數モ手當致シ、右人數ハ、江芻路仙臺領分ニ内密差置有之候哉之趣、小十郎密々之噂、野宮家被承、段々厚説得被致候哉之由、右之趣不取留風聞相聞候付、野宮家内聞ハ勿論、江芻路仙臺領之処、急速探索仕居候付、虚實相分リ次第可申上候得共、假初ニモ不容易風聞ニ付、不取敢先ツ一應此段申上候、以上、

午三月二十一日

宮堂上臨時參内

昨日御沙汰御座候堂上方群集之儀承探候処、左之御方々、

青蓮院宮
關白殿
近衛殿

宮堂上列參
ノコト

職事

鷹司殿
一條殿
三條殿
廣橋殿
久我殿
徳大寺殿
萬里小路殿
坊城殿
裏松殿
廣橋殿子息
葉室殿
清閑寺殿
中御門殿
万里小路殿子息

安政五年四月十三日

一〇九

安政五年四月十三日

一一〇

御用掛

中山殿

御近習之内

飛鳥井殿

中院殿

三條西殿

正親町殿

日野殿

烏丸殿

橋本殿

勸修寺殿

野宮殿

庭田殿

五條殿

冷泉殿

山科殿

右之御方々、昨廿三日、午刻比ヨリ參 内、夜五ツ時比ヨリ四ツ時比迄ニ退出有之候由、
右ハ去二十日附、觸流之廉ニテハ有御座間敷、御役儀又ハ御用掛ト奉存候付、御評議之
筋探索仕候得共、一向採取兼候付、尙精々探索仕罷在候、尤群集之廉ハ延日ニ相成候哉、
又ハ密事之御評議ニ候ハ、事柄相顯候テハ、觸流モ余リバツト仕候儀ニ付、不審ニモ
奉存候間虚實等迄探方罷在候、尙ホ承取次第可申上候得共、先此段一應申上置候、以上、
三月二十四日

朝廷御沙汰
箇條ノ件

此度之一條ニ付、御箇條之趣、精々探索仕候得共、堅ク秘合、極意巨細之儀ハ相聞兼、全
浮説迄之事柄多可有御座候得共、承込候趣、左之通御座候、
一元來關東ヨリ、諸藩人心折合方之儀ニ付、
叡慮御伺之次第モ有之候処、右一條ハ、於
御所向モ、不容易事ト被 思召、御心配モ有之候由、孰ニ折合方之儀サへ、如何様共關東
御引受可被成トノ御事ニモ相成候ハ、御安心可被遊歟ニ候得共、是ハ素々御伺ニモ相
成候程之儀、輒於關東御引受ト申手續ニハ相成間敷トノ御内評モ有之候由之処、存外御

安政五年四月十三日

一一一

安政五年四月十三日

一一二

内評ニ符合之御返答被仰越、則備中守殿ヨリ被仰達候ニ付テハ、右ハ内通致シ候者無之候ハテハ、右之御返答ニハ相成間敷、先人心ノ折合ハ關東ヨリ御伺之一ヶ條ニ候処、御返答ニ關東ニテ御引受トノ御文言、何共不都合不審トノ事ニテ、於

宮中禮儀被有之候処、東坊城家ヨリ、右様之儀彼是不審ヲ立、議論ニモ及間敷哉ト被申候ヨリ、兼々同家内通ヲ一同疑被居候折柄、一同平日之宿意モ有之、旁大談判ニ相成候由、東坊城家太閤殿エ被駈付、内實内通之次第、并前談判之儀ヲモ被申上候由之処、太閤殿ニモ殊之外御立腹、一体同役ニハ如何ニ候哉ト、御尋有之候処、睨ト相談被致候トノ答無之、又相談不被致トモ不被申、何歟ニ半ニ被申上置、退出掛ケ廣橋家エ被立寄、御返答内實心付申上候儀、相談被致候様ニモ被申述候処、廣橋家ニハ更ニ不被存候由ニテ、相談致シ候杯トハ以之外之旨、是又立腹被致候由、其後引續御役辭退願書被差出候事之由、然ルニ、又一説ニハ、東坊城家ヨリ、右之次第書面ニテ被申遣候処、右比同家ヨリ、廣橋家エ書面參リ候由、右之返事被差遣置候上、即刻東坊城家ヨリ、被差越候書面之本紙ト、廣橋家自分ヨリノ返事案トヲ所持參内被致ヨリ、頻リニ東坊城家退役之仕宜ニ相運ヒ候哉之由ニモ相聞申候、

鷹司太閤立腹ノコト

廣橋光成立腹ノコト

關東ヨリ賄路ノコト

東坊城卿ニ就テノ疑惑

三條實萬東坊城廳長ニ辭職勸告ノコト

被致積之由、專ラ風聞致候由、此儀、受納千兩又ハ五百兩共申候、又一説ニハ、東坊城家エ、兼テ生島ト申者、此生嶋儀、出所名前差當リ相分リ不申候、方ヨリ被借入候金子之内、五百兩計當節句前返金相成候由之処、前書内通之疑念モ有之、折柄之儀ニ付、右返濟之金子者、全ク關東ヨリ御差贈之金子ニ可有之、無左ハ、當時御役中トハ乍申、左程潤澤之手許共不被存トノ趣ニテ、彌以疑念相増、風聞高ク相成候事之由ニモ相聞申候、
一東坊城家ハ、是迄議奏サヘモ余リ御勤無之家之処、太閤殿御在職中、御同人エ取入、廣橋家外二家程ヲ打越、傳奏被仰付候由ニテ、右等是迄ニモ偏執致シ、右三家ハ勿論、彼是申居候堂上ノ向モ有之、其外何角意味合有之向々モ有之哉ニテ、夫トハ不申、此度内通、金子受用等之一條ヲ含、混雜致候事之由、
一東坊城家ニハ、此度退役之趣意ハ、全廣橋家之所爲ニ被存、殊之外同家エ怒氣被差合、品ニ寄可被差違哉之氣色ニモ被相成居候哉ニ内實相聞申候、
一當十日比之由、(實萬、内大臣)三條家ヨリ、東坊城家被相招、密々御退役之儀被諭候処、同家被相拒候由、其節内府之申條ヲ可被背哉之旨、三條家少シ言葉荒々被申候而、其儘被相別、翌々十日比ヨリ、東坊城家被引籠候由、其後御役被免候御内評、最初ハ御役被免候上、禁足ヲモ可被仰付哉トノ仕出シモ有之哉之処、左候テハ、余リ廉立、身分之障リニ可相成哉ニ

安政五年四月十三日

一一三

安政五年四月十三日

一一四

付、禁足之御沙汰ハ無之様ニト、議 奏衆強テ被申、御役被免候迄ニテ相濟候事之由、
一當十二日比、徳大寺家

大原重徳東
坊城聽長ヲ
刺サントセ
シコト

御所表ヨリ退散掛ケ、鷹司殿エ被相越、夫ヨリ 九條殿エ被相越、歸宅掛ケ、日ノ内之
由、刻限、馳下 九條殿表門通り半丁計北手ニテ、大原三位殿繼上下着帶刀被致、中間壹人被
召連、行逢ニ理不盡ニ、徳大寺家駕籠之戸ヲ披キ、屹相ヲ替、東坊城ト聲被掛候処、駕籠
之中ヨリ、徳大寺之旨答有之候処、御印ヲ見違ヒ龜忽之段被相斷、其節同家ヨリ、大原殿
何故右様不意之事ニ候哉ト被相尋候処、今度東坊城家堀田備中守エ 御評定之儀ヲ内通
被致不忠之至ニ候間、此所ニテ刺違ヒ、我モ自滅致シ候処存ニテ、左候ハ、

御所表一統以來之響ニ相成候ト存、推參仕候旨答有之由、何分荒々敷景色ニ付、徳大寺
家ヨリハ、何等之儀モ不被申被別、其儘相治リ有之候由、

一御所内之女中ト、九條殿御密通有之、其取扱ニテ東坊城家惡クシミヲ受候ト申説、且九
條殿之件、實事ニ候哉ト之儀、

准后御殿三上藤
實石井前宰相息女

て る 女

四十四五才

右てる女儀、

女御御里方ニ被爲在候節、上藤ニ被召出、相勤被居候節、關白殿戀慕被致候儀有之、則先
年承合被仰付、追々ニ申上候書付散亂仕、相揃不申候得共、見當リ候別紙二冊、寫差上申
候、御密通ト申ハ、右てる女ニテモ可有御座哉、右者長々病氣引籠出仕モ無覺東旨ニテ、
願之通御暇被下、新清和院御召仕、從

禁裏被進候御人之儀故、昨冬中、御切米取越願書去已八月被申立候処、當月差入願之通
被仰渡候由、

此儀御取締掛ニテ承合候処、右之通相違無之、御切米取越之儀、當月朔日願之通御下
知有之候旨申聞候、

右てる女之外ニハ、至テノ老婆之外、近頃御暇被下候方無御座候、然ル処、てる女生涯被
下物之儀ニ付、東坊城家被相拒候由之一條段々承合候得共、差當相聞兼申候、猶精々承
合、聞取次第可申上候、
右精々心配承合之趣、書面之通り御座候、色々手筋ヲ替再應承合罷在、殊之外延引相成
候段、宜敷御斷申上候、以上、

三月廿五日

○鳥津齊彬、外交問題ニ關スル京都ノ情報ニ接シ、更ニ書ヲ江戸留守居早川五郎兵

安政五年四月十三日

一一五

安政五年四月十三日

一一六

衛ニ與ヘテ、幕閣ノ情勢ヲ探リ報ゼシム。次ニ其書翰ヲ收ム。

〔島津齊彬直書〕

○島津齊彬
公文書所藏

○四月九日江戸留守居早川五郎兵衛へ

愈無事珍重存候、今夕致歸着候、入湯餘程相應いゝ候、扱申越候亞奴之事心得申候、然ル處、別紙之と滾り、才輔が申越候に付るを、此比色々閣老と一め大心配評議も可有之と存候、必勝之見込とも無之、無謀之大和あま一以之議論御取用ひ之事、扱々可歎事（松平忠國様申)ある、天神下心配さつ一入申候、彌諸大名に再應御尋に茂可相成哉、又者不容易一大事ゆへ、在國之面々參府よて大評議可相成哉、夫ら之様子早々承合セ可申越候、最早承り出シ候る、申遣候とは存候得共、幸便に任セ申入候、

一西丸之事も被仰出候様子に聞得申候、如何之都合に候哉、承度候、

一水戸・土州が立派に申候人油斷不相成由、是れ大ると推察之所、阿州・越前・井伊・因州なとのと相察し申候、肥前如何か、是れ其様成馬鹿も申間敷と存申候、

一地震之間之事、是れ澁谷のを新敷候る、好之所へ引直し候る宜敷候、雪庵（彌助)が今度申遣候

間、同人に承り合、宜敷可取計候、尤玄碩（重次)が雪庵にも申遣候、

一務（田尻)に可申候、郷兵衛便が可遣と申候品を、當月末式日が遣候間、其段可心得旨可申聞候、

歸り掛ケ取込申入候、以上、

四月九日

五郎兵衛に

〔島津齊彬直書〕

○島津齊彬
公文書所藏

○四月十八日早川五郎兵衛へ

一銅も下直之品有之次第取入可差下候、其地在合御座候ハ、舟便なる可差下候、助八（彌助)に向ケ可申候、

一筆申入候、愈無事珍重存候、然者別紙（所見ナシ)寫之通才輔が申來候間、定る堀田も歸府大評議と被存候、何分當時手強き御返事、誠は後患之基ひ、不容易事と存申候、天神下其外之様子、早々可申越候、萬一御破談之節者、何時爭亂可差起も難計候間、此上勅命なる者致あゝ無之候間、自國之固メ第一なる、手後も相成候ると不可然事ゆへ、臺場・大砲其外手當一日も早く取計候外と無之と存候間、追々申談シ手當可致治定候、先第一兵糧・硝石之手當申付置候、右に付る田町も只今之通りなるを相濟間敷、不叶迄も手當を十分と不取計候ると世間之外聞如何に存候間、普請之事も御座候へ共、田町の方も手後も相成候ると如何に候間、大元丸残り金早々申下ケ候る、其方に振向ケ可然哉、且又、加様

安政五年四月十三日

一一七

幕閣ノ情勢
ヲ報ゼシム
自國ノ警備
ヲ急務トシ
之ニ着手ス

在京ノ原田
才輔ヨリ情
報至ル

安政五年四月十三日

一一八

幕府ノ奉命
ハ重大事

琉球人參府
問題

費用ヲ節減
スベシ

之時節ニ相成候へ者、借金も出來候程は才覺第一にて、自ら棄損可被仰出候間、以つ方より、才覺第一と存候、此段其地之以様子、三原申談、(薩五郎)以見切可取計候、

一關東之御請、誠り一大事にて、此御請次第にて、治亂治定之境と存候間、様子等早々可申越候、右様之事候ハ、錫も又々高直可相成と存候、無手拔可取計候、此一義破是立、一兩度打拂候とも、後來之處六ヶ一く、ほまり和親可相成、只々可恐内亂難計と存申候、彌破談ニ相成申候ハ、無謀血氣之族競立可申候得共、一兩度手強き目ニ逢候ハ、其者共忽チ和親を望候ニ相違無之候、當時水老・土州・立花・因州とよろこひと被存候、一か一以後後悔相違無之と存候、

一彌御破談之様子あるを、琉人參府如何可相成哉、何分不容易時節到來と存申候、彌六ヶ一き事候ハ、江戸定式入用等別にて取締第一にて、此節中々人の氣を兼候る、體能き方にて不相濟と存候間、其時大奥入用等其外十分ニ減少可取計候、此段藤五郎申談、極内心得可罷在候、先と要用早々申達候、以上、

四月十八日

猶々、彌ニ候ハ、普請出來候とも、大奥先ツ澁谷之の可然と存申候、猶ま様子より、此方よりも可申遣候、極内々申入候、以上、

用事

五郎兵衛ニ

島津齊彬直書

○島津齊彬
公文書所藏

○四月二十八日早川五郎兵衛へ

兩通二十五日相達シ、委細令披見候、愈無事平安珍重ニ存候、申遣候條々誠ニ不容易事とせん候、京都様子も中々六ヶ敷、伊賀所存も尤候得とも、夫を異國之掛念も薄く候得共、何分京都之居合如何可有之哉、奉書にて相濟候へ者宜敷候得共、萬一違勅之所被仰出候者、内亂差見得申候、左候得者京都に隨從之諸侯も可有之、其ときを以の外之事ある、後來何とも難計と存候、伊賀考も良策とは不被存候、萬々一宣旨被仰出候様相成候る、第一國元之所置甚々六ヶ一々、此義當惑至極ニ御座候、御雙方共、無據事ゆえ、不當不障、自國之固メ第一候外有間敷哉と考申候、此後少一も無油斷承り合可申遣候、

蜂須賀齊裕
ノ態度ハ意
外

松平忠固ノ
意見ハ不可

幕府對京都
ノ關係如何

一阿州之事扱々存外候得共、これを公邊聞合セ違のと存申候、同人事越前申合セ一橋御養君之義第一ニ申立候、夫故當年も在府と越前も申立候哉ニ被存申候、まの何ぞ證據有之候哉も難計、彌左様候へ者不相濟人物ニ御座候、尾州之事格別了見と有間敷、只此度之條約御不承知のと存候、何分身柄之人々ゆへ、甚た不宜、御家門格別之面々、右様

安政五年四月十三日

一一九

安政五年四月十三日

一一〇

之事ある者、徳川家衰微之基ひ、天下之御爲可恐事ニ存候、異國之るゝ内亂之方、此方之考あるを六ヶ一き様に被存申候、京地之様子追々承候へ者、押付る奉書出候るを、最早天下大亂相違無之様存申候、吳々も委細承り合、早々可申越候、

一猶又極内申入候、此節京地之様子、兼る公邊之被成れた餘り御手輕ゆへ、夫々の事迄も引出シ、内々此度之機會ある、關東之威光を減シ候處に、堂上・地下共に申候哉に内々承り候間、夫々押付之取計有之候るを、一往人氣動亂無疑、其節若飛脚之往返も如何可有之哉、且又内密之書面等遠慮第一ニ存候間、隱顯墨之方色々有之候ゆへ、様子により文言を一通りある、間ニ隱顯墨ある密事認め可遣候間、其節を火にあぬり候る、又を緑礬を水ことの一、其水中にむと一候る見可申候、其方々も隱顯墨ある密事可申越候、隱顯墨之方々、式日便拵候る可遣候、中々油斷不相成間、此段申遣置候、且飛脚も六ヶ一き節を、足輕飛脚も掛念ニ存候、其節を僧徒宜敷候間、大圓寺・大中寺に申談シ可取計、先年臥雲並に大中寺に萬一の節を其心得第一と申置候事も有之候間、極々用心之あめ申遣置候、決して他言有間敷候、先々要用早々申入候、以上、

四月二十八日

要用

五郎兵衛に

幕威薄ラガ

密書ニ隱顯墨ヲ用フ

○附録

〔島津齊彬書翰〕○島津齊彬公文書所藏

○四月二十七日島津久光宛

過日芳翰忝存候、其後愈御平安珍重存候、扱御書面ニ通被遣篤と致披見候、至極宜敷御座候間、此節便堅山迄爲持遣し、永江に及相談候様申付候、外壹通是又御尤ニ存候、委細御面談之上、追々御相談可申候、此間御腫物之より、如何ニ候哉、御加養專一ニ存候、扱又、江戸之様子早川内々申遣候、不容易事なる、萬一奉書なる御取極メ之段被仰上候ハ、京都之御都合以外之事かと存候、左候得と外寇内亂之方一大事と被存候、扱々不思議之時節到來と存候、早川方之書面内々相廻候、猶又御勘考專一ニ存候、御覽濟御返却可給候、庭之菊咲候間、御慰ニ致進入候、要用御報旁早々以上、

四月廿七日

周防殿

御報

(事條叢書)

十四日己未 鹿兒島藩主島津齊彬薩摩守 領内吉野原ニ於テ藩士ノ馬追ヲ閱

シ、歸途、銃藥水車所ヲ檢ス。

〔新納久仰日記〕○公爵島津忠重所藏本

四月九日、○中略、

一上様今朝巳之刻、指宿二月田御茶屋御立ニテ、七ツ半時分、

安政五年四月十四日

一一一

外寇ヨリモ内亂ヲ恐ル

安政五年四月十四日

御機嫌能御歸殿被遊候御事、

略、中

四月十四日、晴天、東風少々、今日吉野馬追有之、

齊彬吉野原
ノ馬追ヲ閱
シ歸路銃藥
水車所ヲ檢
ス

上様五半時分御供揃ニテ、御登セ有之候、左候テ、御歸リ掛、壹里塚之本ヨリ、不時ニ嶋路御通行、大興寺境内へ御通り拔、瀧之頭銃藥水車所へ被爲

入、細々御見分被遊候由、今日ハ、彼方人足共モ、都テ暇差出、馬追見物ニ差越居候處、中途ニテ不時ニ被爲

入候段承付候者共、駈付候者共十人餘罷在、掃除方等ハ、兎哉角出來之由、見聞役竹下伊右衛門等罷出居候ニ付、

御直ニ何茂御聞被遊候、到テ御都合ハ、宜敷、大鐘比

御立被遊候段、届承リ、不時之事ナガラ、御不都合ハ、無之由ニテ安心之事、

○附 録

〔新納久仰日記〕○公卿傳
忠重所藏本

四月十九日、○中

一今日、出勤、八ツ退出、夫ヨリ下總殿列立、二之丸調練方へ罷出候、七ツ過

二ノ丸調練

上様再度之御出ニテ調練有之、大鐘過キ相濟、退出候事、

四月廿日、朝六ツ時過、雨モ相應降リ候ヘトモ、調練場へ出張候、今朝、東目・西目長崎御手當人數調練見分之管ニテ、

下總殿・大目付主水殿等江モ出席有之候ヘトモ、雨降彌増シニ相成候故、取止ニテ引取候、左候テ、毎之通出勤、八ツ

退出候事、

略、中

四月廿四日、出勤、八ツ退出、夫ヨリ二之丸調練方へ罷出候、七ツ過再度被爲 入候ニ付、直ニ罷出、

十五日庚申 議奏・武家傳奏及曩ニ國事ニ關シテ進言セシ堂上・非藏人等

ノ忠勤ヲ賞シ、金ヲ賜フ。

〔權大納言大炊御門家信回狀〕○維新史料編纂會所藏本
伏見宮侍御牧家諸留所藏

○四月十五日公卿へ

四月十五日、〔驛券久我建通〕
右大將殿被申渡、中山大納言殿・大炊御門大納言殿以下八拾八人、列參之衆中廻覽、

就今日 御用召參 朝候処、今度之一件ニ付、去月十二日列參之輩誠忠歎願之儀、格別

御満足ニ被爲在、猶又誠忠報國之志可有之様被

思召候、右ニ付、過日自關東進獻之品、以

思召誠忠之輩に賜之候、右之御品、明後十七日、家信に被相渡候旨ニ候間、被相渡候ハ、

早々御傳申入候、御礼之義、自十七日小番參勤之便、人別ニ議 奏衆迄、御礼可申上旨、右

安政五年四月十五日

去月列參ノ
公卿等ノ誠
忠ヲ賞シ關
東ヨリ進獻
ノ品ヲ賜フ

安政五年四月十五日

一二四

大將被申渡候由、中山大納言被示傳候、依申入候也、

一右之付、若年之輩、任血氣狠之參集申立之儀、杯無之樣、議奏衆方爲心得被示候事、

一右之御品、自關東進獻之品分賜候之る之無之、實之

思召賜候旨之候、是又爲心得被示候、尙拜面委細之可申述候事、

四月十五日

家 信

追る、明後十七日未刻後、從小番番頭、家信亭に御申出可給候樣希入候也、

番頭添觸

右之通被示候故申入候、十七日申刻在賢亭に御申出可給候、早々御廻覽、今日中に可廻給者也、

四月十六日

在 賢

〔議奏記錄〕○宮内省圖書寮所藏本

四月十五日、

略、○中

一墨夷一件御精勤ニ付、御本役銀三枚少、但坊城殿二枚、御拜領、同上ニ付、國忠之堂上、并非藏人等江、

判金三枚、以大乳人被出、堂上之分、中山大納言江被相渡候、

〔菅葉〕○五條爲記日記、宮内省圖書寮所藏本

四月十五日、庚申、晴、御用之義候間、只今可參之旨、從議奏衆被觸、然處、過日來風邪平

臥候間、不得已令不參了、後剋大炊御門大納言家信來、

今度之一件、去月十二日列參之輩、誠忠歎願之義、格別御満足ニ被爲在、猶又誠忠報

國之志可有之樣被 思召候、右ニ付、過日自關東進獻之品、以 思食誠忠之輩に賜之

候、御品之、明後十七日、番所々々第一に被渡候旨之候、御禮之儀之、自十七日十日之

間、小番參仕之便、議奏衆迄但不及表使、且兩公へも不及參上、可申上旨、右大將被申渡候由、中山大納言

被演說候事、

一右ニ付、若年之輩、任血氣狠之參集申立之義、杯無之樣、議奏衆方爲心得被示候事、

一右之御品、自關東進獻之御配と申譯之る之無之、實之 以 思召賜候旨、是又爲心

得被示候事、

一菅少納言（東坊城實長）に不被下旨、内々爲心得被示候事、

一十七日參集之不宜候、夫故第一々々斗、已剋過可參 朝、若又爲定不參候ハ、次

之人可參 朝之事、

右之通被傳、深畏入不堪感涙候、元來列參申立不法之義ニ付、御咎も可有之哉之處、申立

之趣意御採用ニ相成、一同本懷畏入之處、不存寄御褒詞、剩御褒美之御沙汰、實ニ恐懼畏

安政五年四月十五日

一二五

思召ヲ以テ
關東ヨリ進
獻ノ品ヲ賜
フ

列參ノ不法
ヲ咎メズ却
テ褒賞ヲ賜
フハ恐多シ

國事ニ關ス
ル精勤ヲ賞
シ議奏以下
堂上非藏人
ニ金ヲ賜フ

安政五年四月十五日

一二六

入之義、不及申儀候、然處、一條事濟と申場とも不相成、此後成行如何難斗候、只今御褒美被下候ると、自然申上度儀有之候とも、先差扣候方と相成候於、然レハ、忠も不忠も難分存候間、御褒美之義者、御時節も可有之候間、先唯今之處御延引と相成候様願度、趣意亞相に示談候所、至極被同意、亞相再參 内、右大將に被申立之處、上之思召こそ、此後可申上義と、彌可申上との御褒美故、拜領之方可宜と被答之旨、又候入來被傳之間、不得已任其意了、○中略、

十六日、辛酉、朝來雨、午後罷、○中略、豐岡三位隨資來、明日拜領物之義と付有示談、予趣意同様之間、昨日之次第申述了、

〔坊城俊克日記〕○孝明天皇紀所載

兩役ニ銀三枚公卿非藏人ニ判金三枚宛ヲ賜フ

四月十六日、墨夷一件ニ付苦勞思召候ニ付、兩役一同銀三枚ヅ、賜之、下官同二枚賜之、御予用繁之頃、所勞不參故 昨日被出云々、同上ニ付、過日連署之輩以下非藏人等へ、判金三枚賜之由、明日分配拜受云々、

〔參議野宮定功回文〕

○伯耆橋本實顯所藏本 亞墨利加國人顯立ニ付所存御尋并雜誌所載

○四月十七日權大納言廣幡忠禮等へ

四月十七日、申戌、晴、從禁中廻文到來、

夷族之儀ニ付申立神妙

思召候、此一包被下候、

但、先日之儀者、右之通

御沙汰ニ候得共、依事候る者、大造とも相聞候間、尙可有心得、議卿内話共、委細者拜面可申述候也、

右之通、以一紙、中山大納言被申傳候、各三百疋宛ニ候、乍御面働、定功亭、御家來給候様願入候、御互ニ不存寄儀、深く恐入存候、御褒賜之段、畏入存候得共、吳々も不存寄儀恐入存候、仍早々申入候也、

追る、甚と自由恐入候へ共、秉燭比以後、御使給候様希入、御入魂申入候也、

四月十七日

源大納言殿 (實徳) 正親町中納言殿

新宰相殿 (參議日野實定) 右衛門督殿 源宰相中將殿

右宰相中將殿 (參議橋本實顯) 承候、御互寔不存寄御褒賜、深恐畏入存候、彼是御世話畏入候也、

追る、御禮ハ十三ヶ日程之間參朝

之便、議奏面會申上可然旨ニ候也、

安政五年四月十五日

一二七

廣幡忠禮等ニ金三百疋宛ヲ賜フ

安政五年四月十五日

一一八

乘燭之後、(野宮定功)新相公羽林亭に申出、直落手之儀申遣了、

〔菅葉〕

○宮内省圖書寮所藏本

十七日、壬戌、晴、豐岡三位隨資・新源三位(大條)有容・少納言時萬朝臣・大夫實梁・修理大夫量長朝臣等來、今日賜御褒美ニ付可參仕之處、風邪未快復之間、次之人三室戸三位(陳光)被參仕候様頼遣、參 内以前入來故、萬事申含置、申刻前又候又候入來、彼賜物八包三百疋宛、被傳、予之分畏入拜受、相番之分、早速以廻文相招授與了、自餘人々之分、三室戸方番々第一之人に被傳了、○中略

廿二日、丁卯、陰晴交、所勞快方ニ付參 内、過日學習院御褒美、且今度之一件ニ付御褒美、兩様之御禮議奏衆に申入之處、被承知、

〔橋本實麗日記〕

○東京帝國大學所藏本

四月十七日、壬戌、晴、○中略、從新相公羽林、廻文到來、夷族之儀ニ付申立、神妙思召有御褒賜、(五條爲定)金三百疋、○中略

十九日、甲子、晴、今日吉田祭之、仍沐浴着衣冠、參于彼御社、此次參内、過日賜物御禮、謁議卿申上、

〔長谷家記〕

○孝明天皇紀所載

四月十七日、去月十二日參集歎願之輩八十人餘各賜有之云々、金三百匹、内々、外様之人々同斷、現任之人々亦同、後日加入、且一分願書被差出之人々、各金二百匹云々、

〔非藏人日記〕

○東京帝國大學所藏本

四月十七日、壬戌、晴、當番議奏右大將殿、其外參集、坊城殿不參、傳奏參侍、

一關白殿御參、

一墨夷之儀ニ付、去月十三日・十四日歎願列參之輩、御満足 思召候、猶又誠忠可存、依之

金拾兩御内々賜之旨、議奏久我殿番頭代重進江授給、番頭江可被渡之處、御内々、之儀ニ付、不嚴重之旨被命、議奏衆・御内儀

等、寄々十日程之間ニ、銘々御禮可申上、關白殿・兩役衆等里亭惣代ニ而可行向、同卿被

命、即右之輩參合、議奏衆・御内儀等御禮申上、殿下已下爲惣代兩人ッ、明日行向也、

〔非藏人日記〕

○東京帝國大學所藏本

四月十七日、壬戌、晴、議 奏當番久我大納言殿、傳奏廣橋前大納言殿參侍、

一關白殿・左大臣殿等御參、

一墨夷之儀ニ付、去月十三日・十四日列參之輩、御満足ニ被 思召、猶又誠忠可存、依之金

拾兩番頭代授給、尤番頭江可被渡之處、御内々之儀ニ御禮兩役衆・御内儀等、寄々十日程之間ニ、

銘々可申上、且又關白殿番頭番頭代行向、兩役衆里亭明日惣代ニ而行向可然之旨、同卿被命、不及太閤殿、

安政五年四月十五日

一一九

墨夷一件ニ就キ列參ノ非藏人ニ金ヲ賜フ

安政五年四月十五日

一三〇

一 鴨脚秀名	泉亭俊益	吉見正登	小野元連
松尾相德	松室義邦	松室誠之	鴨脚秀保
松室重進	松尾房恭	橋本勝從	藤嶋宗福
橋本堯寬	祓川親敬	松室重甫	松室重周
松室重雅	鴨脚秀邦	大西親篤	吉田良祥
松本爲邑	鴨脚光興	藤嶋廣之	鳥居南高胤
祓川親雄	鴨脚光長	松室重勸	松室重功
松尾相永	松尾相保	松室重良	松室重承
中川元績	松室重直	松尾爲美	松室重以
大西親眞	吉田良榮	羽倉信度	吉見正直
松室禮重	富田光表	祓川親恕	羽倉信可
小野元凱	中津瀬忠勝	森公昌	安田永親
大西親禎	岩橋元氏	松室重篤	鴨脚光顯
羽倉信平	松室重睦	松本爲成	泉亭俊彦
大西親典			

一雖爲出頭、被、仰渡後ニ付、不能其儀也、雖然、同意ニ付出頭之事故、今度拜領物一同ト
 同様ニ分配可致之旨、番頭ヨリ内々議奏衆江相伺之处、至極尤之事故、可然可致取計之
 旨被命、依之右五十七人江令分配畢、略、○中

十八日、癸亥、陰晴、眨々雨、遠靄、略、○中

一去月十三日・十四日列參ニ付拜領物御禮、今日參番之輩、御内儀・兩役衆等江申上、且里
 亭廻勤ハ、今日殿下御禮物代正登參上、兩役衆惣代兩人行向、且兩奉行衆里亭第一秀名爲

御風聽行向、略、○中

十九日、甲子、晴、略、○中

一墨夷一件拜領物、今日出頭之輩、兩役人衆・御内儀等へ御禮申上、略、○中

廿日、乙丑、雨、略、○中

一墨夷一件ニ付拜領物、今日出頭之輩、兩役人衆・御内儀等江御禮申上、略、○中

廿二日、丁卯、晴、略、○中

一墨夷一件ニ付拜領物、今日出頭之輩、兩役衆江御禮申上畢、

廿三日、戊辰、晴、略、○中

一墨夷一件ニ付拜領物、今日出頭之輩、兩役衆へ番頭誘引御禮申上畢、

安政五年四月十五日

一三一

安政五年四月十五日

一三二

〔亞墨利加國人願立ニ付所存御尋并雜誌〕

○標本實履手記
伯爵標本實履所藏本

四月十九日、丙子、晴、已剋計參内、過日賜物御禮、謁議卿申上、傳聞、現任之外、申立人々各御褒賜有、金三百疋、實梁同拜受、深恐懼之至之、但、後聞、醍醐黃門（忠順）・夏長朝臣等、不賜云々、

〔議奏記錄〕

○宮内省圖
書寮所藏本

五月十五日、雨降、

一岩倉侍從（具嗣）今日出仕ニ付、去日墨夷一件賜物御禮被申上候、承置候、宜
頼入候、

〔堀口貞明筆記〕

○東京帝國
大學所藏本

京師風說

○中
略、

一四月十七日、堂上方八十六人當三月中旬御連判並被仰上候御方に御褒美黄金三枚被下、御一人凡金三百疋位ニ當り候由、且九條殿下・鷹司大閤御方に、黄金五枚ツ、三條内府・議 奏久我殿・徳大寺殿・万里小路殿・坊城殿・裏松殿・傳 奏廣橋殿、外中山殿・正親町殿・三條殿等に、黄金壹枚ツ、賜之、右御賞賜之、乍恐御文庫御手許々出候由、

〔如坐漏船居紀聞〕

○然代藩士山寺源大夫雜記
久保來復所藏本

今度一件、去月十二日列參之輩、誠忠歎願之儀、格別 御満足被爲在候、猶亦誠忠報國之志可有之様被 思召候、右ニ付、過日關東進献之品、以 思召誠忠之輩へ賜之候、右之御品、當番所御方之分、明後十七日、爲定へ被渡候旨、御禮之儀之、自十七日小番參勤之便、議奏衆迄御禮可申上旨、右大將被申渡候由、中山大納言被演說候事、
一右ニ付、若年之輩、任血氣猥參集申候儀抔無之様、議 奏衆々爲心得被示候事、
一右之御品、自關東進献之御配と申譯之るハ無之、實ニ以 思召賜候旨、是又爲心得被示候事、

九條殿參

（尚忠）

内拜謁申上之ハ、先日公家原八十八人徒黨仕、私邸へ群參、彼是申出候條奇怪

千万、不肖ニハ候得共、關白職を蒙り居候者、如才之義ハ不仕、聊 勅答文体不居合辻、ケ

様之振舞、第一身分之程を不知上、人心を動候事多罪之條、とらめ可然奉存候と言上、

主上ハ、始々默然として被爲 在候所、 勅答ニ曰、彼等々振舞ハ、皆

朕カ所爲之、卿惡ト云哉、九條公被申上候之ハ、否決テ聖旨を惡トハ不申上、唯公家原

之所爲不宜と申、 勅之、然ハ

朕カ所爲ナレハ惡モ善ト云、彼等カ所爲ハ善モ惡ト云ヤ、彼等カ所爲ハ皆

朕カ所爲ナリ、且始之答文ハ、卿カ善ト思フニアリ、彼等建議シテ後、卿又善トス、中頃文

安政五年四月十五日

一三三

列參堂上へ
ノ賞賜ニ九
條關白不滿
ノコト

國事ニ就キ
列參ノ堂上
等ニ金ヲ賜

安政五年四月十五日

一三四

意變リテ、前後遙ニ異ナリ、後ノ文ハ、
朕カ意之、則彼等カ、

朕カ意ヲ助ケ爲ス所之、卿猶彼等ヲ罪セントスル乎、公言塞リ赧然トシテ退ク、故ニ特ニ
此舉ニ不及ト云、

○頭書

被爲下賜輕重不同あり、又不被下者ありと云、人々不審なる、能々評議去て見れハ、實ニ
八十八人の内ニモ、不被下筈の事ありと云、
叡明、古今絶倫、可仰、

○附録

〔坊城俊克雜記草〕○内閣記帳
課所藏本

四月九日、加勢忠能卿、

議奏加勢及
非藏人ニ金
品ヲ賜フ

一今度外夷一件ニ付、本役同様繁勤苦勞ニ 思食候付、○中山忠能正親町三條實愛
於鈴口兩卿へ被授、同上ニ付、非藏人調筆物繁多ニ付、以同様金千疋賜之候旨、女房被傳、非藏人番頭代相渡了、

〔非藏人日記乾〕○東京帝國
大學所藏本

四月九日、甲寅、晴、當番議奏加勢中山大納言殿、傳奏廣橋前大納言殿參侍、

○中

一墨夷一件ニ付、御用繁且書物等も多有之ニ付、御詰一同江、金千疋被下之旨ニ而、自議奏衆番頭代江被渡、御禮御内議、
兩役衆等申入、里亭行向、殿下・太閤殿爲惣代番頭代兩役衆申合、爲惣代右行向之旨、番頭代方噂有之、但、翌日也、

〔非藏人日記坤〕○東京帝國
大學所藏本

四月九日、甲寅、晴、當番議奏加勢中山大納言殿、傳奏參侍、

○中

一先日來墨夷一條ニ付、御用繁執筆等苦勞思召、金千疋御詰之輩へ給之旨、議奏坊城殿被渡、兩役衆・御内儀以表使御
禮申上、殿下・太閤殿・兩役衆里亭惣代御禮壹人宛行向也、

幕府、高松藩主松平頼胤讚岐守ノ歸藩ヲ停ム。

〔幕府沙汰書〕○東京帝國
大學所藏本

四月十五日、○中

松平讚岐守

當年御暇年ニ候得共、御暇被下間敷候、

右於御黒書院溜、老中列座、○内藤信親、老中紀伊守申渡之、

○水戸藩御城書海防部・安政年録ニモ、マタ本書ト同一内容ノ記事アリ。

〔靖公實錄〕○伯耆松平
頼壽所藏本

十四日、折々御頭痛氣ニ被成御座候る、暑氣之時分長途之御旅行御障被成候間、例年之通

安政五年四月十五日

一三五

松平頼胤ノ
歸暇ヲ停ム

安政五年四月十五日

一三六

御暇被仰出候得と、木曾路御通行被成度旨、御用番内藤紀伊守殿へ、御書付を以御伺之處、
十九日、可爲勝手次第旨、御付札を以御達有之候、

十五日、御登城、御禮濟、御居殘、於御黒書院溜之間、御老中御列座、當年御暇年ニ候得共、
御暇被下間敷旨、内藤紀伊守殿御達有之候、公去ル癸丑以來、無御據追々御滯府被成候處、今年ニ御歸國

十二日、御老中松平伊賀守殿へ、外御用向ニて御出御逢之節、公邊御模様御内々御開合被成候處、當年ハ御暇被仰出
候答ニ相成居申候間、御安心被成候様ニ之御答ニ有之候處、同廿二日、御城附野萱七之丞義、與御右筆上倉彦右衛門
殿へ、御内々之御使ニ罷出候處、太守様ニ之、毎々御苦勞御迷惑之御義ニ可被爲有候得共、當年ハ御在所へ之御暇と、
不被仰出御模様ニ御座候間、序ふら御内々御心得迄ニ申上置度由被申開、右伊賀守殿御答振と相違ニ付、猶又御模
様委く御探り被成度、同廿四日、間之御機嫌御伺として御登城之節被仰入、營中ニて伊賀守殿へ御達被成候處、御内人
ニも是非今日ハ是より申入御逢可申と存居候由ニて、先日御内々御問合御座候御在所へ御暇之義、御手前様ニ去ル
丑年より暫御詰被成候事故、此上御引留難申と申合、其節及御答候通、御暇被仰出候答ニ相成居申候
處、兼々委細御承知之京都之模様、此御甚以六ッ个敷相成、備中守ニも大ニ心配仕居候義ニ有之候、

私ニ云、此京都之御模様と申合、亞墨利加通商之義ニ付、兼々京都より被仰進候品も有之候處、去冬ニ至、
不得已切迫之御譯柄有之、再應京都へ被仰進候ニ不及、江戸切之る假條約御取結ニ相成、委細之義、堀田備中
守様御上京御申上可被成と之御事ニて、早春右御用懸り御役人衆御召連、備中守様御上京被成候處、右之義、
兼々深く被惱、叡慮候御事ニ有之候處、右之通、何之御沙汰も無之、假條約御取結ニ相成候段、御内實甚、逆鱗
被爲有、猶又公卿方ニも種々御存意建白有之、備中守様御使ニて御申立之御趣意、曾る御採用無之、尤亞墨
利加人と應接候ニまらふる事情ハ、其々御用懸り御役人衆より直ニ申述候御積ニて御召連之處、御所ニ
之、右御役人衆へ、一圓御取合無之、毎事備中守様へ御掛合故、折々行當り候御答振も有之候哉、御所向
之御都合甚宜らば、詮る處个様之次第ニて、關東之御政務無御心許被思食と之御模様ニて、亞墨利加通商
之義、今一應御三家以下諸大名之赤心御尋御申上上
へしと、御沙汰有ふと聞へし、みれらの事あるへし、

其譯ハ、關白殿を始、傳奏議奏衆ふと、多分關東御同意平穩之方ニ有之候得共、外親王・公卿方ニハ過激之議論多く、
とらく戦争掃蕩可然と申事ニ有之候、備中守初様々苦辛致、漸々平穩之方へ赴き居申候中へ、水戸前中納言殿より
種々之義御申越候故、又々激論ニ立戻り、何分御一和ニ至り不申、且又備中守京着以來、禁裏附之者へ厚く申合、取扱
候次第有之、尤兩人之内、大久保大隅守義芳物毎發起々々と不致、都築駿河守事ハ至極宜、其々御存知之通之人物ニ

有之候間、駿河守ニのみ万事取扱はせ、去ル十五日頃ニ考、備中守參内、御返答も被仰出候様ニ、精々折取扱居申
候處、同十七日ニ至、駿河守卒中風ニ死去、其實ハ自殺致候哉と相聞、委細未と雖と相分り不申候得共、右ニて
萬端都合向しく、段々此元へ相申參候義も有之、先此度ハ、叡慮之通、諸大名之赤心相尋可申上と申處ニて、一ト先
歸府致候答ニ御座候、それとも急之事ニハ參問敷、五月頃ニも至可申哉、右之通、甚苦々敷次第ニ立至、何れも微力
ニて、一同當惑之義ニ御座候、何き備中守歸府之上ハ、萬端御手前様へ御相談致候答ニ、同列共申合居候義、其上此元
之處、此節亞墨利加人・阿蘭陀人とも出府致居、蘭人考アメリカ方同様之御取扱ニて、御目見被仰付度由相願候處、右
様子アメリカ人承り、蘭人願之通之御扱ニ相成候ハ、其以前ニ、今一應去冬御目見之節より、一段重き御扱ニて御
目見相願度、其子細ハ、此度之蘭人とも、官職雲泥之相違ニ御座候間、何分ニも右之通御願候と申、又蘭人ハアメリカ
同様之御扱ニ不被成下候ハ、一應引取、其段國王へ申開度と申候得共、アメリカ同様之御扱ニて不相成段、御答相成
候答、彼是不穩義計ニて、私共大ニ心配之事ニ御座候間、何き追々御相談申候个條出來可申と存候、然る處、掃部頭殿
ニハ、京都御警衛御大切之御義ニ付、是非御暇可被仰出候、外當年御詰之御同席方ニて、多分御年若之義ニ付、何角御
相談申候も、其品ニ寄急ニ御答無之、御手間取ニ相成候も、御用向指支可申哉と、何きも心配致、御手前様ニハ、御
年來之御勤之上、御同席御筆頭、御年輪と申、諸事御功者故、誠ニ苦勞千万之御義ニ御座候得共、當年も御在所へ之御
暇考不被仰出、此元ニ御詰越御座候様ニ有之度と申合、實考一昨日右之達ニ申上、思召奉候處、相詰居候方可然と之
上意ニて、既ニ近々御暇不被下候趣、御達申答ニ相成居申候、右模様替り申候處御話申候由、御申ニ付、公より、當御
時節柄、不肖之私左程迄ニ思召被下候段、身ニ取候る考難有仕合ニ御座候、乍去先年も永々此元ニ相詰、又近頃六六年
も相詰、在所表へハ暫參不申候處、今年考順年故、無相違御暇被下候義と、在所ニも一同相待罷在、段々無餘義用事
も重り居候處、此度御暇不被下候る考、家來共之中ニも、中より以上之者共ハ、無據事柄粗相辨可申哉ニ候得共、其以
下末々之者共ニ至候る考行届兼、まして町・郷之者ともハ、只々私義此元ニ相詰候義ハ好ミ、在所表を嫌ひ候様ニ相心
得可申、右等之義ニも甚心痛致候間、恐入候義ニ考候得共、御發表以前、只今之處ニて何と今一應御賢慮被下度、万
々事分候御内話ニ對し候る考、何とも申上兼候得共、心中御推察被下、格段之御取扱を以、御暇被仰出候様ニ考相
成申間敷哉と、折入被仰談候處、御尤千万之御義、段々御配意之趣考御察申候得共、御在所へ之御心配ハ、先御自分事
ニて、此度之義考、誠ニ極重き天下之御大事ニ係り候事ニ御座候間、折角之御談しニ考御座候得共、御迷惑ふら、此
上之取扱方も無之候間、惡らば御承知可被下と有之候ニ付、最早其上被仰談方も無之、御畏り之御受被仰達候由、此
私ニ云、此時京都之御模様苦々敷考實事之由ニ付、備中守様御歸府之上、勅諭之通再諸大名之赤心御尋ニ相
成候ハ、元來去冬急ニ假條約御取結之義ハ、實ニ御尤と奉存候考、十人ニ三人とも有之間敷様子ニ付、第一
尾張様・水戸前中納言様を初、別る國持、外様衆ふと、銘々十分之存念申立ら候ハ必立、さきハとて一應
假條約御取結候もの、今更御變改ニ相成候ハ、是非とも程なく戦争ニ及候ニ可立至、それも已を得らざら
る義ふら、第一公儀ニ於て、外國へ對せらば、信義を失ひ候事故、一旦戰之勝敗ハ兎も角も、始終可然御事ニ
無之、彼是月日を經候内ニ考、外様衆等之中、京都へ取組如何様之企可有之難計、旁、公邊ニてハ、御内外一

安政五年四月十五日

一三七

安政五年四月十五日

一三八

ト方ふらぬ御時節、其中にて万端御老中方より御相談と有之候る者、如何計之御配慮ニヤと、右之御様子承知之輩も深く恐入居たりし程、程なく井伊掃部頭様御大老被仰付、備中守様・伊賀守殿御退役有られハ、右伊賀守殿より御内話之御廉ハ、自然御取消之姿とありしあるへし、

水口藩主加藤明軌越中守 參勤ニ依リ、丸岡藩主有馬道純左兵衛佐 歸藩ニ依リ、各登營ス。

〔幕府沙汰書〕○東京帝國大學所藏本

四月十五日、

一今四打四寸五分廻り、御黒書院に

出御、水戸殿・尾張殿

御對顔、○中略、過る、御白書院に

渡御、四品以上例月次之通御礼相濟る、左之通御禮畢る、四品以下一同御礼被爲請之、

但、四品以下一同御礼被爲

請候段、於大廊下・帝鑑之間、紀伊守演達之、

○中略

參勤

加藤明軌ハ
參勤有馬道
純ハ歸藩ニ
ヨリ登營將
軍ニ謁ス

卷物 貳
銀馬代

銀二十枚
卷物 五

○中略

右畢る、入御、

○中略

一有馬左兵衛佐拜領物、於御白書院縁頰、老中列座、頂戴之畢る、宗門供連之儀、紀伊守申渡之、

〔溫恭院殿御實紀〕○續徳川實紀所載

十五日、御禮事件々、○中略

一月並之御禮、如例相濟、

卷物 二
銀馬代

銀二十枚
卷物 五

安政五年四月十五日

加藤越中守

御暇

有馬左兵衛督佐

參觀

加藤越中守

御暇

有馬左兵衛佐

一三九

安政五年四月十五日

一四〇

○中略、
右畢る、入御、

〔安政年録〕

○内閣記録
課所藏本

四月十五日、

一今已上剋、御白書院に 出御、

○中略、

卷物 二
銀馬 代

參勤

加藤越中守

御暇

有馬左兵衛佐

銀二十枚
卷物 五

○中略、

右、御禮畢る、入御、

勘定奉行永井尙志玄蕃頭・長崎奉行岡部長常駿河守等、眞福寺江戸芝ニ於テ蘭國

領事「クルチウス」Curtius ト會シ、條約改訂ニ關シ、協議ス。

〔眞福寺日蘭對話書〕

○伯爵堀田正恒所藏本
堀田正睦外國雜中書類所載

〔安政年録〕
四年四月廿七日、寫、

四月十五日、

眞福寺應接留

永井玄蕃頭
岡部長常

眞福寺應接留

領事官應接

此方

一兩人共條約談判之委任を不被 仰付候得共、〔四月十三日、老中松平忠國書〕先日伊賀守殿御宅を申立候趣、見込之處

巨細可承様被申付候間、無腹藏可被申聞候、長崎を取極候三割五分之運上を差止、品毎に就運上可差出と之取極を、何之規則に候哉、

領事官

一夫に付ると、二様之存付有之候、一品毎に付何程を運上取極候積、長崎を存込に御座候、此度江戸に參候上、思ひ替候儀有之候、此儀之後に可申上、尤條約取極之節に無之候ると、委細に申上兼候、

一先申上候、私考をると、條約之義一剋も早く御取始相成候方可然候間、此處篤と御勘

安政五年四月十五日

一四一

關稅改正ノ
コト

露國ハ下田
ニ領事ヲ置
カン

英國使節
「エルギン」
來ラン

安政五年四月十五日

一四二

考可被成候、其次第ハ、外國船追々渡來可致心當も有之候、魯西亞と、不遠下田にコン
シユル差越可申候、

一英吉利(Lord Algin)エルジンと申者、日本とある、高貴之大名位之身分之者に御座候處、日
本へ使節としく可罷越國命を請居申候、此者支那迄を最早出居候、(John Bowring)ジョン・ホーリン
ク一同に其命を請居候、志のし兩人一同に參候歟、別に參候歟と、睨と不辨候、佛蘭西
國使節も、(Baron Gros)バロン・ホローと申者、日本使節之命を請、支那迄を參居候、此儀評判記
に明のよ認有之候、然ル處、英吉利使節いまと渡來不致候と、誠に以不審之至に御坐
候、

一英吉利獻貢之ストーンヤーフト蒸氣船も、已に本國渡り出帆致居候、

一亞墨利加軍艦も、多く支那に參居候間、是又不遠下田へ可參と存候、英佛と、先を長崎
へ可參存候、併私考に、亞墨利加之別府コンシユル、和蘭之別府私兩人共江戸に出
居候を承候ハ、長崎より直に江戸へ罷越、諸事政府との御引合可致歟と存候、左候
ハ、亞人を勿論江戸に面會も仕、品々御面倒之儀出來可申と存候、右之通英吉利・
佛蘭西・亞墨利加、夫に魯西亞之如大國打寄候ハ、日本之御面倒、中々以不一通支
と存候、亞墨利加コンシユルに被遣候調印致せへしとの御書面を見候ハ、最早亞墨

諸外國集リ
來ラバ日本
ノ煩累タラ
ン

米國總領事
ノ談話

利加とて調印相濟候義と心得可申候、

一昨日コンシユル申聞候こと、岩瀬様之御嘶ある、備中守様御歸府之御模様も相心得、
御同人御歸相成候ハ、調印可致心得歟と被存候、

一長く支を被差置候ハ、其内こと如何様之義出來可致も難計、御國の爲甚不宜存候、

一私於て別段申上候と、條約早御取整可被成義と存候、

一私着府之後、コンシユルより、條約之大綱を嘶し承申候、右之條約相整候ハ、私も同
様相願候、其上よも支を加へ候儀ハ、私より相願候、

一是迄ハ先諸國之支を申上候、是よりハ和蘭國之儀十分可申上候、

一長崎おるに條約中、金銀出入之事決着不致候故、日本金銀勝手出入、外國にも同様
相成候様あるし度、右差免無之内に、勝手之貿易こと無之、少々ツ、品物計取換候迄
に御坐候、故に金銀輸出之儀先申上候、日本金銀外國金銀との引替之儀、政府に彼
是と御心配を無詮事御座候、政府に御取極を運上り付、外國金銀と日本金銀と
の引替割合を御定被成候迄に、其割合性合も、能分り候上ハ、性合之掛競へも有之
候得共、雙方之性合いまと睨と互に不分候内に、只量目耳之引替に御坐候、志のし此
割合を政府限り之定耳ある、商人を銘々之損益を謀り、政府之極を通りて致兼候、

金銀ノ交換

安政五年四月十五日

一四三

箱館長崎ノ
外國人交際
ヲ緩優ニサ
レタシ

各國ノタメ
出島ノ如キ
場所ヲ設ケ
ルハ困難ナ
ラン

開港ノコト

和蘭醫師モ
來ラン

安政五年四月十五日

一四四

一今一ヶ條ハ、箱館・長崎之交際、今一段緩優ニ被成度候、

一長崎ニある昨年取極候商法ハ宜敷、和蘭陀人之爲ニモ、先宜敷候得共、只狹小なる吏ニ御坐候、繁昌ニ成候ると、迺も右仕法ニあると、永續仕兼候、

一和蘭之荷物、水門ニあると改無之、表門を持出候節、改有之候、此定規ハ宜敷候得共、此後諸國參候節、出島之如き一構を、國毎に一々被遣候儀也、日本於ども行届申間敷、右故雙方之爲、和蘭陀ニあるも、長崎ニ勝手ニ住居致度候、

一外國人ニ、湊抜開と申候得と、住居も勝手ニ成候吏と存候、勿論日本人と少しも變り候事無之、商人ニ住居を借、又と土藏を借、又と買取、地所も相對ニある買取、又借請候事、都る日本人之通ニ候、又日本人と家居を建並へ、見世賣買も致、尤役人之立入をく、相對引合ニ御坐候、諸職人鍛冶や織物師造船大工勝手ニ引越、夫々之制作所をも取建、日本人をも雇ひ、又日本人ニ和蘭人被雇候義も有之候ハ、自然と諸職業之傳習も、相對ニある出來、又日本之手業等、外國人傳習請度存候ハ、是又自由ニ出來、諸職業之互ニ相開候と、雙方之益ニ御座候、

一醫師も固より參候故、藥園を借地又と買請、諸藥草植付候ハ、日本之益ニも可相成候、勿論地子銀等と、日本人通り差出申候、

開港自由ノ
港

蒸氣器械ノ
据附

鐵山ノ發見

兵庫下關ノ
開港

此方

領

一出島之限りを相止め、市中へ勝手ニ住居致、又と出島之圍ひ抜改め、市中同様之木戸門立置候るも宜敷候、

一右様不相成候ると、開港自由之港とて不申候、

一右様之改革を私相願候、

一長崎飽之浦ニ蒸氣仕掛、此節取建居候、いまと取建傳習中故、日々出島より通ひ候るも宜敷候得共、取建出來之上、其業を始候節ニ至候ると、蒸氣と幾晝夜も焚詰候故、通ひニあると不相成、是非共同所ニ住居不致候ると不相叶、無左候ると、日本ニあるも蒸氣器械御取建之利益無之候、

一茂木村ニ鐵山見出し申候、是も愈盛ニ出候様相成候ハ、穴堀并溶鉄之職人其場所住居致不申候ると、開け不申、是迄之姿ニあると、日本ニあるも、御利益不相開、只御取建等諸入費の、候耳故、甚御不便利と存候、右故今般之處ニ、御改革相成候様祈候、外國ニも、同様ニ候得共、私と、和蘭國之吏耳を申上候、

一兵庫・下ノ關開港ニ相成候ハ、矢張同様之姿ニ致候見込ニ候哉、

安政五年四月十五日

一四五

安政五年四月十五日

一四六

此方

一左様之御坐候、尤場所之、里數之限之可有之候、

領

此方

一溶鉄蒸氣器械等御取建之、至極宜敷候得共、只今之仕法之有之、只取建と申迄之、其利益を十分之起候、不相成候故、只取建之入用耳之、利益無之、是を不便と申候、

領

一長崎之言葉と、邊鄙之あまり有之、不正候間、都下之正敷日本語を習候爲之御坐候、追ると和蘭之日本學校を江戸之取建、日本之師匠を招待致、日本之有之、和蘭學校を御取建、和蘭師匠を御招待、互之國語を稽古爲致候ハ、至極之御坐候、

此方

一長崎・箱館も、今一等之緩優と申候之、前之被申候次第之事之候哉、

和蘭學校

日本語之稽古

領

一左様之御坐候、

一和蘭之有之、漸々之多く港を御開可有之様、政府之願之有、其義之、私命を蒙居候、去のし港之場所被撰候事之、私之任せ有之候間、雙方之益を考へ、下ノ關・兵庫と申上候、港を御開之有、狭小之港之、農家漁戶等耳之有、益も無之候故、日本於之、御開被成候詮無之、去と之江戸・大坂・堺等之、只今御開と申上候之、御六ツヶ敷と存候故、中道を考へ、下ノ關・兵庫と指申候、下ノ關ハ、御開相成候ハ、漸々大之富有之港と可相成候、同所之、日本之廻船輻輳之、南手より來候船之、皆爰之可申、兵庫之、北手之參候船ハ、皆爰之可申候、

一下ノ關より兵庫之至候迄之、瀬戸内之、外國何之之所之有、此位之屈強良善之場所之無之候、右瀬戸内を軍艦諸船之圍場と被成、下ノ關并淡路之左右、四國之九州之鼻、此四ヶ所之炮臺を築、防圍候ハ、外國より決して侵奪いし候儀ハ出來申間敷、夫故同所へ軍艦を備へ置、日本之事有時ハ、其場所より操出候様相成候ハ、外國も日本國海軍備之整居候、侮蔑致候儀ハ有之間敷、殊之傳習も瀬戸内之御移相成候ハ、至極之修業可相成、差すれハ、下ノ關・兵庫之移居候所之蘭人又之外國人之、同

瀬戸内海之軍艦諸船ノ圍場トスベシ

安政五年四月十五日

一四七

安政五年四月十五日

一四八

様諸職業場を取建、瀬戸内なる、十分之傳習出來可申候、

此時日本圖を指點し、軍艦を備置可申儀話有之、略之、

一下ノ關・兵庫御開相成候ハ、十分ニ御坐候、是ハ和蘭一己之義なる、外國なるも、十分と可存歟ハ難計候、

此方

條約ノ方法

一事を漸々致しと被申候也、最初より十分之約條を取極置、其内ニ年限を逐々取廣げ候定を立置候歟、又取廣げ候度毎、新たの條約を被結候也候哉、

領

一取廣げ候度毎、新條約を爲取替候見込ニ御坐候、最初より十分之處を定置、年限を逐々之定免をふし置候也、日本之都合も宜ケル間敷と存候間、夫是を考へ、追々手廣之條約取結相成候方折合方可然候、

一此處なる、長崎・箱館之外、兵庫・下ノ關を開、追々大坂・堺・江戸も御開可相成哉、

一追々申上候儀也、餘國之支と脇ニ致、只管和蘭政府之存念を申上候義ニ御坐候、

一三割五分之税を改候仕方、江戸へ參、思替候と最前申上置候、先日亞人との御取極相

後ニ大坂堺
江戸ヲ開ケ
ベシ

關稅改正

成候稅則之趣も、略同人より承申候處、至極宜敷御坐候間、右同様之仕方ニ致度、租稅之義也、諸國一樣ニ不相成候也、混雜も相生可申、品々之種類ニ寄、稅之厚薄有之、又必用不可缺之品也、無稅ニ致候得也、輸入も多有之候、

此處なる、船具・藥品其外品々之種類ニ付、稅之厚薄取定可申段、巨細申聞候得共、同様之趣意故略之、

一長崎條約中、米・掉銅・武器其外輸出不相成定免有之、是也其國之都合ニ寄取定候事故、宜敷候得共、賣買之間ニ役人立入居候定免ハ、外國普通之定と違ひ居、商賣狭く相成不宜敷候、

一備中守様御歸之上、亞人ニ之御答也、私考候也、次ニ申上候三通之外と無之と存候、一第一ニ是也、此度取極置候通なる、調印可致と之御答相成候得也、至極宜敷、私於くも、亞人之條約通ニ候得也、聊異存無之候間、其通り之條約ニ取結度候、

一第二ニ是也、何也此取極也、改免不申候得共、京都其外之云々も有之、只今ニ調印難相成と可被仰候、

一第三ニハ、此取極通りなる也、調判難相成候間、少々ツ、取縮免候上、調印可致と可被仰候、一向ニ出來ぬと也、決し被仰間敷と存候、

安政五年四月十五日

一四九

役人が賣買
ヲ監視スル
制度ハ不可

堀田閣老歸
府後米人ニ
交渉スベキ
要件

安政五年四月十五日

一五〇

米人トノ談
判調ハザル
トキハ和蘭
ト條約ヲ締
結スベシ

- 一 第三之御答有之節を、コンシユル何と御答可申敷、其答を伺度候、
- 一 若コンシユル左様を取縮候支不相成と申上、備中守様こそ、是非取縮可申と、互に御押合相成候へ、甚混雜御危難も生可申候、
- 一 右様之節を、此度之條約之爲に、日本之内亂をも生候次第候へ、コンシユル夫を是非調印可致と申張兼、亞國政府之存意に任候外無之候、
- 一 其節を、私考候と、和蘭と條約御取結、其條約を以て、諸國へ、政府より、御書翰被遣可然候、其書翰之趣意を、此度亞墨利加と談判濟相成候別紙之通之條約を、諸國同様何ぞ取極候義を候得共、此節を差支有之、調印難相成候間、別紙和蘭と取極候條約之通、此節諸國と取定度と之支候、此御書翰に、亞國・蘭國之條約を御添、亞墨利加へ勿論、英吉利・魯西亞・佛蘭西・和蘭夫々之政府へ、船便又各國之者渡來致候節、御遣し被成候へ、御危難有之間敷候、
- 一 前々段々申上候處を、全く和蘭政府一己之趣意候間、外國於て、今少々手廣之義を御定不相成候へ、承服仕間敷候、
- 一 歐羅巴州を、亞細亞州中於て、日本を第一と仰き、歐羅巴朋友親睦之國と致度、一統心掛居候、元より戦争引起候儀を、決して彼より求め不申候、

踏繪ノ廢止
ヲ歎テ

耶蘇教ノ禁
止

一 踏繪御差止へ、外國於ても、格別歡候支候御坐候、其故は、諸國信仰之尊像を足下へ掛候ると、讐敵共可存、右を御差止る、日本國之和親朋友と可相成を信じ、歡ひ候支候御坐候、

一 キリス之教、日本を、嚴禁之段を、諸國も兼々承知致居候故、日本人に勸免候様之事を、政府於てハ決して不致候故、右書籍等持渡、日本人に相與、日本人に勸申間敷之條約を、諸國を、承允致可申間、此禁ハ如何にも嚴敷御建置可被成候、其の外國人移居致居候得と、其國人之爲に、夫々拜禮堂も相立、銘々其國之宗門を修候支故、自然日本人にも、私に授受致候様之義も可有之、其節を定め日本を、僅にもキリス宗を修候日本人を、重罪に可被行と存候、左候得と、是も矢張終て踏繪之如く、外國之不快を引出し候様可相成存候間、其禁を日本限如何様共嚴敷相立置のれ、和蘭條約に、左之通に御書載相成候方、日本後年之御爲可然と存候、

申候支、

一 書簡之文体、以前和蘭人も、全商人之事故、長崎之御振合候得共、以後役人夫々同等之文通に可被成、此度私より申上候文通、伊賀守様方御答有之、以前之御振合相

彼我往復書
翰ノ文體

安政五年四月十五日

一五一

安政五年四月十五日

改至極と御坐候、

一江戸へ役人を置と、伊賀守様へ申上候と、則ちミニストル之事と御座候、

一此度コンシユル之條約、日本之爭亂共相成候ると、以之外之義候得共、若夫程之儀ニ無之候ハ、大君と宰相と之權を以、御決斷御取極、御調印と相成候ハ、政府之御威權も相立、其御威權自然外國こるも承及び仰き可申候、

此方

一キリスと、日本之嚴禁あれとも、日本人をし是を修候者有之とも、死刑重罪と不被行と、條約書と認置候節と、一向嚴禁の嚴禁と不相立、不都合之事と候、

一左様と無之、嚴禁と相成居候得と、元よりキリス之禮拜堂へも不入、又其書籍も所持不致、其像を拜し候支等決しく無之候得と、禁ハ相立可申候、

右様とあると、禁も有名無實之者と相成、法令不相立段、再三詰問致候處、無憚處信仰致候者ハ、相知可申候得共、心中こる念候耳とあると、其證蹟も無之、又と譬ひ其禁被犯し候共、其場を遁れ延候得と、西洋こると其罪を赦し候と、彼是申出候得共、つまじ遁辭と相聞へ申候、

一日本こる出生致候外國人之子連歸之義も、一通り申聞候、

江戸ニ公使ヲ置クコト

大君ト宰相ノ權ヲ以テ條約ヲ決定スベシ

四月

〔眞福寺詰蘭國領事參府掛日記〕
四月十五日、曇、四時頃方雨、
○帝國圖書館所藏本

(島津家本安政雜集)

笹岡	小平	太
古谷	鏑	助
向方		
秋山	徳右衛門	
神田	吉十郎	

一例刻交代、名前夫々達、

一小遣茂七出、

一昼九時過、永井玄蕃頭殿・岡部駿河守殿、爲應接御出有之、暮六時頃御退出之事、

一由比万太郎見廻有之候事、

一御普請役淺野儀三郎外御用申渡、代り杉浦武三郎に申渡候旨、御勘定方々達來、

一夜五時門へ付、見張所へ切、

一御門切手八枚、御小人目付堀江六五郎に及返却、

安政五年四月十五日

永井尙志岡部長常眞福寺ニ至ル

安政五年四月十五日

一五四

〔長崎奉行掛合書〕

○長崎縣廳所藏本
和蘭領事官參府御用留所取

○四月十九日蘭國領事參府掛へ

〔朱書〕
四月十九日、懸りに相談廻し、

亞國此度談判之條約、蘭人一覽爲致候儀、井上信濃守より官吏に及談候處、調印之所、亞國之方先ニ相成候御決着ニ候ハ、差支無之、且調判以前、万國に通一候様之儀も有之候る者、不都合ニ付、其段御談有之候ハ、一覽不苦旨、申出候由ニ付、右條約蘭文寫、明廿日、駿河守持參致一、一應前文之處申談置、一覽爲致可申と存候、依之及御相談候、以上、

午 四月十九日

〔眞福寺詰蘭國領事參府掛日記〕

○帝國圖書
館所藏本

四月廿日、晴、四時曇、八時頃雨、

笹岡	小平	太
古	谷	鏑
助		
向	方	
秋山	德右衛門	
神田	吉十郎	

岡部長常應
接ノタメ來

齊正新造船
晨風丸ヲ檢
シ神島ニ至
リ砲術ヲ覽

一例刻交代、夫々に名前達、

一小遣茂七出る、

一昼四時頃、清朝人^{アチウシ}貳人當所に相越、同九半時頃、立歸候事、

但、同所詰々、中田海助・嶋田林三郎附添、

一夕八時頃、岡部駿河守殿、爲應接御出有之、同八半時過、御退散之事、

一松浦安右衛門、爲見廻相越候事、

一夜五時門^ベニ付、見張所^ベ切、

一門出切手五枚、御小人目付天笠鉢太郎に廻ス、

佐賀藩主鍋島齊正^{肥前}長崎ニ赴キ^{十一}是日、新造船晨風丸ヲ檢シ、マタ

神島砲臺警守藩士ノ砲術及飽浦工作場ヲ覽ル。二十日、
歸城ス。

〔中牟田日記〕

○佐賀藩海
軍史所取

四月十五日、此度御製造の晨風丸出來上り候に付、今日御船下し相成、

〔鍋島齊正〕
上様にも心懸り

にて被遊御覽、首尾能相濟候て、直様飛雲丸御乗込、〔神島中主〕兩島其外詰人砲術爲御覽、神ノ島御

出、尤風順宜敷有之候故、帆前斗にて、砲術被遊御覽候上にて、紅梅丸より引舟にて御歸

り相成候に付、飛雲丸も御跡より引舟にて歸船、一統引拂、

安政五年四月十五日

一五五

四月晦日、晨風丸御船下し、并柱立方、首尾能相濟候譯を以、御酒致頂戴、難有仕合候事、

〔鍋島直正年譜〕○佐賀藩海軍史所載

鮑浦工作場
ヲ覽ル

四月十一日、長崎御越、同二十日、御歸城、但、此節は、於大波止、晨風丸船卸御覽、但、諸術傳習に付滞在の蘭人被相、習に付滞在其末、神島御出、御備石火矢玉込放出御覽、扱又鮑浦工作場御覽之末、於鵬ヶ崎御屋敷、蘭人被召寄、

〔鍋島直正譜略〕○内閣文庫 課所蔵本

蘭人ヲ召ス

一 四月、長崎御越之節、於大波止、晨風丸船卸御覽、但、諸術傳習に付滞在之蘭人被相、御製其末、神島御出、御備石火矢玉込放出御覽、扱又鮑浦工作場御覽之末、於鵬ヶ崎御屋敷、蘭人被召寄、

○附 録

〔鍋島直正公傳〕

四月六日、

伊・神兩砲臺初度の訓練をなす、長崎奉行目附以下の幕僚の歸東に方り、從來提供し來りし小倉・下關間の渡海船、大阪・室津間の乗船を當分用捨せらる、

〔鍋島直正年譜〕○佐賀藩海軍史所載

銃陣稽古改
正ノ件

四月八日、御火術方より、左之通相伺候處、其通被仰付、

銃陣稽古の儀、潤色を以、左の通相改候方には有御座間敷哉、

一、教師は免許より、指揮方は二段御相傳より、相整候様被相定候處、當時出精の内、銃陣之業前習熟之人も有之候に付ては、爲御勸以來右様の向、初段御相傳相濟候へば、指揮方教師をも、業前習熟次第にて、被差免方には有御座間敷哉、尤其通相成候得ば、二段免許の差別無之様相成候付、右は役々立會、業前相試其段頭人承届之上、被差免、鑑札相渡候方には有御座間敷哉、

一、御親類、同格御家老、偕又大組頭の義は、一般同様には參兼、持前立場之業前に付るは、御相傳に不限、右業前習練次第、見計を以指揮方教師をも、被差免方には有御座間敷哉、
一、着座手明鐘頭、扱又小組頭之義も、右に准し御相傳不限、指揮方之義は、被差免方には有御座間敷哉、
右旁奉伺候、

〔中牟田日記〕○佐賀藩海軍史所載

四月十四日、上様九ツ過比、飛雲丸御乗込、兩御番所御巡見相濟、七ツ比、御歸り相成候事、但、御往來共、引舟にて、尤御歸りの節、引舟中にて帆前も有之候事、飛雲丸迄御往來は端舟にて、御歸りの上、一統へ、初て御乗込の譯を以、御酒爲下、傳習方一統へ、御肴一折爲頂戴候、

箱館奉行村垣範正淡路守

箱館ヲ發シ、蝦夷地海岸巡檢ノ途ニ上ル。東蝦夷地・國

後・擇捉・北蝦夷地・西蝦夷地ノ廻浦巡檢ヲ了リ、八月二十三日箱館ニ歸ル。

〔箱館奉行支配廻狀〕○北海道廳所蔵本 白主御用所留記所載

○正月二十九日東西北蝦夷地詰同奉行支配向へ

箱館奉行廻
浦ノ節提出
スベキ廉書
ノ件

安政五年四月十五日

〔朱書〕
午三月廿七日、來、本書返却、

以廻狀致啓上候、然之、淡路守殿、東西北蝦夷地并クナシリ、エトロフ島共、無程御廻浦之
付、此度之儀之、御持場限巨細之御取調被成度旨之付、荒増廉書取調、別紙案文御廻し申
候、委細右之御承知、半紙帳面に御仕立、御廻浦之節、御差出可有之候、尤數个條之義之
付、差懸御談申上候之、彼是御混雜之可及哉之付、兼御心得迄之申進置候、且御出立
之義ハ、いま之御治定無之、いつ^{（分内保徳、箱館奉行）}下野守殿御到着、御用向御引繼濟、夫々御發途之積、日
限取極候ハ、猶可申上義之有之候、先爲御手繰、別紙相添得貴意置候、御銘々御承知御小
印之上、早々御順達可被成候、右之段可得御意如斯御座候、以上、

正月廿九日

木村勝右衛門印
長谷川就作印

佐藤桃太郎様
山本源一郎様
長谷川儀三郎様
荒井金助様
土肥四十郎様

持場限切繪
圖

猶以、御持場限切繪圖之儀之、いつ^{（分内保徳、箱館奉行）}も、巨細之御取調可有之候、右圖面を以御見分可
有之積、就之、里數并小名等、廉落無之様御仕立、御差出可被成候、彼是御手數之義之
御座候、且廻狀之義ハ、留之御方々御返却可有之候、以上、

○別紙

覺

一御持場内場所限切繪圖面

但、新道切開キ、里數共御認メ込之事、
美濃紙ニ之、

貳枚

何場所
箱館方
陸 何里
海上何里
請負人名前
支配人名前

一御備金
一御備米
一運上金

安政五年四月十五日

一五九

一五八

安政五年四月十五日

一六〇

一別上納金

一漁業高

一產物之類

一運上家

但、梁間、番家・通行家共、

一掛所

但、寺名、

一蝦夷人

但、何人歸俗之者、名前、

一出稼在住人家入別書共、

但、御用地以來新規建員數、

一潤掛之深淺

一野掛り

一船數并蝦夷船共員數

一藥草・藥木之有無、

何个所
同斷、
何个所

男何人、
女何人、

但、何石積位方、凡何艘程、
但、何石積位迄、海岸方凡何丁程隔、

一牧場有無、

但、馬員數、

一諸木生立之事

一田畑開發場所地名間數之事

一御持場境迄之山道、共、里數地名小名共、

一渡海場海上里數

右之通、半紙堅帳ニ御認メ可有之候、尤此外廉立候義も御座候ハ、御取調之上、御認メ有之候様致度存候、以上、

午正月

〔西蝦夷地 箱館奉行支配調役下役山口顯之進書翰〕○北海道廳所藏本
紋別御用所留記所載

○三月十七日同地モンベツ詰并エサシ詰同心足輕宛
以書狀申進候、然し、

一淡路守殿東地より北海岸御廻浦之砌、シヤリ迄御出迎として、拙者可罷出旨、箱館出立
前被仰渡有之付、爲心得相達申候、且老年又と究民奇特人其外取調置、御廻浦先に可
差出旨、是又御談之付、其場所々々おゐても、取調被置候様存候、

安政五年四月十五日

一六一

箱館奉行村
垣範正廻浦
ノ件

安政五年四月十五日

一六二

一 エサシカシヤリ境迄、岡道刈拂、并御晝小休所等、風雨凌方相成候様取建方之儀、去九月中、梨本彌五郎外壹人より相達候通り、夫々手配可有之、尤岡道刈拂之儀と、御先觸到來之上、可然哉、是等と見計ひ都合次第被取計候様存候、

一 五左衛門殿カモエノミウシヒラも、シヤリ迄御出迎として可罷出旨、御談ウツカ付、相達申候、持場内手配ユし置、御先觸到來之上、出張可有之候、殊ワ寄、ツ邊迄罷出候も可然哉と存候、

右相達申候、以上、

三月十七日

山口顯之進(兼印)

細野五左衛門殿

小谷野邦之助殿

牧野兵五郎殿

逸見小十郎殿

追る、爲御出迎、其筋通行之砌、道筋其外見置なから罷越候間、先觸着之上、心得候番人之内壹人、領境迄罷出居候様被達度存候、以上、

〔箱館奉行支配調役並水野正太夫書翰〕○白主御用所留記所載

○四月二十三日同役須藤甚之助宛

〔朱書〕
〔午六月廿二日、クシユンコマン到來、七月朔日、白主に來ル、

水野正太夫、須藤甚之助之内狀寫、

以內狀啓上仕候、暖相成候處、益壯健奉恐賀候、扱亦淡路守殿御道中無滯、昨廿二日、ホロへッ御泊り、今朝同所方御出立相成申候、尤ユウフツカ、石狩ハッサフ在住場處に御越相成申候、何と委細之義ハ、石場齋宮方可申上候、且亦御取扱向其外及見候丈、左に申上候、

一 御泊所前に、張番所出來之事、

一 御道中、御雇足輕兩人宛、六尺棒ヲ持、御先拂ハあし候事、

一 同心・足輕之内、壹人宛御先立之事、

一 其場所ニ、下役御道案内相勤候事、

一 調役ト、御跡ヨ御附添之事、

一 着服ト、御途中ハ一同股引半點、御泊所ニ御逢之節ハ小袴、詰所ニ御逢も、昨年之通

麻上下之事、

一 貴所様ニハ、ニイカツフニ、御出迎之方可然候、

安政五年四月十五日

一六三

箱館奉行廻
浦ニ就キ取
扱向ノ件

安政五年四月十五日

一六四

一下役・同心等と、一泊或は貳泊位、場所々々遠近、詰合之多少を寄、見計罷出候方可然哉
与存候事、

一先達る御手附衆々達有之候書類ハ、場所限り、合帳ある下役名前を取調、場所々々差出
候事、

繪圖面等と、明細之方可然候事、

一支配人ハ、麻上下とある、會所前々御泊御用相勤候事、

右荒増申上候、委細ハ、石場殿に御逢之節、御尋可被成候、此段申上候、途中亂筆御用捨可
被下候、早々頓首、

四月廿二日認メ、
(三九)

〔村垣範正公務日記〕
○村垣範正
通所蔵本

四月八日、曇小雨、

一御役所に不出、

廻浦手當ヲ
受ク

一回浦御手當、百七十五兩受取、四月々九月迄、三百五十兩月割之、

略、
○中

四月十三日、晴、

一例刻早メ、御役所に相越ス、
○中

一大小一腰脇差一、野州へ預ケル、
(竹内深徳、箱館奉行)

略、
○中

一今日先觸出ス、

四月十四日、晴、

一例刻御役所に相越、七時過歸ル、

一暇乞を付、組頭始下役迄、夫々月次之通罷出ル、

一野州々、吸物酒をる送別有之、

略、
○中

一今朝、南部上山半右衛門暇乞面會、

略、
○中

四月十五日、快晴、美日、

一今朝四時前、箱館出立、清水や小休、七重久兵衛方中食、久根川小休、八時過、大野村に

着泊り、五里、

一組頭其外、月番一人充、旅宿をる見立、都る手續、一昨年之通、七重迄駕、同所々歩行致

安政五年四月十五日

一六五

箱館ヲ發シ
大野ニ至ル

安政五年四月十五日

一六六

ス、

一七重方中嶋辰三郎案内致ス、着後大野・市之渡苗代見分致ス、出来大こよ、
一野州方使者應輔、七重休所迄來ル、其外斐三郎等^(武田)同所迄來ルものも有之、
四月十六日、曇天、

一今朝五時、大野村出立、

峠下村名主宅、

小休

峠

小休

宿野邊次六、

晝休

追分

小休

八半時鷺木に着、會所泊、九里、

一今朝出立前、大野村百姓與吉・萬次郎、市渡年寄兼松・七郎兵衛・百姓久次、本郷銀次・藤
兵衛、何事も農業出精こ付、呼出―褒置事、

一市ノ渡兼松、苗代一見致ス、

一中嶋辰三郎、峠下村迄相越立辰ル、

四月十七日、夜來五時迄雨、後晴、

鷺ノ木ニ至
ル

山越内ニ至
ル

ホンカヤア

ヲサルヘツ

小休

落部

晝休

野田追

小休

八時前、ヤムクシナイに着、會所修復こ付、假會所旅籠屋新キ出来之家に泊ル、五里十

丁、

一落部晝休に、齋宮^(石橋)・吉岡新太郎・同心鈴木一郎出迎、夫々面會、

一ヤムクシナイ、石のふ油場所一見、

一在住淺山八郎兵衛拜借地一見、宅行、普請未出来、切組有之、太八郎宅ハ、ユウラツフに

取建候積り之由、

一旅宿へ着後、齋宮面會、御用談、

一下役・同心・在住麻上下こゑ、着悦ニ出ル、

一高橋^(ヤ)之助四才之弟よく育^(ヤ)、あるよ、靱負方不和、別住居之儀、齋宮申聞ル、

四月十八日、夜來五時迄小雨、曇、暮過少雷雨、

一今朝五時、ヤムクシナイ出立、一リ、

安政五年四月十五日

一六七

安政五年四月十五日

一六八

長萬部ニ至

トコタン 小休 一り
 ユウラツフ 同 一り
 フイタウシナイ 同 一りヨ
 シラリカ 晝休 一り
 ホロナイ 小休 一り
 クンヌイ 同 一り半
 モンヘツ 同 一り
 フシヤマンへ會所は、七時前着泊、九時半、
 一長谷川儀三郎・同禮太郎當所へ相越ス、岡田錠次郎クンヌイ迄出迎、藤田昌三郎出迎、何
 處も面會、
 一今朝、ヤムクシナイ役士人三人に、酒遣ス、
 一イシカリ場所之義を付、齋宮・儀三郎見込申聞ル、
 一ユウラツフ川向こ、淺山八郎兵衛開墾場有之、
 一モンヘツユライ村、慶作畑地新開一見、農夫小屋手廣を出來、右こゝる小休、
 一當所詰同心前田幼吉面會、

禮文花ニ至

一儀三郎、並被 仰付候御禮申聞ル、
 四月十九日、折々小雨、曇天、
 一今朝五半時、フシヤマンへ出立、一り半、
 アフタ境 小休 一り半
 子ツヌシヤ 晝休 一り半
 シツカリ 小休 一り
 ラエバ 同 一り
 ホロナイ峠 同 一り
 トレフナイ 同 一り
 レフンケは七時着泊、
 終日小雨、折々山越へ迂り、大難澁之、
 一儀三郎・錠次郎・禮太郎等、今朝暇乞にて返る、ヨイチ漁業仕法書、イシカ調之分儀三郎
 へ渡し、い才談一置、
 一極老・孤獨等之士人に遣し物、御入用を組、青銅三百文之積り評議廻し濟、齋宮に渡ス、
 一今朝、役士人・孝心もの三人に新錢三百文充遣ス、御入用之、
 一シツカリ御手作一見、農夫小家一軒有之、

極老孤獨ノ
士人ニ金ヲ
與フ

安政五年四月十五日

一六九

安政五年四月十五日

一七〇

一齋宮面會、新太郎暇乞、品々申含遣ス、

四月廿日、朝曇、四時頃々快晴、

一今朝五時過禮文花出立、一リヨ、

山を越し、

ヲフケシ 小休 一り

又山を登り、少し下りて、

フレヘシ峠 小休 一り

山を下り、濱邊に出、渡舟有り、砂濱少し行て、

ベンベ 晝休 二十七丁

番屋家内持番人居ル、直に山をのぼる、峠に至、富川牧、三杭有り、

ボロナイ峠 小休 二十一町

下り坂計、

八時過フレナイに着、會所泊、四時半、

一着後直に當所より山をこ入、又下りて蛇田(柳瀬湖)トウ有り、長七里ヨ巾三里、中嶋有、小嶋有、

向(後方半路峠)ニシリへ、間近後ニウス山有り、湖水清水にて冬中氷を不見といふ、不思議ともい

「フレナイ」ニ至ル
蛇田洞爺湖

ふへし、七半時歸ル、

一モロラン 詰下役石井專藏此程着、同松村静之助・御雇醫師鈴木薄甫來ル、面會、

一場所詰前田昌三郎悴見習文太郎并同心落合晴太郎、着悦に出ル、面會、

四月廿一日、曇、

一今朝五時フレナイ出立、一リ、

ウス會所 小休 一り三丁

善光寺に立寄一見、住持休所に來ル、此間少し山、大體平地、

ワツカライ 同 一り五丁

平地、

ヲサルへツ 晝休 一りヨ

川の少し手前ニ、植材伐出し之小道有り、

ヲサルへツ 渡船、

平地多し、道よし、

エマレマレフ 小休 一り一丁

夷家少し有り、

安政五年四月十五日

一七一

有珠善光寺

安政五年四月十五日

ヲコンホシへ

小休 一り餘

半道ヨ行て、本道と在住屋敷地と之追分、左コ入新道少し行て、ウス・モロラン境、少一行て在住屋敷有り、一見、一山越一て、

モロラン會所に八半時着泊、七里半、

一今朝フレナイコゑ役土人に清酒、孝行もの并極老土人に三百文充遣ス、

一ウスコゑも同斷遣ス、

一モロラン着後、齋宮并下役・同心・御雇醫師、着悦コ出ル、

一在住一同、追々壹人充面會、夫々得手勝手ノミ申出ス事之、

一齋宮惣領・次男コ面會、美の紙五帖・扇子出ス、

一齋宮に喜せる・多葉粉入・武鑑遣ス、下役に武ウん計遣ス、外同斷コ遣ス事之、

一仙臺家來一條彌三郎シライカ來ル、面會、陣屋見分不致旨申遣ス、

一當所詰南部家來來ル、陣屋ハ去春見置候間、此度ハ不相越旨申遣ス、

四月廿二日、快晴、

一今朝五半時過モロラン出立、廿丁、

ヘケレウタ

小休 廿五丁

フヌシ

同 一りヨ

チリヘツ

晝休 一りヨ

トンケシ

小休 一りヨ

曉別ニ至ル

八時過ホロヘツ着泊、五里半、

一今朝出立前、昨日殘之在住并新家再度來ル、面會、

一土人・極老等へ新錢三百文、役土人に酒五合、今朝遣ス、

一ホロヘツ在住酒井和三郎・岩井帶刀・會田源兵衛來ル、面會、

一水野正太夫コ行逢、當所泊コ付、面會致ス、

一同心本城平三郎・會田源兵衛絹一反初ゑ織立候とて出ス、百疋充遣ス、絹ハ箱館に廻ス、

一正太夫に託一、野州に内狀壹封、當所之絹一反添遣ス、宅狀も壹封出ス、何きも今曉認

メ、翌朝渡ス、

一當所役土人に清酒、例之通、極老・孤獨人に新錢遣ス、

一會田源兵衛ヲシヤルヘツ御用材伐出一出役之儀、齋宮見込之通コゑ可然旨申談、其段野

州へも申遣ス、

四月廿三日、快晴、

安政五年四月十五日

安政五年四月十五日

一七四

一今朝六半時ホロヘツ出立、一り半ヨ、

ランホケ

小休 二十八丁ヨ

少一 行て、温泉道之追分有、其道コ入、又少行て尙新道之追分コ入、

カムイワツカ

小休 一り七丁

小山ニ有る清泉湧出ル所ニ、夫方山ヲ一ツ越一、谷ニ下リ、川ニ添行、七重坂・時雨石
杯名付て有リ、

ノホリヘツ温泉場ニ至、

登別温泉

忍びそや半兵衛取建之小屋一軒出来、尙又普請中、湯は不ハ川中ニ、至る所つく、三
町行て小湯といふ湧出ル所三四ヶ所アリ、極熱湯流る、其脇ニ清泉も出ル、目ニ宜
水も出ル、いつ之時於燒拔一跡之景色ニ、又二丁山越一て大湯といふ、池のと一、湧
出ル景色恐るへき所りさ満ニ、かく廣大之温泉ハ他ニ類あり、又戻りて、

カムイワツカニ休、一りヨ、

是方シラヲイ道ニかゝリ、本道ニ出、

アイロ

晝休 二りヨ

シキウ

小休 一り

トンケシ

同 一り

七半時シラヲイに着泊、

白老ニ至ル

一當所詰下役大林彌一郎・鈴木歳郎・同心等、着歡ニ出ル、

一仙臺陣屋方使者一條彌三郎來ル、直答、

一同藩備頭三好武三郎來ル、面會致ス、

一武三郎方押掛一、彌三郎方袴地一到来、

一十六日出箱館御用狀到来、

○中略、

一宅狀ニ無之、家來之品栗來ル、山本新十郎方砂糖一箱、年始狀返事端書有之、

四月廿四日、晝前雨、後晴、

一今朝五時シラヲイ出立、一り九丁、

シヤタイ

小休 一り半

タルマイ

同 廿七丁

ニシタフ

同 一り

コエトエ

晝休 一り半

安政五年四月十五日

一七五

安政五年四月十五日

一七六

トマコマイ

小休 一り

マゴマイ

同 一り

サツタフ

野立 一り

七時ユウフツに着泊、九時半、

一 今朝仙臺家來三人來ル、面會、

一 荒井金助・飯田豊之助トマコマイ休所迄出迎、サル笠原源吾ユウフツ迄同斷、

一 齋宮・金助・豊之助等面會、當所詰夫々上下こゝる出ル、

一 タルマイ邊方當所迄、昨今鱒漁初ル、相應之よ、

一 シラライこゝる役士人并極老ふ遣一物例之通、別記ス、以來同斷、

四月廿五日、朝小雨、後晴、

六十四度、五月節
ニ入

一 調物有之付、ユウフツ逗留、

一 齋宮・金助・豊之助等面會、品々御用談、

一金助ヘイシカリ改革筋之儀得と申談、

一 箱館に御用狀差立候、

○ 野州へ表狀貳通、

勇拂ニ至ル

日割通ユウフツ迄來候趣、

今日迄之日記一冊、

右遣ス、

十六日シラライに到來之返事、

右一通之、

○ 野州へ内狀、

十六日附シラライに到來之返事、且是迄回浦之儀申遣ス、

○ 兩名宛別紙、

作方之様子、是迄之模様、

在住之次第夫々申遣ス、靱負ハイシカリ詰申達候様、

イシカリ表發後之様子等、くゞくゞ金助談一之趣等、夫々申遣ス、

○ 織部へ内狀、

三月廿二日之返事并是迄來り候趣等申遣ス、

風聞書一冊、

イシカリ荷物直艫之義付、相伺候書付、

安政五年四月十五日

一七七

安政五年四月十五日

一七八

右小印濟存寄無之ハ進達之義申遣ス、

右金助申立候書面、

廿三日織部内狀廻ス、

右一同封一野州へ廻ス、

右御用狀油紙包箱入觸書添相渡ス、

一當所役土人酒、極老・孤獨ものへ新錢遣ス、

一庄助へ武鑑・のり一箱遣ス、

一金助・豊之助へ同斷遣ス、

四月廿六日、曇、晝頃晴、

六十八度

一今朝五半時勇武津出立、一リ、

平原計、

トママノスケクスへ 小休 一り

ウツナイ 小休 一り

少々山道、密林之中道、 同 廿四丁

ビ、フト

平地、立木多し、

ウエンナイ 晝休 一り廿丁

少し山道有り、

新道十七町ろと出来、道よし、

ルイカンコツ 小休 一り半

平地、道極よし、

千年川ニ至ル

八時過千年川會所に着泊、六リ半ヨ、

一ヲタルナイ詰宇都木頼母・野崎小左衛門來ル、面會、

四月廿七日、朝曇、晝頃晴、

一今朝五時前千年川出立、同所へ乗船、千年川通りイサリフトこる晝飯休、又御船こる津

石狩に八半時着、通行屋泊、船路十五リ、

一齋宮・金助同船致ス、

一傳次郎請負人差免こ成候へとも、今日明日之泊所等取扱向致し度段申立こ付、承置候事、

一供減しこ付、鎗一筋こる來ル、清司并中間共大勢千年川こ残り置、上下拾二人也、

安政五年四月十五日

一七九

安政五年四月十五日

一八〇

四月廿八日、曇、晝頃晴、

一今朝五時前ツイシカリ出立、舟こゝる下り、發作部フトこゝる晝休、丸木舟こ乗替、發作部川入五里半、屈曲多く、午未こ入八半時發作部に着船、在住宅開墾場見置、能切開出來之、在住宅新キ明き分に止宿致ス、

一當所在住一同相越ス、一人充面會致ス、顯輔ハ病氣こ付不出、

一フルヒラ下役栗山勇太郎來ル、面會、

一字都木頼母イシカリ御用當分兼勤之儀、金助申立、尤之儀こ付、小印濟遣ス、同人方爲申渡候事、

四月廿九日、曇、折々小雨有り、南風寒し、

一今朝六半時發作部出立、二十町ヨ、

發作部新道休所 小休 一り

小島川 同 一り

小島川こ中川・中嶋之開發場有、農夫有り、田地も試こ仕つけ、苗代有、生立よし、兩人とも出居一見致ス、此邊地味よし、

豊平 晝休 一り

小屋三棟有、通行建る積り、昨年織部此小屋こ泊よし、中飯、

モロキシヤブ 小休 一り

此邊方少々うねり坂有り、

ラウチナイ 一り

ウエンナイ 一り

ワツチ 同 一り半

此所こゝる小辨當、

此邊山道登り下り多し、谷に下りて、シユマ、フ川橋有、イシカリ・ユウフツ境之、

シユマ、フ 同 一り半

立派こ小休所出來有、是方道大こよし、下り登り少し、

ベケレベ 野立 一り九丁

イカンフシ 小休 一り七丁

小屋腰掛有、

ヲサツ川 野立 一り十一丁

小橋有、

安政五年四月十五日

一八一

安政五年四月十五日

一八二

七時過千歳川會所に着泊、十三リヨ、々々の道發作部サツホロ山裾こそひ、密林の下道又ハ原山坂多し、まうー平地多し、地味宜、木立よし、開墾をせし限もあき地所へ、イシカリ持之新道甚麗よして不宜、追々手入之積り金助へ談し置、ユウフツ之方新道大に出來よし、

五月朔日、朝小雨、夕晴、 寒暖計六十度

一今朝五時過千歳川旅宿出立、一リ半、

ルイカンコツ 小休 三十町

ヒバ 同

此所を乗船、ユウフツ川を下ル、三十丁過て、

ウエンナイ 晝休

上陸、中飯、又船に乗、四リ、

九半時過ユウフツに着船、會所に泊、六リ半、

一新家鐵作モロランカシヤマニに相越ス、昨夜ユウフツ泊之由くる、置手紙有之、

一サル詰笠原源吾來ル、

五月二日、晴、 六十一度

湧拂ニ歸ル

一今朝五時過ユウフツ出立、一リ、

原、

トユウフツ 小休 三十三丁

アツマ川 同 一り七丁

渡船、是を柏林多し、

イルシカヘツ 同 一り十四丁

ムカハ 晝休 一り十丁

渡船、

ユウフツ 境を八丁、

ファイバフ 小休 一り八町

サルフト 同 一り

船渡し、

トンニカ 同 一り

七時前サル會所に着泊、九里、

一ユウフツ支配人金兵衛、都る行届候を付、出立前呼出し、褒遣ス、

沙流ニ至ル

安政五年四月十五日

一八三

安政五年四月十五日

一八四

一同人に縮緬一反遣ス、

一鈴木庄助へ貳百疋遣ス、鹽辛等出ス付、

一同心喜多川晋次・番代庄助次男幸松、昨日申渡濟こゑ、禮こ出ル、

一サルこゑ當所詰下役・同心、着悦こ出ル、面會、

五月三日、晴、

六十四度

一今朝五半時サル出立、一り半、

チャラセナイ

小休 一り半

フクモミ

晝休 貳十八丁

渡船サルニイカツフ境、

アツヘツ

小休 一り四丁

海岸山裾道、

セツフ

同 一り四丁

同斷、

新冠ニ至ル

八時ニイカツフに着泊、六り、

一今朝出立前サル役土人十貳人酒遣ス、極老・孤獨ものへ新錢例之通遣ス、
十二人

一旅宿へ須藤甚之助并シツナイ詰岡野勇吉出迎來ル、何きも面會、

一鈴木庄助・同歳一郎サルが引取、

一齋宮持場今日切こ付、肴遣ス、

五月四日、快晴、

一今朝五半時ニイカツフ出立、一り、

ニイカツフ川渡船、

小休 一り

シンヌツ

小休所々三丁計過て、小川有、ニイカツフ境、
シツナイ

是か甚之助持、

シビチャリ

同 一り

小休所川端、シビチャリ川早瀬渡船、

此間素濱こゑ、

ウセナイ

晝休 一り

番やシツナイ出張、

モンヘツ

小休 三十丁

安政五年四月十五日

一八五